
秩父郡皆野町

妙音寺／妙音寺洞穴

一般国道140号(皆野町地内)関係埋蔵文化財発掘調査報告

— I —

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



妙音寺遺跡遠景



寺院跡調査区全景



妙音寺洞穴遺跡全景



洞穴部近景



縄文時代遺物包含層断面 (6列)



縄文時代遺物包含層断面 (J列)



屈葬人骨



灰層と直下の腐植質土



調査区南東壁面



調査区南西壁面



第1号・第2号炉跡

序

一般国道140号は、埼玉県熊谷市を起点とし、秩父郡長瀬町、秩父市、大滝村など、県内9市町村を経て山梨県南巨摩郡増穂町に至る延長182kmの主要幹線道路です。また、この道路は埼玉・山梨両県を結ぶ唯一の道路でもあります。

古くは秩父往還とよばれたこの道は、秩父観音霊場巡拝の道として多くの人々が通り、江戸時代から大正までは秩父大滝村に産した繭を塩山の繭取引所に運ぶ交易の道として利用されてきました。

ところが、生糸生産や人馬運搬の衰退、これにかわる車社会の到来とともに、車道をもたない雁坂峠付近は日々の生活実感から退き、登山者が往來する野辺の道として細々と維持されていました。

しかし、ようやく平成10年4月、長く閉ざされていた甲武国境を貫く雁坂トンネルが開通を迎えました。これにより、一般国道140号は秩父地域の局地的な通勤・観光のみならず、中部地方と関東平野をつなぐ新たな物流の動脈として、よみがえることとなりました。

皆野寄居バイパスは、秩父地内で予想される交通量の増加に対処するため、盆地を縦取る外秩父山地を5本のトンネルで貫く高規格道路です。埼玉県としても、今後の地域活性化を進める上で大きな役割を期待しているところです。

ところで、皆野寄居バイパスの建設予定地には、貴重な遺跡がいくつか知られておりました。そこで、これら埋蔵文化財の取り扱いについては、関係各機関が慎重に協議を重ねてまいりました。

その結果、どうしても避けることのできない遺跡については、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調

整により、当事業団が発掘調査を行い、記録保存の処置をとることになりました。

妙音寺遺跡がある皆野町は、秩父盆地の東郊にあり、岩間を流れ轟く川辺や、緑深い美の山に抱かれるように散在する秩父巡礼札所など、景勝に優れ、文化遺産に恵まれております。

また、埋蔵文化財も縄文時代後晩期の逸品が多く出土した駒形遺跡をはじめ、密度濃く残された中世から戦国時代にかけての山城や館跡など、学術上重要な遺跡も数多く知られる地域でもあります。

発掘調査の結果、思いもかけなかった縄文時代の洞穴遺跡をはじめとして、中・近世に至るまでの資料が発見されました。とくに、妙音寺洞穴遺跡は、県内でも例の少ない完備をはたした洞穴の調査例であり、学術的な注目を集めています。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財保護の基礎資料として、また、学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、発掘調査から本書の上梓に至るまで御指導、御協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路建設課、同皆野寄居バイパス建設事務所、さらに皆野町教育委員会、ならびに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県秩父郡皆野町に所在する妙音寺遺跡・妙音寺洞穴遺跡の発掘調査報告書である。

妙音寺洞穴遺跡については、いくつかの概要や要旨が公開されている（黒坂1996 a～c 他）が、本書を以て最終報告とする。

2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

妙音寺遺跡 (MYO) 洞穴調査区 (MYOD)
埼玉県秩父郡皆野町大字下田野1454番地他
平成7年4月27日付け教文第2-21号

3. 発掘調査は、一般国道140号皆野寄居バイパスの建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち、発掘調査については中村倉司、黒坂禎二、福田聖が担当し、平成7年4月1日から平成7年12月31日まで実施した。

整理報告書作成作業は黒坂が担当した。

5. 遺跡の基準点測量、および航空写真撮影は、朝日テクノ株式会社、また、人骨分析、獣骨・貝類同定、炭化材同定、花粉分析、珪藻分析、14C年代測定、火山ガラス比分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

なお、出土人骨と骨貝類に関する分析では、東

京国立科学博物館馬場悠男、九州大学小池裕子、早稲田大学金子浩昌各先生より格別のご指導を賜った。

6. 発掘調査時の遺構写真撮影は、中村、黒坂、福田が行った。

遺物の写真撮影は黒坂が行った。

7. 出土品の整理及び図版の作成は黒坂が行った。

報告書本文の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、IV及びVI-1を中村・黒坂、その他を黒坂が行った。

また、付編については、各冒頭に執筆者を掲げた。

8. 本書の編集は、黒坂があたった。

9. 本書にかかる資料は、平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

10. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々よりご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）

麻生 優・五十嵐 彰・井田秀和・出縄康行
梅沢重昭・大嶋玄八・大嶋美登・大嶋元久
奥野麦生・小澤 守・金子 款・加茂下 仁
菊地伸之・小林重義・坂本 治・関口誠三郎
谷口康浩・土肥 孝・戸田哲也・野村 智
橋本康司・深田芳行・藤森英二・堀 宏行
堀口萬吉・松本充夫・村松 篤・山口裕久
吉川照章・領塚正浩

凡例

1. 遺跡全体図における X・Y の数値は、国土標準平面直角座標第 K 系（原点：北緯 36 度 00 分 00 秒、東経 139 度 50 分 00 秒）に基づく各座標値を示す。

また、各挿図における方位指示は、すべて座標北をあらわす。

2. 妙音寺遺跡寺院跡の調査におけるグリッドは、座標値 X = 8.290、Y = -64.010 を原点とし、5 m × 5 m で設定した。呼称は、方眼の北西隅の枕名称を用い、南方向アルファベット、東方向数値で指数が増加する方法をとった。

3. 妙音寺洞穴部の調査における基本グリッドは、洞穴の方向性に鑑み、座標値 X = 8.255、Y = -63.930 を原点とし、1 m × 1 m で設定した。呼称は、方眼の北東隅の枕名称を用い、南方向アルファベット、西方向数値で指数が増加する方法をとった。

4. 測量、遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構 石垣・平場…1/30・1/100

供養塔群…1/20・1/80

洞穴部…1/40・1/60・1/80・1/100

洞穴部 検出遺構…1/5・1/10・1/20

遺物等分布図…1/50

遺物 縄文時代 土器…1/2（早期前葉・早期中葉）

1/3（早期後葉以降）

石器…2/3（石鏃）

1/2（小型石器）

1/3（その他）

石製品類…1/2

骨角器…1/1

中近世 古銭…1/1

陶磁器類…1/3

石造物…1/8

その他、遺跡位置図、周辺地形図、遺跡全体図等は、その都度、縮尺率を示した。

5. 測量図におけるドット指示については個別に凡例を示した。ドットを結ぶ線は、両端の遺物が接合関係にあることを表している。

また、土器拓影図中のドット指示は以下の通りである。

●…胎土に繊維を含む

○…胎土に繊維を微量含む

6. 測量図内の網部指示は以下のとおりである。

左下がり斜線…土壌による地山

右下がり斜線…岩盤

砂目…灰層

その他、個別の分割・強調についてはとくに指示していない。

7. 断面測量図中の土層番号は、ローマ数字とアルファベットの組合せが洞穴遺跡全体に通じる基本包含層、算用数字が寺院跡・洞穴ともに遺構個別の観察結果を表す。

また、洞穴遺跡内の土層別遺物取り上げでは、一部の層が識別できず、一括した部分がある。最終的な対応関係は以下の通りである。

Ⅲ灰…Ⅲ F・Ⅲ G・Ⅲ I・Ⅲ H 層

Ⅲ腐…Ⅲ J・Ⅲ L 層

8. 本文・観察表中の記載基準は以下の通りである。

標高・遺構計測値…m 単位

遺物計測値…cm/g 単位

また、本文中の色調表現は、農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。

9. 文中の引用文献は、(著者 発行年)の順で表現し、参考文献とともに巻末でその一覧を掲載した。

また、付録中の引用参考文献は各節末に示した。

目次

口 絵			
序			
例 言			
凡 例			
目 次			
I 調査の概要	1		
1. 発掘調査に至るまでの経過	1		
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2		
(1) 発掘調査	2		
(2) 整理・報告書作成	2		
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3		
II 遺跡の立地と環境	4		
III 遺跡の概要	11		
IV 妙音寺遺跡寺院跡の調査	13		
1. 寺院跡の概要	13		
(1) 調査の方法	13		
(2) 検出遺構	13		
2. 遺構と遺物	15		
(1) 平場・水田および石垣	15		
(2) 道路	20		
(3) 供養塔群	20		
V 妙音寺洞穴遺跡の調査	29		
1. 遺跡の概要	29		
(1) 洞穴の発見	29		
(2) 調査の方法	29		
(3) 遺構と包含層の概要	32		
2. 洞の観察	35		
(1) 洞と前庭部	35		
(2) 洞の形成	38		
(3) 土層の観察	41		
3. 検出遺構	57		
(1) 屈葬墓	57		
(2) 伊跡	60		
(3) 配石	62		
(4) 土壇	62		
(5) 柱穴	62		
4. 遺物の出土状態	63		
(1) 遺物出土の全体相	63		
(2) 土器の出土状態	67		
(3) 石器の出土状態	106		
(4) 骨貝類の出土状態	139		
5. 出土遺物	163		
(1) 出土土器	163		
(2) 出土石器	191		
(3) 出土骨角器	245		
VI まとめ	247		
1. 妙音寺遺跡	247		
(1) 調査区から	247		
(2) 妙音寺遺跡の性格	248		
2. 妙音寺洞穴遺跡	249		
(1) 出土遺物	249		
(2) 検出遺構	252		
(3) 包含層の埋没状況	253		
(4) 妙音寺洞穴遺跡の変遷	258		
引用参考文献	263		
付 編	265		
1. 妙音寺洞穴遺跡の時代観と古環境	267		
2. 妙音寺洞穴遺跡出土の骨貝類	273		
3. 妙音寺洞穴遺跡出土の縄文時代早期人骨	281		
抄 録			

挿図目次

第1図	秩父盆地北東部の地形イメージ	4	第34図	出土土器の類別平面分布	69
第2図	遺跡の位置と周辺の主要遺跡	5	第35図	土器1～3類の平面分布	70
第3図	遺跡周辺の地形イメージ	6	第36図	土器4類の平面分布	71
第4図	皆野・長瀬周辺の地形と縄文遺跡	8	第37図	土器5～8類の平面分布	72
第5図	関東山地と洞穴遺跡	9	第38図	土器1～3類の平面接合関係	74
妙音寺遺跡			第39図	土器4類の平面接合関係	75
第6図	妙音寺遺跡調査区と周辺地形	11	第40図	土器5～8類の平面接合関係	76
第7図	妙音寺遺跡寺院跡調査区	14	第41図	洞穴内の土器出土層比率	91
第8図	第1～第3平場、第1～第3石垣、水田	16	第42図	洞穴内土層別の出土土器	92
第9図	第4石垣	18	第43図	前庭部ブロック別の出土土器	94
第10図	第5石垣	19	第44図	3～6列上の土器垂直分布	96
第11図	第1供養塔群	21	第45図	7～9列上の土器垂直分布	97
第12図	第1供養塔群出土遺物および五輪塔	22	第46図	10・11・J列上の土器垂直分布	98
第13図	第1供養塔群五輪塔	23	第47図	K・L・洞穴主軸上の土器垂直分布	99
第14図	第1供養塔群板碑	24	第48図	土器の相対深度別出土比率	101
第15図	第2供養塔群	26	第49図	土器の類別出土相対深度	102
第16図	第3供養塔群	27	第50図	土器の全分類別出土相対深度	103
第17図	第4供養塔群	28	第51図	土器4類の相対深度別出土比率	105
妙音寺洞穴遺跡			第52図	出土石器製品の類別比率	106
第18図	妙音寺洞穴遺跡全体図	30	第53図	出土石器の類別平面分布	108
第19図	断面図作成・分層調査・水洗選別の範囲	31	第54図	石器1・2類の平面分布	109
第20図	遺構と灰層の位置	33	第55図	石器3類の平面分布	110
第21図	調査完了後等高線図	35	第56図	石器4～7類の平面分布	111
第22図	前庭部の地形イメージ	37	第57図	石器8類の平面分布	112
第23図	三沢川段丘と洞穴	39	第58図	洞穴内土層別の出土石器	130
第24図	土層観察の客観度	43	第59図	前庭部ブロック別の出土石器	132
第25図	2～5・H列断面図	45	第60図	3～6列上の石器垂直分布	134
第26図	6・10列・洞穴主軸・調査区東南断面図	48	第61図	8・10・J列上の石器垂直分布	135
第27図	J列断面図	53	第62図	洞穴内の石器出土層比率	136
第28図	屈葬墓(1)	58	第63図	石器の全分類別出土相対深度	137
第29図	屈葬墓(2)	59	第64図	石器1・3類と8類の相関	138
第30図	炉跡・配石・土壇・柱穴	61	第65図	出土骨貝類の種別比率	139
第31図	出土遺物の平面分布	65	第66図	骨貝類の種別出土相対深度	161
第32図	出土骨貝類の平面分布	66	第67図	5・6・J列上の骨貝類垂直分布	162
第33図	出土土器の類別比率	67	第68図	洞穴遺跡出土土器(1)	164

第69図	洞穴遺跡出土土器 (2)	166	第106図	洞穴遺跡出土土器 (21)	217
第70図	洞穴遺跡出土土器 (3)	167	第107図	洞穴遺跡出土土器 (22)	218
第71図	洞穴遺跡出土土器 (4)	169	第108図	洞穴遺跡出土土器 (23)	219
第72図	洞穴遺跡出土土器 (5)	170	第109図	洞穴遺跡出土土器 (24)	220
第73図	洞穴遺跡出土土器 (6)	171	第110図	洞穴遺跡出土土器 (25)	222
第74図	洞穴遺跡出土土器 (7)	173	第111図	洞穴遺跡出土土器 (26)	224
第75図	洞穴遺跡出土土器 (8)	174	第112図	洞穴遺跡出土土器 (27)	225
第76図	洞穴遺跡出土土器 (9)	176	第113図	洞穴遺跡出土土器 (28)	226
第77図	洞穴遺跡出土土器 (10)	178	第114図	洞穴遺跡出土土器 (29)	227
第78図	洞穴遺跡出土土器 (11)	180	第115図	洞穴遺跡出土土器 (30)	229
第79図	洞穴遺跡出土土器 (12)	181	第116図	洞穴遺跡出土土器 (31)	230
第80図	洞穴遺跡出土土器 (13)	182	第117図	洞穴遺跡出土土器 (32)	231
第81図	洞穴遺跡出土土器 (14)	183	第118図	洞穴遺跡出土土器 (33)	233
第82図	洞穴遺跡出土土器 (15)	184	第119図	洞穴遺跡出土骨角器	246
第83図	洞穴遺跡出土土器 (16)	185	第120図	洞穴調査区土器分布限界の模式図(1)	256
第84図	洞穴遺跡出土土器 (17)	188	第121図	洞穴調査区土器分布限界の模式図(2)	257
第85図	洞穴遺跡出土土器 (18)	190	第122図	妙音寺洞穴遺跡の変遷模式図(1)	260
第86図	洞穴遺跡出土土器 (1)	192	第123図	妙音寺洞穴遺跡の変遷模式図(2)	261
第87図	洞穴遺跡出土土器 (2)	194	付 編		
第88図	洞穴遺跡出土土器 (3)	196	付編 2		
第89図	洞穴遺跡出土土器 (4)	197	第124図	出土貝類の検出率	279
第90図	洞穴遺跡出土土器 (5)	198	第125図	出土骨類の検出率	279
第91図	洞穴遺跡出土土器 (6)	200	付編 3		
第92図	洞穴遺跡出土土器 (7)	202	第126図	妙音寺洞穴遺跡出土一号男性人骨の右大腿 骨と右脛骨の骨体中央の断面輪郭	285
第93図	洞穴遺跡出土土器 (8)	203	第127図	頭蓋計測値の偏差折線	289
第94図	洞穴遺跡出土土器 (9)	204	第128図	下顎骨計測値の偏差折線	289
第95図	洞穴遺跡出土土器 (10)	205	第129図	頭蓋示数の偏差折線	289
第96図	洞穴遺跡出土土器 (11)	206	第130図	脳頭蓋計測値の偏差折線	289
第97図	洞穴遺跡出土土器 (12)	208	第131図	顔面頭蓋計測値の偏差折線	290
第98図	洞穴遺跡出土土器 (13)	209	第132図	下顎骨計測値の偏差折線	290
第99図	洞穴遺跡出土土器 (14)	210	第133図	頭蓋示数の偏差折線	290
第100図	洞穴遺跡出土土器 (15)	211	第134図	歯冠頸舌径の偏差折線	290
第101図	洞穴遺跡出土土器 (16)	212	第135図	上肢骨計測値の偏差折線	292
第102図	洞穴遺跡出土土器 (17)	213	第136図	下肢骨計測値の偏差折線	292
第103図	洞穴遺跡出土土器 (18)	214	第137図	上肢骨計測値の偏差折線	292
第104図	洞穴遺跡出土土器 (19)	215	第138図	下肢骨計測値の偏差折線	292
第105図	洞穴遺跡出土土器 (20)	216			

表目次

妙音寺洞穴遺跡		第35表	ブロック別出土骨貝集計表 (1-2)	143
第1表	グリッド別出土土器集計表	第36表	ブロック別出土骨貝集計表 (2-1)	144
第2表	ブロック別出土土器集計表 (1)	第37表	ブロック別出土骨貝集計表 (2-2)	145
第3表	ブロック別出土土器集計表 (2)	第38表	ブロック別出土骨貝集計表 (3-1)	146
第4表	ブロック別出土土器集計表 (3)	第39表	ブロック別出土骨貝集計表 (3-2)	147
第5表	ブロック別出土土器集計表 (4)	第40表	ブロック別出土骨貝集計表 (4-1)	148
第6表	ブロック別出土土器集計表 (5)	第41表	ブロック別出土骨貝集計表 (4-2)	149
第7表	ブロック別出土土器集計表 (6)	第42表	ブロック別出土骨貝集計表 (5-1)	150
第8表	ブロック別出土土器集計表 (7)	第43表	ブロック別出土骨貝集計表 (5-2)	151
第9表	ブロック別出土土器集計表 (8)	第44表	ブロック別出土骨貝集計表 (6-1)	152
第10表	ブロック別出土土器集計表 (9)	第45表	ブロック別出土骨貝集計表 (6-2)	153
第11表	ブロック別出土土器集計表 (10)	第46表	ブロック別出土骨貝集計表 (7-1)	154
第12表	ブロック別出土土器集計表 (11)	第47表	ブロック別出土骨貝集計表 (7-2)	155
第13表	ブロック別出土土器集計表 (12)	第48表	ブロック別出土骨貝集計表 (8-1)	156
第14表	ブロック別出土土器集計表 (13)	第49表	ブロック別出土骨貝集計表 (8-2)	157
第15表	グリッド別出土土器集計表	第50表	ブロック別出土骨貝集計表 (9-1)	158
第16表	ブロック別出土土器集計表 (1)	第51表	ブロック別出土骨貝集計表 (9-2)	159
第17表	ブロック別出土土器集計表 (2)	第52表	出土石器観察表 (1)	234
第18表	ブロック別出土土器集計表 (3)	第53表	出土石器観察表 (2)	235
第19表	ブロック別出土土器集計表 (4)	第54表	出土石器観察表 (3)	236
第20表	ブロック別出土土器集計表 (5)	第55表	出土石器観察表 (4)	237
第21表	ブロック別出土土器集計表 (6)	第56表	出土石器観察表 (5)	238
第22表	ブロック別出土土器集計表 (7)	第57表	出土石器観察表 (6)	239
第23表	ブロック別出土土器集計表 (8)	第58表	出土石器観察表 (7)	240
第24表	ブロック別出土土器集計表 (9)	第59表	出土石器観察表 (8)	241
第25表	ブロック別出土土器集計表 (10)	第60表	出土石器観察表 (9)	242
第26表	ブロック別出土土器集計表 (11)	第61表	出土石器観察表 (10)	243
第27表	ブロック別出土土器集計表 (12)	第62表	出土石器観察表 (11)	244
第28表	ブロック別出土土器集計表 (13)	付 編		
第29表	ブロック別出土土器集計表 (14)	付編 1		
第30表	ブロック別出土土器集計表 (15)	第63表	土壌試料と分析層位	268
第31表	ブロック別出土土器集計表 (16)	第64表	火山ガラス比分析結果	269
第32表	ブロック別出土土器集計表 (17)	第65表	珪藻分析結果	270
第33表	グリッド別出土骨貝集計表	第66表	花粉分析結果	270
第34表	ブロック別出土骨貝集計表 (1-1)	第67表	炭化材・種実遺体同定結果	271

第68表	妙音寺洞穴遺跡出土の一号男性人骨の頭蓋計測値	282
第69表	妙音寺洞穴遺跡出土の一号男性人骨の歯冠頰舌径	284

第70表	妙音寺洞穴遺跡出土の一号男性人骨の上肢骨と下肢骨の計測値	286
------	------------------------------	-----

図版目次

口 絵

- 口絵1 妙音寺遺跡遠景、寺院跡調査区全景
 口絵2 妙音寺洞穴遺跡全景、洞穴部丘景
 口絵3 縄文時代遺物包含層断面（6列）、
 縄文時代遺物包含層断面（J列）
 口絵4 屈葬人骨、灰層と直下の腐植質土、
 調査区南東壁面、調査区南西壁面、
 第1号・第2号炉跡

妙音寺遺跡

- 図版1 妙音寺遺跡遠景、
 妙音寺遺跡航空写真（西から）
 図版2 妙音寺遺跡航空写真（東から）、
 寺院跡調査区全景
 図版3 第2・第3平場（北から）、
 第2・第3平場（南から）
 図版4 第1・第2石垣、第2石垣（南から）
 図版5 第1石垣北、第1石垣中央、第1石垣南、
 第1石垣裏込、第2石垣北、第2石垣中央、
 第2石垣南、第2石垣裏込
 図版6 第3石垣、第3石垣部分、第3石垣裏込、
 第4石垣、第4石垣4、第5石垣1、
 第5石垣2、第4・第5石垣間の堂の入沢
 図版7 第1供養塔群、第1供養塔群調査着手前、
 第1・第4供養塔群、
 第1供養塔群と岩の露頭、
 第1供養塔群下層五輪塔出土状況
 図版8 第2供養塔群、第2供養塔群下層石組、

- 第3供養塔群、第3供養塔群調査着手前、
 第3供養塔群立塔の状況、
 第3供養塔群下層石組、
 第4供養塔群、第4供養塔群下層石組

- 図版9 第1供養塔群五輪塔、第1供養塔群出土遺物
 図版10 第1供養塔群版碑、第2供養塔群供養塔
妙音寺洞穴遺跡

- 図版11 妙音寺洞穴遺跡全景、妙音寺洞穴遺跡近景
 図版12 洞穴部、前庭部
 図版13 洞穴と基盤の雨垂れ崖、前庭部から見た洞穴
 図版14 棚状部、洞穴奥
 図版15 洞穴と下位の段丘、岩底部、
 洞穴天井の亀裂（1）、洞穴天井の亀裂（2）、
 洞穴からの光景
 図版16 6列土層断面（1）、6列土層断面（2）
 図版17 J列土層断面、6列・J列断面と前庭部北
 図版18 調査区南壁断面、調査区南・西壁断面
 図版19 洞穴の発見
 図版20 屈葬人骨、人骨出土地点、
 脚部石繰出土状況
 図版21 第1号土壇断面、第2号土壇、
 第1号炉断面、第1号炉断面と第2号炉、
 第2号炉、第3号炉、配石、柱穴
 図版22 洞穴内3GⅢM層遺物出土状況、
 洞穴内3H灰層骨貝類出土状況
 図版23 洞穴内2HⅢK層遺物出土状況、
 洞穴内3HⅢM層遺物出土状況、

	洞穴内 3 H III M層遺物出土状況、	図版40	出土土器 (32)、出土土器 (33)
	洞穴内 4 I III L層遺物出土状況、	図版41	出土土器 (34)、出土土器 (2)
	前庭部 4 K-31遺物出土状況	図版42	出土土器 (3)、出土土器 (4)
図版24	前庭部 6 H-33遺物出土状況、	図版43	出土土器 (5)、出土土器 (6)
	前庭部 6 I-31遺物出土状況、	図版44	出土土器 (7)、出土土器 (8)
	前庭部 6 J-32遺物出土状況、	図版45	出土土器 (9)、出土土器 (10)
	前庭部 6 J-29貝製品出土状況、	図版46	出土土器 (11)、出土土器 (12)
	前庭部 6 K-26獣骨出土状況、	図版47	出土土器 (13)、出土土器 (14)
	前庭部 7 J-30遺物出土状況、	図版48	出土土器 (15)、出土土器 (16)
	前庭部 7 L-18遺物出土状況、	図版49	出土土器 (17)、出土土器 (18)
	前庭部 8 J-32遺物出土状況	図版50	出土土器 (19)、出土土器 (20)
図版25	前庭部 9 I-32遺物出土状況、	図版51	出土土器 (21)、出土土器 (22)
	前庭部 9 J-21遺物出土状況、	図版52	出土土器 (23)、出土土器 (24)
	前庭部 9 L-27遺物出土状況、	図版53	出土土器 (25)、出土土器 (26)
	前庭部 9 M-34遺物出土状況、	図版54	出土土器 (27)、出土土器 (28)
	前庭部 9 M-34遺物出土状況、	図版55	出土土器 (29)、出土土器 (30)
	前庭部 9 M-27遺物出土状況、	図版56	出土土器 (31)、出土土器 (32)
	前庭部10 K-32遺物出土状況、	図版57	出土土器 (33)、出土土器 (34)
	前庭部10 L-29遺物出土状況	図版58	出土土器 (35)、出土土器 (36)
図版26	出土土器 (1)、(2)、(3)、(4)、(5)、 出土土器 (1)	図版59	出土土器 (37)、出土土器 (38)
図版27	出土土器 (6)、出土土器 (7)	図版60	出土土器 (39)、出土土器 (40)
図版28	出土土器 (8)、出土土器 (9)	図版61	出土土器 (41)、出土土器 (42)
図版29	出土土器 (10)、出土土器 (11)	図版62	出土土器 (43)、出土土器 (44)、出土垂飾
図版30	出土土器 (12)、出土土器 (13)	図版63	出土骨角器
図版31	出土土器 (14)、出土土器 (15)	図版64	出土骨類 (1)、出土骨類 (2)
図版32	出土土器 (16)、出土土器 (17)	図版65	出土骨類 (3)、出土具類
図版33	出土土器 (18)、出土土器 (19)	付 編	
図版34	出土土器 (20)、出土土器 (21)	付編 3	
図版35	出土土器 (22)、出土土器 (23)	図版66	妙音寺洞穴遺跡出土一号人骨の頭蓋と下顎骨
図版36	出土土器 (24)、出土土器 (25)	図版67	妙音寺洞穴遺跡出土一号人骨の上肢骨
図版37	出土土器 (26)、出土土器 (27)	図版68	妙音寺洞穴遺跡出土一号人骨の下肢骨
図版38	出土土器 (28)、出土土器 (29)	図版69	妙音寺洞穴遺跡出土一号人骨にみられる特徴
図版39	出土土器 (30)、出土土器 (31)	図版70	妙音寺洞穴遺跡出土一号人骨にみられる特徴、 妙音寺洞穴遺跡出土二号人骨

I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県全域が都心から100kmの圏内に含まれる。県では快適でうるおいのある生活空間の形成のために、道路網の整備を進めている。「県内1時間道路網構想」を推進し、高速道路、地域高規格道路、インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路などの、幹線道路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備計画である。

一般国道140号皆野寄居バイパスもこうした事業の一つである。

平成7年1月13日付け道建第356号で、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、埼玉県土木部道路建設課長から埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長あて紹介があった。それに対して文化財保護課よ、平成7年2月28日付け教文第1066号で、概ね次のような回答をした。

その後、道路建設課と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であり、記録保存の処置を講ずることになった。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査期間などについて協議し、平成7年4月1日～平成7年12月31日までの期間、発掘調査を実施することとした。

文化財保護法第57条3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に関わる通知は以下のとおりである。

平成7年4月27日付け 教文第2-21号

(文化財保護課)

1 埋蔵文化財の所在

名 称	種 別	時 代	所 在 地
妙音寺跡 (47-073)	集落跡 寺院跡	縄文・戦国	皆野町大字下田野

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については当課と別途協議してください。

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

〔平成7年4月〕上旬の準備段階を経て、現場事務所を設置するとともに、重機による平場や石垣上の表土削除を開始し、下旬には人力による掘削に着手した。

〔5月〕上旬に補助員を加え、石垣の細かな現況測量を行った後、下旬に遺跡の航空写真撮影、および測量を行った。

〔6月〕上旬より石垣の断ち割り、および用地内に残る供養塔群の測量を開始した。

〔7月〕引続き石垣と供養塔群の調査を行なう。だが、中旬、第1供養塔群の調査中、下層に縄文時代の洞穴遺跡が存在することが判明、善後策を協議するとともに、試掘を行い状況把握に努めた。その一方で、妙音寺寺跡の調査は下旬にすべてを終了した。

〔8月〕洞穴部の試掘の結果、洞穴の奥行きは判断できないものの、縄文遺物を含む層は少なくとも50㎡、深さは2mを超えて遺存していることが判明した。このため、表層に厚く堆積する縄文中期以降の岩盤崩落土までを重機で除去し、前期包含層以下の調査を対象を限定することとした。

〔9月〕8月に引続き前庭部の調査を行なうとともに、洞穴内の精査にも着手、中旬には落石防止のネットと洞穴落盤防止の枠組を取付けた。洞穴入口には1mを超す灰の層が堆積し、構築破壊を繰り返した石組跡や動物骨、貝類が大量に出土、調査より予想外に手間取ることとなった。

〔10月〕さらに洞穴・前庭部の精査を続けるが、上旬には洞穴奥の全容が判明、下旬には約8割の工程にまで達した。また、28日には地元住民対象の遺跡現地説明会を開催し、約200人の来訪者を迎えた。

〔11月〕前庭部では、上旬に縄文包含層の途切れる地山層や岩盤の一部が到達し、工程の9割程度に達したものと判断していた。しかし、直後に、堆積土層観察用ベルト部分から屈葬人骨が出土し、周辺部の調査に手が及ばなくなる危険が生じた。急遽対応策を計った

結果、発泡ウレタンの包み込みによって周辺土壌ごと埋蔵文化財センターに移動し、詳しい調査は同所で加えることとした。取り急ぎ現場での測量、写真撮影を行うとともに、中旬にウレタン梱包、センターへの移動を完了した。人骨取り上げ後、調査は順調に進み、下旬には人力掘削面での作業を終了した。さらに、同月のうちには防護ネット等を取り外し、写真撮影および補足測量を実施し、これを完了した。

〔12月〕上旬に委託測量を実施した後、重機による段丘崖の検出調査を経て、すべての現場作業を終了した。その後、洞穴入口の灰層から出土した動物骨や貝類の水洗選別を続行し、下旬、器材等撤収、現場事務所解体をもって発掘事業を完了した。

(2) 整理・報告書作成

〔平成9年8月・9月〕遺物搬入後、写真整理、図面整理を行う。また、土壌水洗遺物を分類・抽出し、掲載候補遺物を再水洗・注記する。また、並行して土器の接合、石器分類を開始する。

〔10月～12月〕土器の接合・復元と石器分類を継続し、土器・石器・骨貝類の統計データを収集、入力を行う。また、寺跡部分の図面編集を行う。

〔平成10年1月～3月〕統計製作の継続とともに、土器拓本と洞穴部分の図面編集、周辺遺跡に関する作図を開始する。

〔6月～9月〕4・5月の中断を経て整理作業を再開、3月からの継続作業に加えて石器実測を行う。また、遺構関係や土器から印刷用版下の製作を開始、統計操作による各種データや一覧表も出力・検証する。

〔10月～12月〕石器実測図の墨入れと統計関連の作業を継続しつつ、最終的な割付と執筆を行う。また、遺物写真を撮影し、集成図類の版下を作成する。

〔平成11年1月～3月〕版下・原稿などの最終確認と前後して入札を実施し、3回の校正を経て報告書の刊行に至る。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査(平成7年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 吉川 國男
常務理事
兼管理部長 新井 秀直
理事
兼調査部長 小川 良祐

管理部

庶務課長 及川 孝之
主査 市川 有三
主任 長滝 美智子
主事 菊池 久

専門調査員
兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一夫
調査第一課長 坂野 和信
主任調査員 中村 倉司
主任調査員 黒坂 禎二
調査員 福田 聖

(2) 整理事業(平成9・10年度)

理事長 荒井 桂(9・10)
副理事長 富田 真也(9)
飯塚 誠一郎(10)
専務理事 塩野 博(9)
常務理事
兼管理部長 稲葉 文夫(9)
鈴木 進(10)

理事
兼調査部長 梅沢 太久夫(9)

管理部

庶務課長 依田 透(9)
金子 隆(10)
主査 西沢 信行(9)
田中 裕二(10)
主任 長滝 美智子(9・10)
主任 腰塚 雄二(9・10)

専門調査員
兼経理課長 関野 栄一(9・10)
主任 江田 和美(9・10)
主任 福田 昭美(9・10)
主任 菊池 久(9・10)

資料部

資料部長 谷井 彪(9)
増田 逸朗(10)

主幹兼
資料部副部長 小久 保徹(9・10)

専門調査員兼
資料整理第一課長 坂野 和信(9・10)
主任調査員 黒坂 禎二(9・10)

II 遺跡の立地と環境

北の妙義荒船から南の丹沢山塊に至る関東山地は、二千を越す峰々を交えつつ、関東平野の西部を縁取っている。もって関東と甲信の境となるこの山地の東西では、ときに1,000 mを越すほどの比高差が、気候をはじめとする両者の対称をあざやかに映し出す要因となっている。

関東平野を流下する諸河川の軌跡は、巨視的に見れば、多くが緩やかな曲直線を描きつつ、この山地に迫っている。その中で唯一、巨大な屈曲・蛇行を経験するのが荒川である。

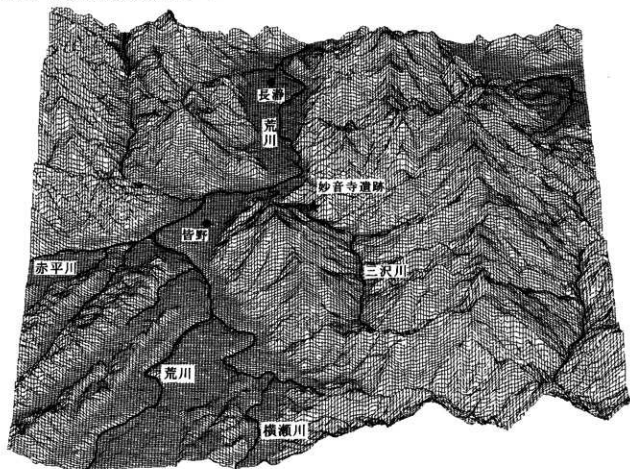
その蛇行部を起点とし、南へと連なる外秩父山地は、標高1,000 mに達することのない低山の集まりだが、関東山地に併走するかのよう起伏を繰り返す峰々が

荒川の流路を決定し、関東唯一の本格的な盆地である秩父盆地を育むこととなった。

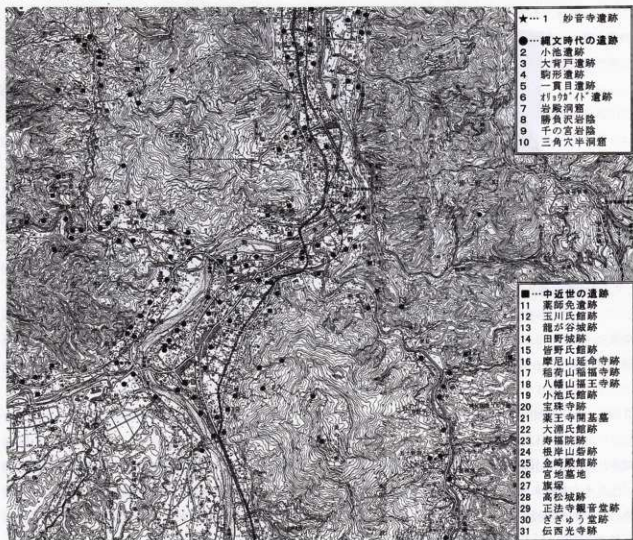
奥秩父の甲武信岳を源を発する荒川本流は、険しいV字谷を形成しつつ、蛇行東流を重ね、秩父市浦山口でその奔流を北に向ける。この付近より谷幅は大きく間口を広げ、南北に長い秩父盆地主体部を形づくるとともに、大きく3段の段丘面を刻み込む。

一方、関東山地志賀坂峠付近を源とする赤平川は、途中、小巻野盆地を従えつつ、荒川と並行するような流れの方向をとり、秩父郡皆野町内で荒川本流と合流する。この付近では、三沢川、日野沢川など、複数の河川が相次いで荒川本流にそそぎ込み、それらの開析によってあたかも秩父盆地主体部にとりつくような

第1図 秩父盆地北東部の地形イメージ



第2図 遺跡の位置と周辺の主要遺跡 (1/50,000)



小盆地が形成されている。

豊かな水量を得た荒川は、その北半では石畳で名高い名勝長湍を生み、そして、秩父盆地の北端を画する波久礼の蛇行部を経て、大里郡寄居町を要とする荒川扇状地、すなわち関東平野へと至る。

このような地形的環境は、秩父地域独自の独立した文化様態をはぐくむ背景ともなった。往古設けられた「知知夫国」の歴史は、この地形・文化的独立性が具現化した端的な例であろう。そして、秩父盆地に集約し、あらためて拡散する限定された経路は、時として交通や流通の先鋭・広域化をうながす効果を生みだす結果となった。

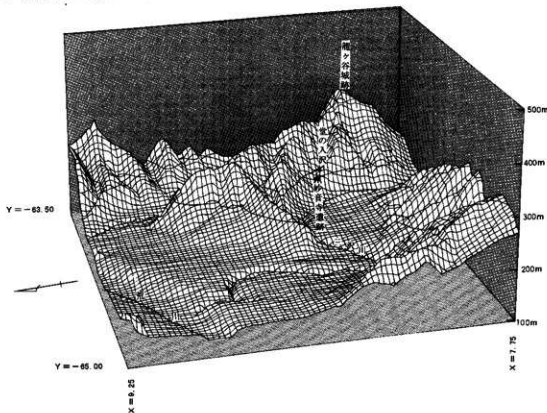
秩父盆地内での旧石器文化は、段丘地形と調査例の

少なさが災いしてか、未解明な部分が多い。だが、縄文以降、現代に至るまで、中部と関東のはざまに位置するとともに、両地方に備わる地形環境の激変を緩和する秩父盆地ならではの広域性が、さまざまな場面で顕在化している。

とくに、中世期では、寺院の隆盛に代表される文化の醸成や、山地ならではの立地を生かした山城の林立、館跡や墓地が朝発にさらされず良好な保存状態のまま残されている例も多いなど、盆地の完結性と地形の独自性をものかいたる遺跡が多く残されている。

また、板碑造立の隆盛は、秩父板石、すなわち緑泥片岩素材の産出なくしては考えられず、秩父盆地の地質の独自性をも表している。その一方で、戦国期に展

第3図 遺跡周辺の地形イメージ



開された北条・上杉・武田の攻防は、盆地の生産力ではなく、交通・情報の要としての地理的な戦略性をめぐるせめぎ合いでもあった。

妙音寺遺跡は、この秩父盆地の東郊を繰取る外秩父山地の裾野に抱かれ、秩父鉄道親鼻駅の東方約1.3kmの距離に位置している。

遺跡が面する三沢川は、皆野町三沢入山地区を源流とし、同町下田野土京地内で荒川と合流する全長7kmほどの小河川である。流路は結晶片岩の岩盤を削り、小刻みに蛇行を繰り返すが、大きな河原の発達は見られず、上流域の河川色が濃い。遺跡は荒川との合流点から1kmほどさかのぼった右岸に立地するが、付近は同川が北上し、下谷作用で刻まれた3段の小規模な河岸段丘が見てとれる。

妙音寺遺跡は、この段丘斜面を利用した、中世から戦国時代にかけての寺院跡として把握されていた。『新編武蔵風土記稿』下田野村の項では「妙音寺 新義真言宗にて、郡中皆野村圓明寺の末なり、除地九畝十歩、

今廢寺となり、山崎明山等を傳へず、本尊如意輪觀音」と記された個所がある。現在のところ、遺跡は、近世後期にはすでに廃寺とされていた、この「妙音寺」に比定されている（梅沢1992）。

また、本遺跡の性格については、他に根小屋説や館説なども取りざたされている。このうち前者は、遺跡の南東400mほどに築造された龍ヶ谷城との関連を重視する。だが、遺跡からの経路は、城跡に通ずる尾根道の中で最も険しく、距離も隔たっている。根小屋は、おなじ三沢川右岸ながら、遺跡より上流の平坦地にあった可能性が強い。

また、そのさらに上流方には、尾根伝いに外秩父釜伏峠を経て寄居鉢形に至る古道があり、付近には中世墳墓が発見された薬師免遺跡や、同じく墳墓の発見とともに、館と考えられる玉川氏館跡-正光寺が残る（関口1988）。これらのことから、時期に前後はあるが、小谷ながら三沢川流域は、中世において龍ヶ谷城を中心とした一つの独立した空間を形作る土壌が備わって

いたと想定できる。

皆野町にはこの他、中世関連の諸施設から近接して残る地域がいくつかある。町西部の国神や、金沢地区にその傾向が顕著で、金沢地区の東では、正法寺観音堂跡など寺塔関係の遺跡が集中している。また、国神でも宮地墓地（西井1998）が付近の宗教的施設の存在を暗示している。

さらに、前者では、高松城跡やその烽火台とされる旗塚が、赤平川をはさんで構築されている。周辺では、寄居町に構えられた鉢形城主北条氏邦や、それに先立つ藤田氏やその配下らによって、各峰や交通の要衝にらみを利かせる戦略拠点網が完備されていた。

国神の二城は、金沢地区の金沢城や浦山城とともに、赤平川上流域や神流川流域を通じた上野や信濃からの備えを担い、戦国期の甲州勢進入の際には実際その矢面に立った。

これに対し、町北端で集約される諸河川が作り出した平坦地、すなわち皆野地区の山裾には、田野城跡・根岸山麓跡の荒川結節点を押さえる軍事施設の他に、館や寺跡が多く造営されている。これらは、摩尼山延命寺・稲荷山稲福寺・八幡山福王寺跡、そして宝珠寺跡など、他を侵さない一定の距離を置いて点在する傾向があり、皆野・金崎殿・小池氏・大淵氏などの諸館跡にも共通する。具体的な継続期には不明な点が多いが、ここにも単位化した中世諸施設が分立対峙していたと考えられる。

この傾向は、実三沢川流域を加えても大きな変化なく、逆に同域の単位化を憶測する手だてともなる。龍ヶ谷城は、天文年間、後に北条に降る藤田右衛門佐康邦（用上新左衛門正光）が築造（『新編武蔵風土記稿』）し、天正末期の鉢形城落城ともなり開城時には北条配下の三上外記の管轄下にあった（『秩父郡誌』）とされている。その間、山麓の根小屋とともに、妙音寺などが遺傳を保ちつづけていた可能性が高い。

だが、龍ヶ谷城の廃城に先立ち、永禄十二年に武田勢が行った「信玄焼き」と称される秩父盆地一帯への焼き討ちは、妙音寺にも甚大な被害をもたらしたと地

元の人々に語り継がれている。あるいは、再建おぼつかないままに寺史の幕を閉じたのかもかもしれない。

そしてもう一つ、今回の事業では、新たに縄文時代のうちにすべてが地中に埋もれた河穴遺跡が偶然発見され、調査を実施した。

第4図に示したとおり、秩父盆地北西部から荒川扇状地にかけては、数多くの縄文遺跡が確認されている。地形との関わりでこれらを見れば、山地、丘陵、盆地、段丘、扇状地など、荒川がはぐくんだ流域相ごとについてくつかの類型と集中が見て取れる。

まず、盆地内では荒川、および赤平川が形成した平坦地に多くの遺跡が立地している。なかでも、秩父市にあたる秩父盆地主体部、皆野・長静地内、そして、赤平川流域の吉田地内に集中する傾向がある。

同図では細かく表現できなかったが、これらの集中はさらに、段丘の低位・上位、加えて山麓の丘陵部に分離できる。だが、三者が隣接する遺跡では生活面が高低をまたがって営まれている可能性もある。同じような傾向は、小川盆地、群馬県鬼石町の神流川周辺などにも認められ、平坦地に恵まれぬ河川・中流域における一般的な傾向であることが察せられる。

だが、遺跡の規模については、調査例が少なく、未解明な点が多い。中期から後期にかけて断続的に集落が営まれ、とくに後期の配石遺構に長じた皆野町野形遺跡（小林・田部井1981）と、小規模な河川をはさんで同種の遺構群が展開する大背戸遺跡（小林他1988）の例など、広範囲の調査が繰り返され、多大な成果を上げた地区はきわめて限られている。

そのなかで、近年では小鹿野町でのダム建設こともない数カ所の遺跡がまとまって調査された（小林・田部井・深田・橋本1995）。赤平川の支川である吉田川の約3kmにわたる流域に分布する遺跡をくまなく調査した結果、合角川入岩陰をはじめとして、合角中組、塚越向山、下平遺跡の4箇所の縄文遺跡で早期から晩期に至る生活の痕跡が確認された。

この一連の調査では、岩陰遺跡の存在をはじめとして、敷石住居跡や列石・配石など石組み遺構に秀で

第4図 皆野・長瀬周辺の地形と縄文遺跡 (1/150,000)



るなど、動・不動に関わらず、豊富な石材環境を巧みに取り入れた生活様態が明らかとなった。だが、対象地は、上流域の蛇行部ともなう小規模な平坦地が対象であり、めまぐるしく変化する盆地内の地形に即した遺跡内部の傾向は、依然として不明な点が多い。

一方、荒川扇状地では、地形の変化に即した遺跡立地の選択制があざやかに現れている。まず、扇の要にあたる寄居町付近では、右岸、なかでも険しい沢に分断された上位段丘のほとんどに縄文時代の遺跡が残る。遺跡の規模は、増善寺(宮崎1982、石塚1995)、むじな塚(今関1990)、露梨原遺跡(小林1997)など、大きな規模と、甘粕原遺跡(並木1978)などの遺構分布が薄く、集落展開が、平坦地の多寡により混在している。

これに対し、下位段丘と左岸にはまれにしか遺跡が認められない。この傾向は下流にいたり、丘陵性の上位段丘が、いままゆる江南台地に移行してもかわること

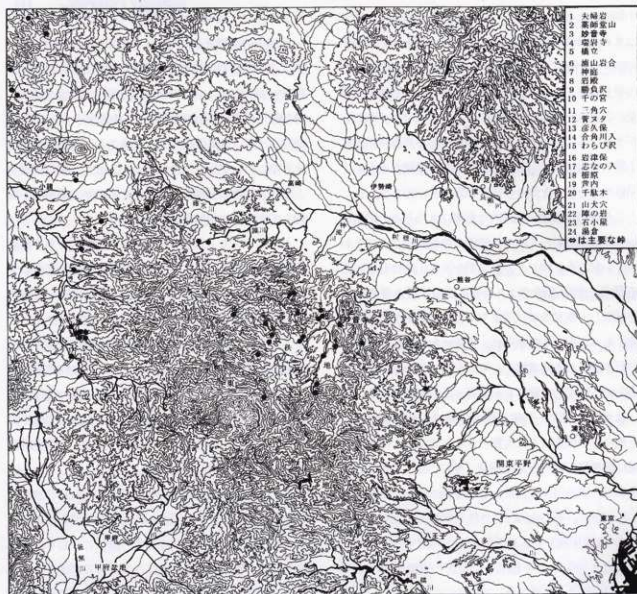
はない。しかし、左岸では、寄居町北塚原遺跡(黒坂1985)、花園町家屋遺跡(市川1983)、同橋屋遺跡(高村1994)、同台耕地遺跡(鈴木1983)など、大規模、拠点的な集落が形成されている。

また、荒川から離れた櫛引台地内では、扇端湧水を抛り所とする花園町宮林遺跡(宮井1985)等、小規模な遺跡群が展開している。加えて、寄居町の北方から美里町・見玉町にかけての沖積地に面した残丘上にも多くの遺跡が立地しているが、これまでのところ、大規模な集落跡の調査例はない。

そして、この他、河川の最上流域のわずかな平坦地、あるいは山腹、山頂などにも縄文遺跡が散在するが、いずれも規模は小さいものと考えられる。

これら遺跡群は、早期後葉より断続的だが普遍的な痕跡を残すようになり、南関東での黒浜期に本格的な膨張のきざしを見せる。そして、前期後半から中期全

第5図 関東山地と洞穴遺跡 (1/800,000)



般にかけて繁栄を保ち続ける。また、後期前半では豊富な石材を背景に、敷石住居跡など、多くの石組み遺構を残し、後期後半から晩期のきわめて限られた遺跡を最後に弥生中期までの空白期こいる。

妙音寺洞穴遺跡は、以上のうち、皆野・長瀬に展開する遺跡集中地区の東に位置している。三沢川流域の遺跡分布は、平坦地の形成状況に反して密度が濃い。これは、外秩父山地を越え、槻川上流域をたどり、遺跡群立地が類似する小川盆地へと至る経路を反映するとも考えられる。

小川盆地東の平松台遺跡では前期中葉に甲州・中

南信地方で製作された「釈迦堂ⅡⅢ式」土器が出土している。同式土器は、両神村薬師堂遺跡(黒坂1992)で、秩父地域への恒常的な流入が明らかとなっている。また、狭山市八木上遺跡(金子1990)や、上福岡市上福岡貝塚(細田1992)での出土例から、外秩父正丸峠付近を経た関東平野への拡散経路が想定できる。

しかし、同じ時期に展開したむじな塚遺跡など寄居町の同期遺跡群では現在までのところ、その報告例がない。この一事だけでは心許ないが、荒川本流や横瀬川流域経路とともに、三沢川をたどる峠を越えた関東平野との交渉を暗示する例でもある。

翻り、秩父地域は、西北関東に通ずる前期後半から中期にわたる繁栄に属しつつも、外秩父以東の台地ではまれな中期初頭の痕跡も、荒川川下段遺跡(金子1989)や大滝村神庭洞窟遺跡(栗島・中村1994)などで発見されている。また、下段遺跡では、近年西北関東から佐久平で資料が増加している「中道・塚田式」がまとまって出土しており、早期後葉の東海系粘板式土器も検出されている。前出の薬師堂遺跡とともに、甲信地方とのつながりの強さを表すといえよう。

これらの現象は、地理的な距離はもちろん、山地という地形環境からくる生活様態の共通に負うところが大きいだろう。同じく、蝕食洞を除き山地特有といえる洞穴・岩陰遺跡では、岩塊に富む地質と浸食地形を反映し、秩父地域は関東でも特段に高密度な分布を示す。もっとも、この密度は、実数にも増して、盆地内の行き渡った道路事情や、労苦を惜しまぬ探訪者の輩出という現代的な環境も一役買っているだろう。

盆地内の洞穴・岩陰遺跡の分布は、荒川本流と、支流の赤平川流域とに大別できる。その他、神流川流域に群馬県万場町岩津保洞窟(今村1981)などが散在するが、三波川変成岩帯とその外縁に存在する傾向にかなり異なる。その成因は、外秩父東麓の越生町夫婦岩岩陰(石川1997)が、巨大な転石を利用する以外は、石灰岩・チャート・結晶片岩などの岩盤が受けた河川の浸食がきっかけとなっている。

一方、関東山地を隔てた信州佐久平の南端では、北相木村栃原岩陰(西沢1982)などの洞穴・岩陰遺跡群が密集して発見されている。こちらは、ハッ岳がもたらした相木川泥流に加わる河川浸食が共通の成因である。また、同県菅平付近の高山村湯倉洞穴(関1982)などの洞穴・岩陰遺跡群では、噴火による溶岩洞穴が数多く発見されている。これらは火山活動という局所的な要因に左右されるため、それぞれが至近に密集し、使用時期がほぼ通いがちである。

これに対し、秩父の洞穴・岩陰群は、信州の二群に見るような特殊要因に依るものではなく、荒川水系の安定した自然営力によって形成されており、極度の

密集が招く特定人の寡占的使用ではなく、適当な分散による分立・共有網が成立しやすい環境にある。

盆地内の既調査遺跡には、荒川本流域で神庭洞窟、秩父市橋立岩陰(芹沢他1974)、同浦山岩合岩陰(田部井・江口1984)、赤平川流域で吉田町彦久保岩陰(小林1966)、皆野町勝負沢岩陰(小林1988)、同三角穴半洞窟(小林・吉川1964)などがあるが、前出の合角川入岩陰以外、完掘された例はない。また、神庭洞窟などでは、後世の利用が災いしているのか、堆積層が発達しておらず、遺物も少なめであった。

しかし、おなじ地域で確認された遺跡のうち半数以上に調査が及んでいるのは山形県高島町内や広島県帝釈峠など極くまで、全国的に見ても洞穴・岩陰遺跡を巡る環境を考究するには不可欠の地域といえる。

これらのうち、もっとも古い生活の痕跡を残すのは神庭洞窟遺跡と橋立岩陰遺跡であり、縄文時代草創期の資料が出土している。その後、それぞれの遺跡で断片的ではあるが、各期の痕跡が見いだされ、少数の例外をのぞいて、中期をもって利用が途絶え、弥生時代中期の再利用を待つものが多い。

このうち、皆野町内の三角穴半洞窟と勝負沢岩陰は、早期中葉から後葉の初頭にかけて高揚を迎える出土土器の時代幅と比率が妙音寺洞穴と酷似しており、遺跡間の連携が想定される。逆に、合角川入岩陰は、おなじ早期後葉ながら、妙音寺より降り、秩父域でも希薄な野島式期の遺物も多く出土している。

むしろ、洞穴・岩陰遺跡の多くは、単独で生活の諸相を陪えるわけではなく、いさめる開地遺跡をまじえ利用の実態を半断片してはならない。しかし、秩父の洞穴・岩陰遺跡では、縄文早期の出現頻度が開地遺跡に比べて極端に高く(田中1996)、派生的な間接のみならず、直接の連絡関係も十分に想定できる。

そのような環境の中、荒川・赤平川との合流点にほど近く、しかも外秩父山地への戸口に当たる妙音寺洞穴遺跡の発見は、秩父地域の洞穴・岩陰遺跡群の連結経路に結節点を与え、利用と連携の究明に多くの題材を提供することとなった。

Ⅲ 遺跡の概要

妙音寺遺跡は、北流する三沢川の右岸段丘上にあり、現在でも数段の段丘を利用した平場や石垣など、造成の痕跡が地表から容易に観察できる。周辺の地名伝承とともに、平場造成や石垣の範囲をたどれば、長さ約300m、幅約40mにわたり北西から南東に広がる遺跡の範囲が確認できる。なかには「タカンドウ」と伝承される石垣で囲まれた平場や、石組の井戸、池の跡などが点在しており、中世から戦国時代にかけての寺院跡として把握されていた（梅沢1992）。

また、遺跡のなかには堂の入沢という小さな沢が三沢川に向かって流れており、平場の広がりには制約を与えている。だが、その周辺や斜面をさかのぼった上流にも小規模な石垣などが造成されている。さらに、同様な施設は三沢川の上流に向かう段丘上に点在しており、前述の鹿ヶ谷城付近にまで達している。

寺院跡の調査は、国道140号皆野寄居バイパスの戦

場トンネル出口から三沢川橋脚部分までが対象となった。第6図に見るように、幅約40m、長さ約120mほどの東西に長い地区を前提に、要所のみに精査を加える方法をとった。三沢川やその河岸段丘とは、まさに直交するような位置関係にある。

路線が貫く位置は、遺跡の主要部分（本跡）とされる広大な平場地が堂の入沢によって断ち切られた南にあたり、新たに石垣を備えた平場が現れる狭間にある。したがって、調査区の北側では堂の入沢の水流を抑制する石垣のほかは主要な土木跡は見込めず、もっぱら南の小規模な平場群と、堂の入沢上流の小施設が調査の対象となった。

結果、調査区内では4箇所石垣に画された3箇所の平場を確認し、堂の入沢の護岸となる小規模な石垣とともに測量や造成法の調査を加えた。だが、平場部分で建物跡は検出できず、造成土ともなう出土遺物

第6図 妙音寺遺跡調査区と周辺地形（1/5,000）



も極端に少なかった。

また、調査区内には供養塔群が4箇所に存在し、遺跡の北側の「タカンドウ」付近に点在する供養塔群と対峙する形となっている。その立塚状況とともに、下層石組みの調査を行ったが、こちらも後世の移動や組み直しが頻繁に行われたのか、供養塔の年代と下層石組みの時期差が見て取れた。

ところが、供養塔群の精査をきっかけとして、調査の方向は急展開することになった。

調査区中央の南側では、龍ヶ谷城から続く尾根筋が三沢川と堂の入沢によって挟み削られ、起伏を失う寸前の岩盤が露頭していた。その直下に立てられた供養塔群の下層組み石の調査にあたったところ、弥生土器や縄文土器が出土し、不審を一つ一つたどった結果、縄文以来すべてが地中に埋もれたままの洞穴遺跡を発見するに至ったのである。

この事態に対処するため、急遽事業期間を延長し、寺院跡調査区と重なる約80㎡を調査対象に追加した。洞穴部分の調査区は遺物を含むと想定されるほぼ全域を覆ったつもりだが、南方に関しては、バイパス路線外となり、調査が及んでいない。

完備をはたした洞穴は、間口横約3.0m、縦約3.2m、奥行き約4.0mほどの小規模なもので、世帯の起居にはいささか心もとないものである。だが、洞穴や前庭部に残っていた堆積層は、断続的ではあるが、縄文時代早期前葉から中期後半まで、長期にわたる土器を含む。岩盤壁から崩落した巨石の多さから調査を断念した上層土を加えると、縄文包含層はもっとも厚いところで約4.0mに及ぶ。

堆積層のなかでもっとも特徴的なのが、洞穴入口部にうずたかく積もった灰の堆積である。ほとんど間層をはさまず最大約1.5mもの厚さに及び、大量の獣骨や貝類を保存する役割を果たしてくれた。

さらに、灰層のなかからは、ほぼ全身の骨格が想像できる非常に保存状態の良い埋葬人骨を発見できた。身長150cm強の壮年男性で、確認層などの状況から、縄文時代早期後葉の糸織文系期でも早い段階に葬られ

たと考えられる。

他に遺構は、石組炉3、土壇2、配石・柱穴それぞれを検出調査した。石組炉は、灰層の厚さと灰中につき立つように残された川原石などで、さらに多くの構築を経験したと推測できるが、破壊や石の抜き取りも煩雑に行われたようで、遺構として把握できたのは少数にとどまった。

これに対し、土器や石器は灰層ではなく、周辺の岩盤近くや前庭部に集中する傾向が見られた。土器は糸織文系を中心として、沈線文系や押型文系などがまわって出土しているが、その量は継続した居住をささえるには物足りない印象を受ける。

これをおぎなうかのように、石器は大量に出土した。ホルンフェルス製の石器が中心で、石鏃がやや多いものの、黒曜石・チャートなどの小型製品は少なめである。また、骨角器や骨貝製装飾品類も、少数だが、灰層中より出土している。

灰層から出土した骨貝類は多岐にわたるが、点数ではカワナを中心とした淡水産がもっとも多い。また、キセルガイ類など、陸棲の小貝類が少なからず出土しており、捕食の残滓と自生遺骸が混合していると考えられる。さらに、このなかにはツノガイやハイガイなどの海産貝類も若干含まれており、広域にわたる流通を彷彿させる。

一方、骨類は、鳥類・魚類・両生類・爬虫類なども若干混じるが、イノシシを中心とした小型・中型の哺乳類がもっとも多い。これらは、末節部が多く、当地では本格的な捕食や解体を行わなかったようにも見える。だが、焼骨や切断痕を残す大片もあり、さまざまな想定が可能である。また、小片少数ながら、屈葬以外の乳児・幼児骨も出土している。

なお、本遺跡は埋蔵文化財保護地の登録上は、調査着手時そのままに「妙音寺遺跡」として扱われている。だが、本書では、当初設定された寺院跡部分の調査区を念頭に「妙音寺遺跡」の名称をもっぱら使用し、重ねて設定した洞穴調査区は「妙音寺洞穴遺跡」の呼称を使用している。

IV 妙音寺遺跡寺院跡の調査

1. 寺院跡の概要

(1) 調査の方法

今回の調査は、長さ約300 m、幅約40 mで広がる妙音寺遺跡の南端を東西に横断するかたちで着手することとなった。調査区内は三沢川の段丘に加え、堂の入沢という小沢や露頭岩盤など、起伏に富む。そのため、国家座標による地区割りには、 $X=8,290$ 、 $Y=-64,010$ を原点とする5 m小方眼で行い、南方向アルファベット、東方向数値の指数が増加する方法をとった。

第7図のとおり、調査対象地はトンネル出口から三沢川に至るバイパス路線幅である。だが、表土削除をはじめとする調査の実態を、遺構の想定できない斜面地や岩盤にまで加える必要性を見いだせなかった。遺跡の性格と地形を合わせ考えても、現況地表からの観察で精査対象地の選択が充分可能と判断した。

その結果、調査区全体の地形測量を航空機でまかない、重機や人力による精査は、中央の平場を主体として、石垣や供養塔群と、その周辺に限定した。また、石垣のうち、三沢川段丘を利用加工した長大な3基についても写真測量を実施した。

(2) 検出遺構

調査は妙音寺遺跡の南側の一部であり、その対象面積は全体の10%にも満たない。寺院跡の本跡と推定される広大な平場地区は、調査対象地内を流れる堂の入沢をはさんだ北隣にあたり、その南側に位置する今回の調査区は明らかに別遺構と判断できる。

調査前の現況観察では、堂の入沢左岸に三沢川の段丘崖を利用した造成跡が把握できた。対象地中央の最上段では、龍ヶ谷城から続く尾根を背に、3段の平場が遺存していた。これらを上段より第1から第3平場と呼称した。また、右岸にも小規模な平場が形成されており、これを第4平場と呼称した。

一方、第3平場の下方には、三沢川に向かう斜面部があり、さらに下方には4面の水田がある。斜面部は、

断面観察の結果、自然の段丘地形そのままであることが判明した。そして、水田は第二次大戦後に造成されたものであった。

これらの平場は、石垣によって下方を縁取りされている。第2平場と第3平場の境には第1石垣が存在し、第3平場の下側には第2石垣が存在する。石垣は、水田と三沢川側の境の第1道路の境にも一条組まれており、これを第3石垣と呼称した。

また、堂の入沢左岸にも、浸食から各平場を守るように石垣が構築されていた。4箇所分散する小石垣を総合して第4石垣と呼称した。そして、調査区東方で堂の入沢に注ぐ小さな沢筋にも2箇所の小石垣が遺存していた。こちらは第5石垣とした。

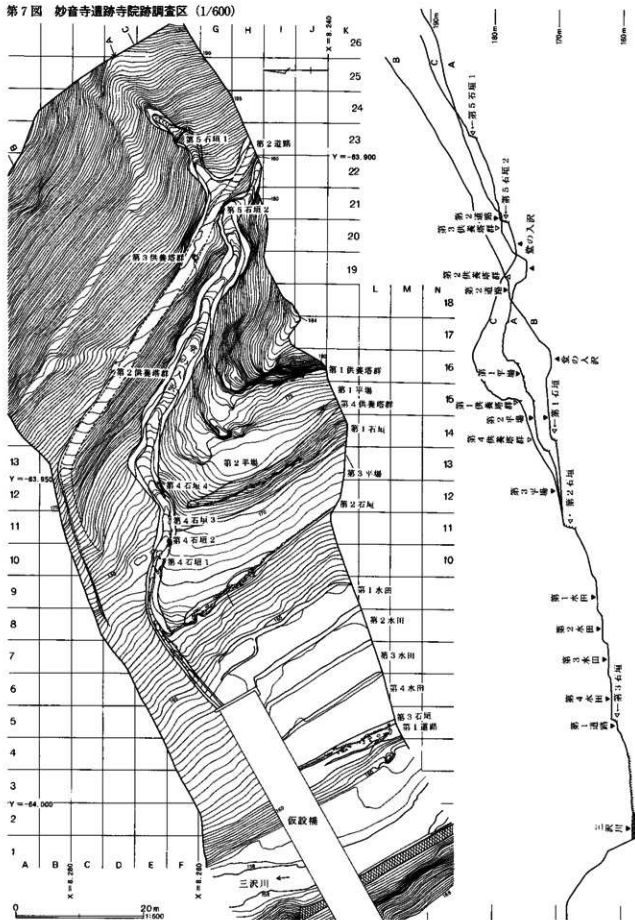
これに対し、調査区の上下を横切る小径が2本のびていた。第3石垣によって三沢川に沿うように設けられた第1道路、調査区北の推定本郷から南方の龍ヶ谷城に続く第2道路が現況で把握できた。いずれも、主たる造成地の上下を縁取る位置にあり、構造物に付帯したり、斜面地の開削の労力を考えると、寺院跡と関連する道筋と考えられる。

その他、調査対象地内には4箇所の供養塔群が点在していた。第1供養塔群は、岩盤を背にした第1平場にあり、石組の上に複数の板石塔婆と五輪塔が立てられていた。また、第2供養塔群は、堂の入沢右岸に並行する第2道路の山裾側、第3供養塔群は南東のほど近い距離の谷側に存在した。これに対し、第4供養塔群は、第1平場の南側に位置していた。

なお、寺院跡調査時の基本土層は、以下のように分類した。

- I (腐植土)
- II (茶褐色土) : 粘質土中に崩落片岩を混入
- III (黄褐色土) : ローム土の二次堆積
- IV (混土礫層) : 河原石主体
- V (岩盤)

第7図 妙音寺遺跡寺院跡調査区 (1/600)



2. 遺構と遺物

(1) 平場・水田および石垣

第1・第2平場および第1石垣 (第7・8図)

第1・2平場は、調査区中央で露頭した岩盤を背にし、三沢川に至る段丘地形の最上段にある。岩盤をはさんだ北側は堂の入沢、南側は自然の斜面地形によって区分されている。

第1平場は、地葉が行われた痕跡は認められない。背後にそびえ、平場に向かってややせり出す岩盤の露頭は、主として縞雲母片岩で構成されており、上位では切り出し跡と考えられる、やや不自然な段差が残っている。石垣群の石材も岩盤と同一であり、構築のための石材を採取したものである。

これに対し、第2平場の北半は露頭した岩盤に接し、南半は、不明瞭な斜面部を介しているものの、石垣などは構築されておらず、第1平場とほとんど同化してしまっている。西側は、緩斜面部に移行した後、第1石垣で区分されている。

両平場部分では、表土を掘削し、遺構確認につとめたが、柱穴・礎石や雨落ちなど、建物の存在を窺わせる痕跡は認められなかった。同平場への入り口は、石垣の北端と沢の間と思われる。なお、第2平場は、近年まで畑として利用されていた。

一方、第1石垣は、第2平場と第3平場を画する位置に構築されている。石積は長さ約20m、高さ約0.5mから0.8mほどが遺存しているが、調査区南方では崩落著しく、これに見合う斜面地だけが残されている。この傾斜は南方の調査区外へも続いている。往時の全容は30m強程度が連なっていたと考えられる。

石組みは根石に大礫を使用し、小礫を縦状に、北から南へ手順で積み上げるのが基本である。しかし、遺存は悪く、修復跡では乱石積み、最上部は一部平積みとなる箇所もある。礫は、一般に第2石垣より小さく、なかには川原石が8点存在した。

遺物は、第2平場より出土した天目茶碗と「寛永通寶」を第8図に示した。

第3平場および第2石垣 (第7・8図)

第3平場は、第2平場から第1石垣を介した直下に位置する。さらに下(西)側は、第2石垣によって区画され、もっとも広く安定した平場となっている。近年まで畑として利用されていたらしい。こゝも表土掘削から遺構確認を行ったが、建物や施設の痕跡は見できなかった。

第2石垣は、第3平場の下方に位置する。現存する全長約70m、高さ1.0から1.5m程度である。石積みは、基本皿層を削平して平場を造成した後、大礫を根石に据えることから開始されている。上位は、同じ結晶片岩ながら、より小さな礫が使用されている。

積み石の手法は、南半で縦状かつ縦方向に石を積み上げているのに対し、北半は平石積みを用いている。ところが、積み方を終結する最上段では、両者とも平石積みが行われている。

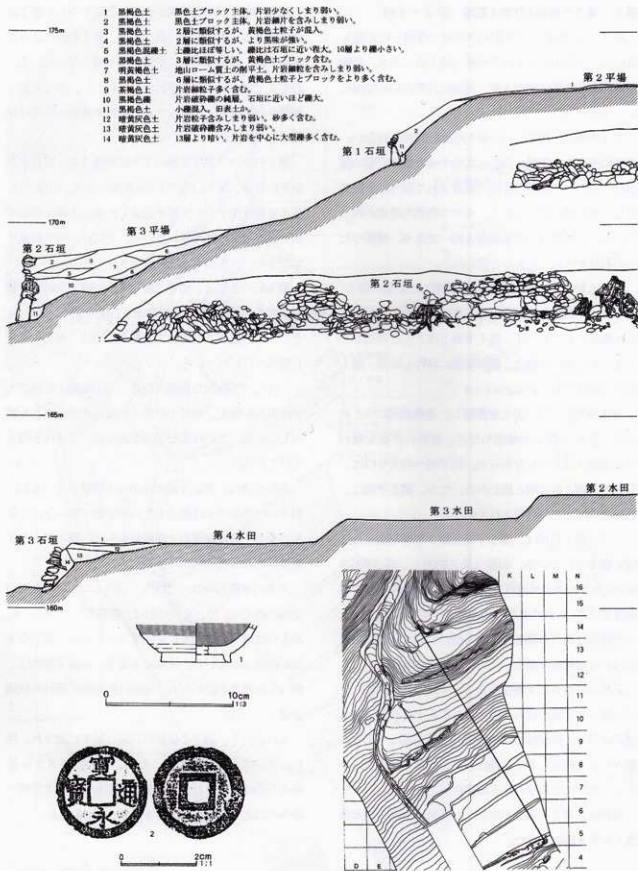
これらの具体的な構築工程は、地山を整えた後に大きな根石を据え、粘質土を用いた後込めでその石を固定している。この作業を3回程繰り返して全体を積み上げている。

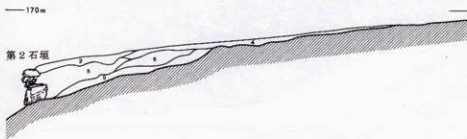
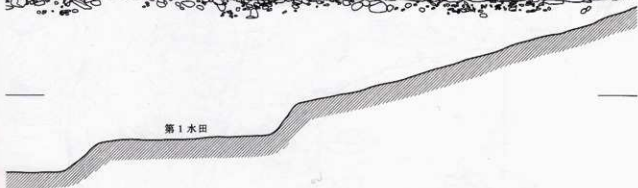
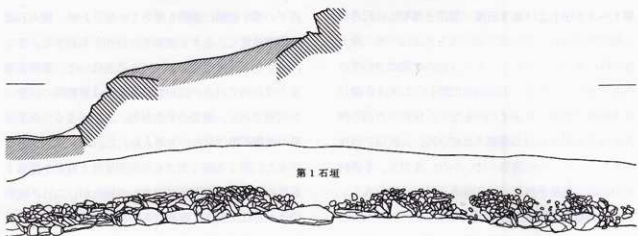
石垣全体は、北より南に向かって構築しているが、個々の作業単位では南より北へ手順で積み上げている。なお、石垣背後の土層観察からは、積み替えなど補修の痕跡は認められなかった。

北半の平積石垣は、二箇所が崩落している上に石垣全体が緩んでいる。その原因は、構築方法や時期の差、あるいは地下水の湧水に起因すると思われ、根石の下部が浸食されている。現在でも北半の斜面下部には、幾つもの湧水が認められ、地面は恒常的に濡れた状態を呈している。

これに対し、南半の縦積石垣は堅牢に組まれ、現代においてもゆるぎない。なお、北側の長さ3m範囲の石垣は、それ以南と軸を違えており、第3平場への入り口として利用していると思われる。

第8図 第1～第3平場、第1～第3石垣、水田





第1～4水田および第3石垣 (第7・8図)

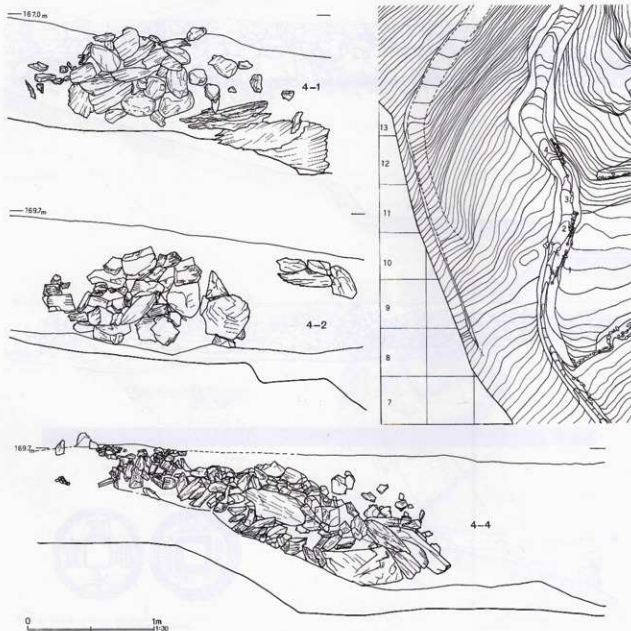
前述のように、棚状に4面が残る水田は、第二次大戦以降に開かれたもので、それ以前の状態については不明である。ただし、平場造成に携わった人々が段丘最下面の平地を見逃すわけもなく、現にこの面の西方を画する第3石垣が構築されている。三沢川との比高差から、建造物の構築とはいっさいないまでも、平場利用の意図が察せられる。

一方、第3石垣は、段丘の最下面を画するとともに、

直下の第1道路に道筋を与えている。だが、積み石は一律ではなく、北半と南半では様相が相違する。すなわち、北半では石垣が緩んでいるとはいえ、整然と積み上げられているのに対し、南半では石積み状態が不明瞭である。両者の手法から、北半が古く、南半はその後積み上げられたと考えられる。

また、第1道路下方でも三沢川流路と段差を補強するため、小規模な石垣が組まれていたが、これが観察できたのは、調査区南端のみにとどまった。

第9図 第4石垣



堂の入沢・第4平場および第4石垣 (第9図)

第4平場は本所からの連続地でもあり、現況観察から命名したが、斜度がきつく、純粋な平場とはなっていない。調査でも造成の痕跡は認められなかった。平坦部おほとんどなく、建物の存在は考えられない。

また、第4石垣は、堂入り沢の左岸に構築され、第2平場の標高より下流に点在している。本来は、そのほとんどに石垣が備わっていたと考えられるが、現在では4地点が残存するのみである。上流より第4石垣1・同2・同3・同4とするが、沢の浸食による崩落も進んでおり、原形を留めていない。

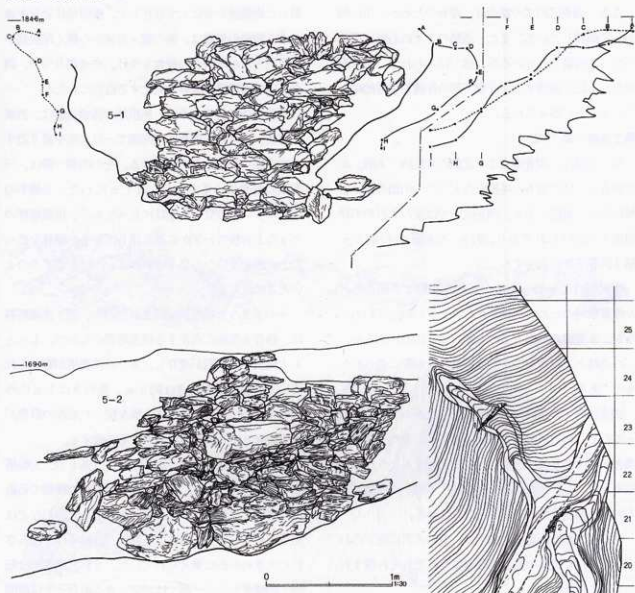
無名沢および第5石垣 (第10図)

第5石垣は、堂の入沢右岸に注ぐ小さな沢筋に残る2箇所を総称する。

第5石垣1は、堂の入沢より14mほど小谷をさかのぼった位置にあり、高さ1.5mほどの平石積みがなされている。現況では、この石垣の上が山道として利用されていた。

これに対し、第5石垣2は、この小沢と堂の入沢との合流点にあり、龍ヶ谷城に通じる第2道路の路盤とされていた。岩盤に大礫を根石として据え、その上に縦絞杉状に石を積み上げている。

第10図 第5石垣



(2) 道路

第1道路 (第7図)

第1道路は、調査区の最下端で三沢川に沿うような形で設けられていた。だが、上流側にあたる南方では、調査区から50mほどさかのぼったところで見分けがつかなくなる。下流側にあたる北方でも、仮設橋以北で消滅してしまっている。

しかし、100mほど下った位置からは、「タカンドウ」に向かい、これに取り付くような小径が同じような段から現れる。往時は両者が連続していたと考えられるが、途中は一部断崖となってしまっている。三沢川の浸食が及んだのか、対岸へと逃れたのか、現況観察では判断がつかなかった。

なお、調査区内での路面は、浸食のためか、川に向かって傾斜している。また、道路の上下に石垣(第3石垣)が構築されているが、他ではみられず、第3石垣が、上位に展開する段丘最下部の保護を主目的にしていることが察せられる。

第2道路 (第7図)

第2道路は、調査地点より北側の寺院跡「本廓」から調査区を経て南方の尾根をたどりつつ山頂の龍ヶ谷城に向かう道路である。調査区内では堂の入沢の右岸斜面上に設けられており、道沿いの両脇には、第2・第3供養塔群が点在する。

現況幅は2mほどあるが、昭和初期より始められた椎茸栽培のために拡張されたことが分かっている。なお、本道路の斜面上方にも並行する山道があるが、この道路と、両者をつなぐ連絡路はその際に造られたものである。

調査区内での道路は、等高線にしたがって堂の入沢と並行し、南方沢奥にまで続いている。また、北方は調査区の中央北側で屈曲し、自然消滅するような測量結果となったが、本来は、寺院跡「本廓」に直接至る方向性を保持していたものと考えられる。

さらに、第5石垣の2箇所は、堂の入沢に注ぎ込む小谷をまたぐ道路の路盤維持のためにそれぞれ積まれたと考えられる。

(3) 供養塔群

今回の調査では4箇所供養塔群の調査を行った。これらは、調査直前まで地元の方々の信仰対象とされ、手厚く保護されてきた。このたび、皆野寄居バイパスの建設によって移転を余儀なくされたところではあるが、各供養塔群は今回の調査後に隣接地や近隣の寺院にそれぞれの希望のもと、移設された。

そのため、各群に所属する供養塔は、発掘調査中に実測・写真撮影を行った。当然ながら、整理後の埋蔵文化財センターへの移管はされておらず、それぞれの寄附地に分散している。

第1供養塔群 (第11図～第14図)

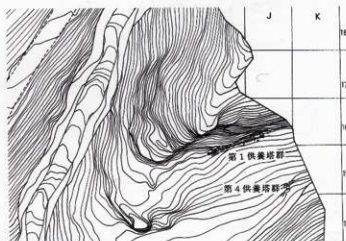
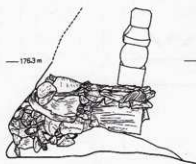
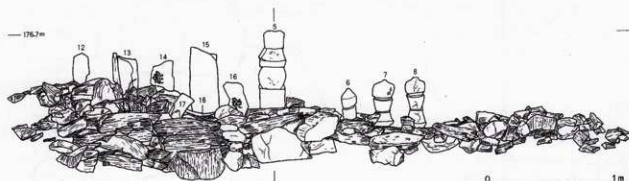
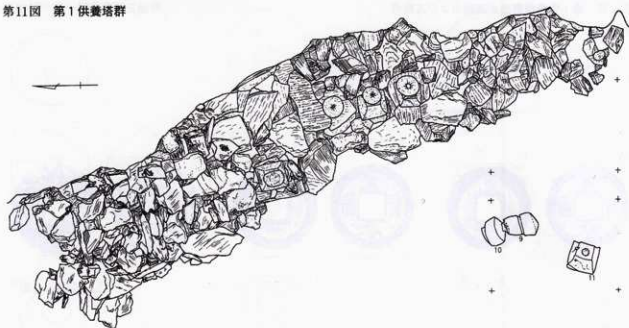
第1供養塔群は、三沢川から見た第1平場の奥で露頭した岩盤壁を背にして存在した。網覆母片岩を主体とする背後の岩盤は、南の龍ヶ谷城から続く尾根筋が三沢川と堂の入沢との浸食を受け、やや細りつつ、調査区内で河岸段丘地形と同化する直前にあたる。

写真図版で見ると、尾根筋の露頭岩盤は、消滅の直前、すなわち調査区の南端で一旦高度を盛り返すため、独立丘のようにも見える。その西側一帯は、三沢川の浸食によるものか、数十mにわたって草木の生えにくい切り立った壁状になっており、供養塔群のちょうど背後でわずかにせり出している。植林を払った上で段丘下位から見上げれば、いかにきまりのよい光景に見える。

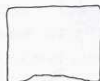
そのような場所柄が好まれたのか、第1供養塔群は、妙音寺遺跡に点在する供養塔群のなかで、もっとも大規模な組み石が遺存し、多くの供養塔が寄せられていた。組み石の長さは約5m、奥行きは1m内外となり、小口をそろえるよう気を配った前面の限界が岩盤のせり出しの限界におおよそ匹敵する。

石組み上の供養塔は、板石塔婆が5基8点、五輪塔が4基9点存在した。これらはそれぞれの種類で石組みの占地を二分していたが、これといった台石などは用意されておらず、板碑は石間に、五輪塔は平積みされた大きめの石に乗せられていた。また、調査前は転倒や倒壊著しく、一部では想定できる組合せや位置関

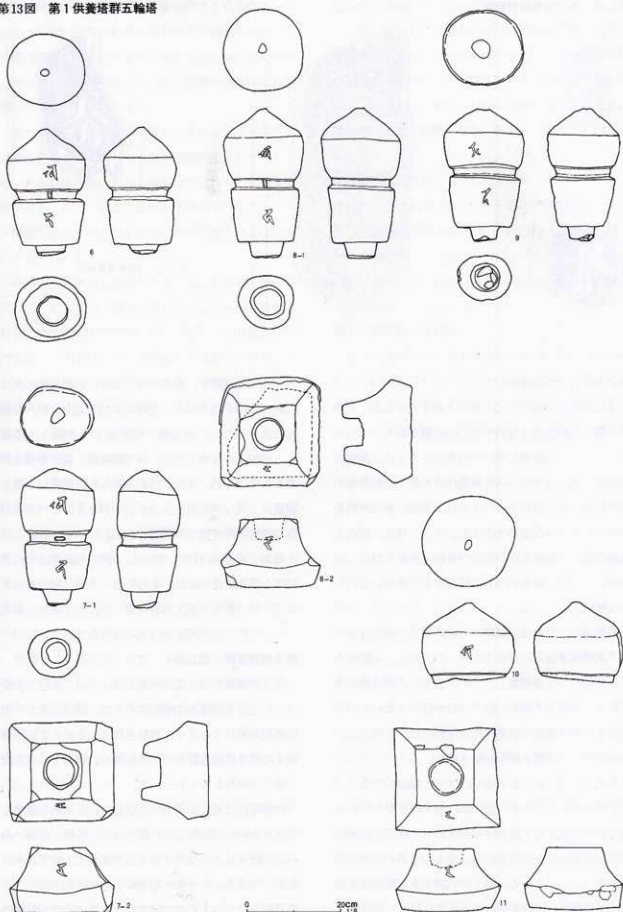
第11图 第1供養塔群



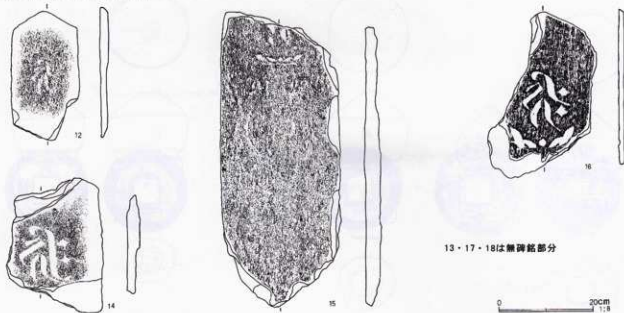
第12図 第1供養塔群出土遺物および五輪塔



第13图 第1供養塔群五輪塔



第14図 第1供養塔群板碑



13・17・18は無碑銘部分

係を復元しつつ記録化した。

下位の組み石は、小口がおおよそそろえられ、北側の下層に比較的大きな石が根石的に積まれている以外はこれといった特徴が見いだせない。とくに、南側の半分などは、近年になって無造作に再築造されたものと思われ、石を積むというよりは、余白に新たな石をはめ込んだような様相であった。また、地表に残る五輪塔の他に、石組み中からも空風輪と火輪が出土していることから、組み石当初の原形をとどめていないことは歴然としている。

石組みの下位には、墓域や石組み根石の掘方などの地下遺構はまったく存在しなかった。だが、石組みの前面に骨片が1点散在していた。また、下層遺構の調査をする過程で人骨片や弥生時代中期の土器が出土した結果が河穴遺跡の新発見につながった。この詳しい経緯については第V章を参照されたい。

石組上に残された板石塔婆はすべて破損品であり、種子部分のみどころか、なかには種子部分を欠いた単なる板石と化した小破片すら存在した。周辺に同種の破片が見あたらないことから、まったく別の場所から持ち寄ったかに見える。種子が判読できるものは5基で、諸特徴から室町末期の製品と思われる。

また、五輪塔も、地表だけでなく、石組み中においてられたものを含めても、空風火水地の完全な組み合わせは成立しない。砂岩製の空風輪4・火輪3・水輪1・地輪1が存在したが、年号碑銘等、刻字の判読できるものはない。また、石組み中から灯明皿と「寛永通寶」3点なども出土したが、そのままにこの供養塔群の設置年代を表すか疑問である。

なお、石組み下の人骨片は、層位・遺構面での裏付けが得られなかった。そのため、人類学的分析にも委託した(妙音寺洞穴二号人骨)が、出土材料の不足から、年代・性別等を決するに至らなかった。

第2供養塔群 (第15図)

第2供養塔群は、堂の入沢右岸にこれと並行して設けられた第2道路の山側に存在した。路傍に面して供養塔列が並行するように造立されているが、これに背面する第3供養塔群との共通性から、南方という方位を優先させたものともとれる。

供養塔は3基が並列されているが、いずれも基部を乗せる台石は存在しない。代わって、各塔の前面に台石に四蔵するような大きな平石が埋め込まれており、基部が埋設された各塔を地中で支えている。

石組みは、支え石の安定化のために小片岩がわずか

に敷かれているにすぎず、背後の押さえも土によっている。下層の掘方は斜面を切り崩す広範囲のもの、各塔の埋設にともなうもの、支え石を念頭にしたものとの3種類が重なり合っていた。墓壇を念頭にした形態の穴は発見できなかった。

また、各塔の造立法の共通からすれば、3基のさらに西にある大石も同じような用途に使用されたともとれ、あるいは往時にもう1基が立てられていたとも憶測できる。だが、設置位置がはずかにずれることや、下層掘方を欠くことなどから、その可能性は少ないものと考えられる。

各塔は、自然石を利用したもので、もっとも左は立石しているものの、刻字は認められなかった。これに対し、右は正面に「宝永三年・梵字 ○山道廣禪定門靈位・三月四廿一日」(1706)と刻まれており、真ん中も同じく正面に「宝永五年・梵字 青山妙榮靈位・子三月二日」(1708)と記録されていた。周辺を含め、遺物は出土しなかった。

第3 供養塔群 (第16図)

第3 供養塔群は、堂の入沢右岸でこれに沿うようにのびている第2道路の傍らに造立されている。おなじ第2道路に面する第2 供養塔群よりは南上流方にあり、第2が道路に面しているのに対し、こちらは背を向けている。だが、いずれもほぼ南方を指すことでは共通しており、道行く際の視線より、方角を優先させた結果だと考えられる。

供養塔は1基のみの造立であり、図に示したものが中央に据えられていることから、下部の組み石もこれのみを念頭に置いたものと判断できる。台となる石は、専用の大きな平石が用意されているが、設置おぼろ穴式ではなく、背後に裏込め的な粘質土を盛り固める方法によっている。

下層の組み石は、II層を削平した上に切り出しの結晶片岩を、基本的には平積みし、最終で一段と大きい台座石を据える。また、下位の根石にも気を配っており、比較的大きな石が選択されている。そして、上位の石積みのみが堂の入沢に向かって小口をそろえて整

えられている。

下層の掘方も、石組みとはほぼ一致する形態と規模で掘削されており、斜面の整地ではなく、計画的な根石の配置が行われたことが見て取れる。中間層の積み方もしっかりとしており、石組み全体が造立そのままに遺存していると判断できる。墓壇と判断できる掘り込みはない。

供養塔は自然石を利用したもので、大きな形態加工の痕跡は認められなかった。正面には「寛政六〇〇・梵字 眞勝常念信士靈・十二月五日」(1789)と刻されている。また、石組み中からは「文久永寶」が1点出土しているが、積み石途上の埋納か、後日の紛れ込みか判断つかなかった。

第4 供養塔群 (第17図)

第4 供養塔群は、第1平場の南東側、第2平場が縮小し、緩斜面部と化す移行部に造立されている。さらに南では、第1平場も消滅し、急斜面部となる。したがって、供養塔群は、段丘を利用した平場群の最南端に位置することになる。

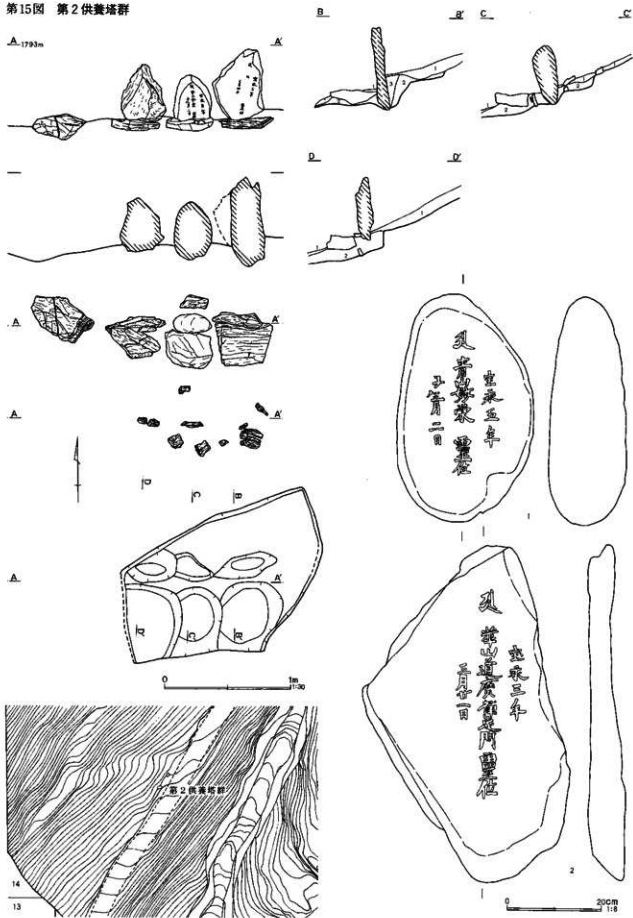
供養塔は2基一対で造立されており、下部の組み石は斜面にせり出すように小口をそろえて高く重ねられている。そのため、斜面下にあたる塔前に立つ人からは、塔長に倍するほどの視線の高さが必要となる。双方ともに専用の台石を利用し、設置を前提とした転倒防止の壁みが彫り込んである。

組み石は、II層を削平した上に切り出しの結晶片岩を平積みし、最終で一段と大きい台座石を据えるが、中間層の積み方は隙間が多く、並びについては意図していないようであった。また、台座石そのものに対してもこれといった固定処理は加えられていない。石材は比較的大きく、その一部は石屋を構成していたものかもしれない。

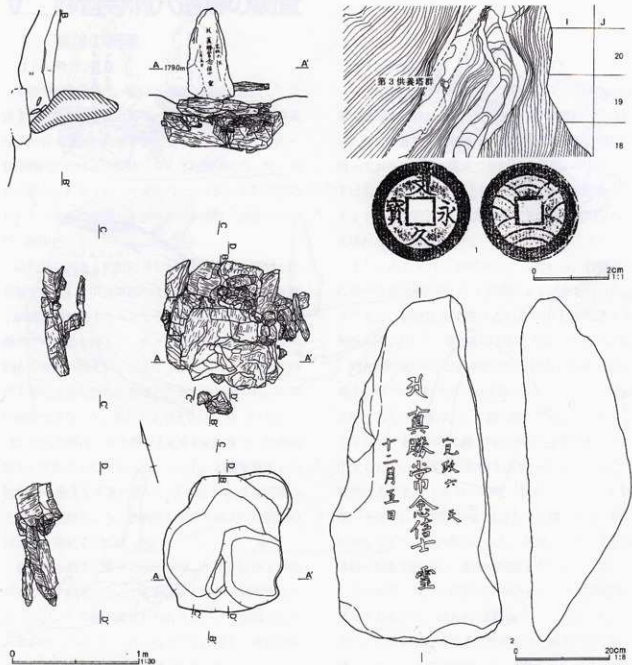
下層の掘り込みは、緩斜面部を平坦化するだけが目的のようであり、掘削は傾斜に沿った不整形かつ3段にわたっている。また、墓壇を意図した定型的な掘り込みは確認できなかった。

供養塔は自然石を利用したものだが、調査中に石材

第15图 第2 供養塔群



第16図 第3供養塔群



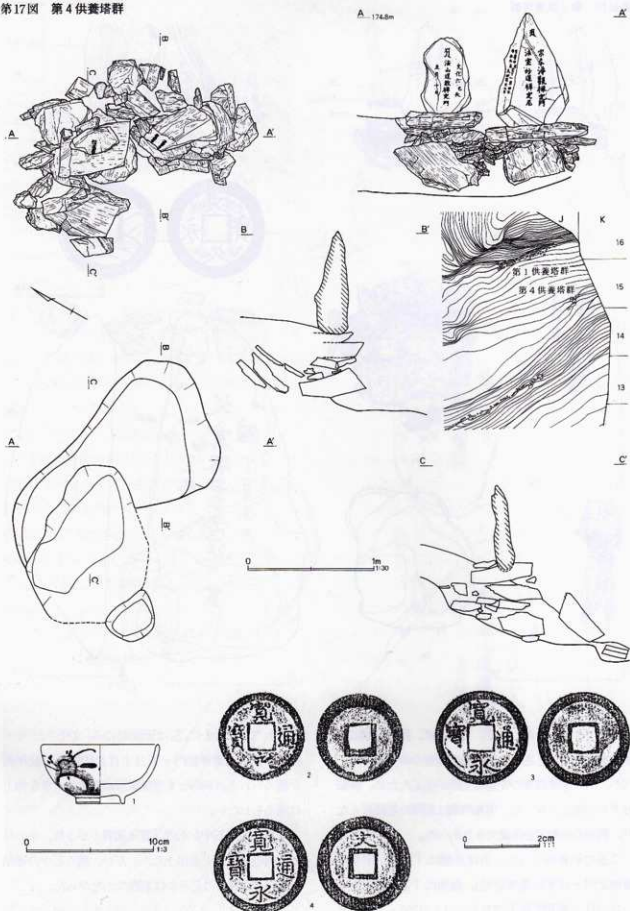
を特定できなかった。また、これらは、調査初期には移動を要しないとされ、非破壊の精査のみを行った。だが、洞穴遺跡調査の安全に支障が生じたため、移転せざるを得なくなった。実施時期は期間の最終近くなり、個別の実測図を作成できなかった。

2基の供養塔のうち、右は正面に「梵字 宗与浄観禅定門・法室妙蓮禅定尼」、側面に「宝曆四戌天十一月四日・明和九辰天四月十六日」(1754・1772)と

刻されている。また、左は正面にのみ「文化六巳天・梵字 法山道教禅定門・五月十日」(1809)の紀年銘が認められる。双方とも形態成形に対する大きな加工は認められない。

下層の組み石中からは「寛永通寶」が3枚、染め付け茶碗の破片が1点出土した。だが、積み石中の埋納か、後日のはまり込みかは判断できなかった。

第17图 第4供養塔群



V 妙音寺洞穴遺跡の調査

1. 遺跡の概要

(1) 洞穴の発見

妙音寺洞穴遺跡は、妙音寺遺跡の南端に重複して位置する新発見の遺跡である。平成7年上半期、当事業団が妙音寺遺跡の発掘調査に着手した当初は、中世・戦国時代における寺院跡がもっぱら念頭にあった。前章で紹介したように、対象地内には3段の石垣に区切られた3箇所の手場と4箇所の供養塔群が点在していた(図版19-1)。

寺院跡の調査も終盤にさしかかり、盛夏、露出した岩盤を背にし、供養塔群のなかでもっとも大規模な第1供養塔群を残すのみとなった。地表面に露出した供養塔群の精査を終了し、直下の組石を除去し、下位の調査を実施(同2)したところ、さらに下から弥生時代中期の土器を含む包含層と、これからはずれ、時期が確定できないが、数片の骨片が出土した(同3)。

この包含層は、最大厚でも約0.1m程度で、分布範囲もわずかなものであった。しかし、岩盤を背にした包含層の発達を不審に思い、さらに1mほど下層へと掘り進んだところ、黒褐色を呈する縄文時代前期の包含層を発見するに至った。

供養塔の調査に着手した当初は、わずかに頭上の岩がせりだす程度で、とても雨露をしのげる場所ではなかったが、その後、縄文から弥生にかけて崩落したがれきを取りのぞくにつれ、せりだしが増し、遺存状態の良好な岩陰遺跡として確認できた(同4)。

さらに、包含層の調査に着手(同5)して間もなく、空気が漏れ出る正面の岩盤にも不審をもち、包含層直上にある崩落礫を取り除いた(同6)ところ、ついには奥行き4mの洞穴までもが地中に隠されていたことが判明した(同7)。

これを受けた関係各機関による調整の結果、寺院跡部分と重複するが、洞穴および前庭部の約80㎡を妙音寺洞穴遺跡と呼称し、同年8月より12月までの日程で調査が追加された。

(2) 調査の方法

妙音寺洞穴遺跡の調査区は、妙音寺遺跡調査区の南東で重複する約80㎡が対象となった。範囲の設定は、北と西では露出した岩盤が、南は路線の限界が目前に迫っており、容易に確定できた。しかし、西方については包含層の広がりか予想できず、寺院跡調査Jグリッド列を目安とした試掘によって、ほぼ遺物分布の途切れる位置を確定した。

また、調査工程・期間算定の必要から、岩盤近くにおける包含層に対しても重機による試掘を行った。そのため、調査区南東壁付近の遺物出土状況図・土層断面図、そして、遺物そのものに欠落が生じている。

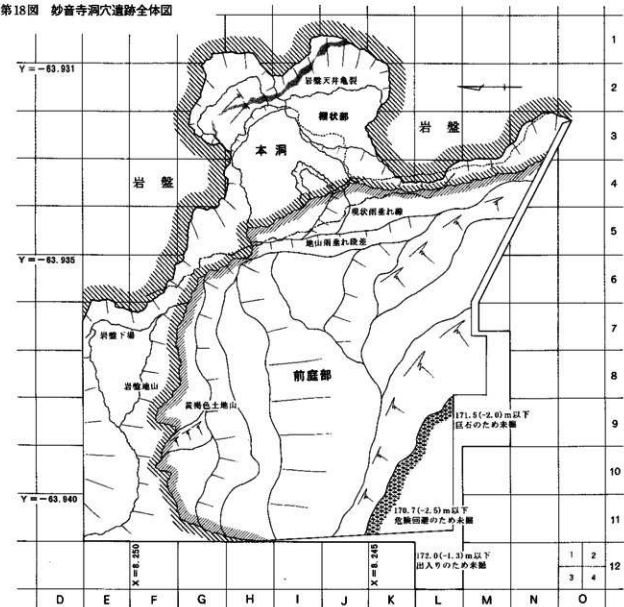
調査前の地形は、三沢川に向かう西方に傾斜を示し、表土の直下には巨大なれき層が広がっていた。岩陰遺跡としての調査は、この層に対しても人力をもって着手した。土中からは縄文時代中期の遺物がわずかに出土したが、崩落した岩盤を破壊・除去しながら土質部にあたるには労力・時間・精度などで多くの困難が予想され、期間内に良好な包含層である下層の調査を完了できるか危ぶまれた。検討の結果、この崩落層の精査を放棄し、重機で削除することにした。

その結果、現れた前期包含層の上面は、やや南西に傾斜するものの、調査前の傾斜がかなり弱まった。人力による包含層の精査は、重機掘削の残りである第I層と、主として縄文前期の人工遺物を含む第II層を最初に開始した。

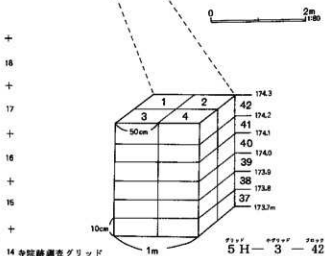
精査は、下層の岩盤、あるいは地山と認定した岩盤直上のローム質層に到達するまで行った。だが、南西隅では調査区域の関係で、法面の設定もままならず、危険回避や、非常時に備えた複数の出入り口を確保するために一部完掘を断念した部分がある。

洞穴調査区のグリッドは、遺跡の性格に鑑み、既存の寺院跡調査グリッドとは別の系列を設定した。すなわち、寺院跡16Hグリッド杭を原点とし、南と西に指

第18図 妙音寺河穴遺跡全体図

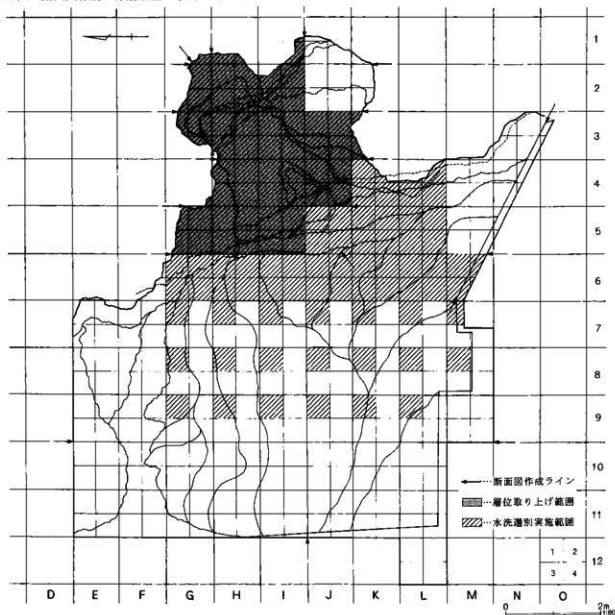


寺院跡調査区との関係



土壌水洗選別のブロック単位

第19図 断面図作成・分層調査・水洗選別の範囲



数が増す1 m 方眼で、寺院跡が北西杭を呼称の目安とするが、洞穴調査区では北東がこれに相当する。

また、後述する土壌水洗選別のために、1 m グリッドをさらに四分した上に、標高10cmごとで区分した(第18図下段)。包含層は、結果として0.025立米の細かな単位に分割が可能となる。以下、本書ではこれをブロックと表現し、1 m 大グリッド、小グリッド、標高値をハイフオンで連ねた呼称を使用する。

精査時は、掘削した土をこのブロック名を印した土嚢袋に詰め込むとともに、その過程で確認した人工・

自然遺物の出土地点を測量した。また、洞穴内では、安全上の理由もあったが、少人数で精査を行い、遺物が含まれた土層も記録した(第19図)。これに対し、前庭部では、土質・土色の識別がにわかに判じがたく、前庭部に携わる多人数の間で大量の排土すべてにわたって統一を維持するのに困難が生じた。そのため、遺物の層位別取り上げは断念せざるを得なかった。

また、包含層の土層観察断面図は、第19図に示したような箇所で作成した。だが、調査区のグリッド設定の際には洞穴の存在や下層地形が把握されておらず、

洞穴内では1 m、前庭部ではほぼ4 m内外の間隔を置いた土層図も、一部で遺跡の実態を反映するに不足が生じてしまった。

一方、洞穴遺跡を取り巻く地形環境などを把握するため、調査区の策定時と包含層完掘後の二回、重機で段丘崖や地山層の断面観察を行った。これは、段丘傾斜に沿った東西方向に行い、後者では、縄文時代草創期以前の生活層が存在しないことを確認した。

さらに、発掘調査現地での作業と並行し、精査に漏れた微小遺物、とくに自然遺物を念頭に土壌水洗選別も行った。各ブロックごとに掘削した土砂を水流にさらし、10・5・3mm方眼の罫目で遺物を採集した。

だが、調査予算や期間、粘質の強い土質との兼ね合いから、調査区のすべてにわたって実施することはできず、遺物の希薄となる前庭部西に向かって密度を荒くした(第19図)。それでもなお、約1,600区画を対象とした採取では、各ブロック平均2袋弱が採取され、その総数は約3,100袋、4 t車7台分に達した。

以下でふれる遺物の総量は、出土地点を記録したものと、この水洗の際に採集したものの総計である。ただし、水洗に漏れたブロックの排土にも小遺物が存在したと考えられる。したがって、包含層の実態をさらに膨らむことを念頭に置く必要がある。

また、調査が落葉期にかかったこともあり、隣接する山林より調査区に多くの飛来物が舞い込んだ。そのため、水面に浮遊した種子・植物質類は、特定の種子を除き、すべて廃棄した。

この土壌水洗では、葬り去られるところの人工・自然遺物を回収できたとともに、石鏃や黒曜石剥片の大半が水洗の際に発見されたり、水洗採集遺物のなかに打製石斧が含まれたりなど、はからずも調査のきめの粗さを露呈することにもなってしまった。水洗選別採集遺物の整理途上に、いくつかの誌上などで遺跡紹介の機会をいただいた際、前庭など小石器の出土が極端に少ないかのように発表したが、結果的には一定量の出土を見ている。ここで訂正しておきたい。

(3) 遺構と包含層の概要

縄文遺物包含層の層厚は、人力による精査開始高より、洞穴入口の岩庇直下で約1.9 m、もっとも厚い南西隅で約2.9 mを調査した。前述のとおり、後者は下層の調査を断念しているが、周辺に見る地山層の傾斜から憶測すれば、さらに約0.8 mの包含層が存在したと考えられる。これらは、それぞれ、現表土からは約3.3 m、約4.0 m下位に相当する。

掘り上がりの洞穴は奥行き約4.0 mの規模で、ほぼ北東をさしていた。奥から入口に向かうほど洞室は大きくなり、間口では横約3.0 m、縦約3.2 mに広がる。この直上には岩庇がせり出し、南方に連なっている。また、南方の岩壁壁には旧岩庇下にもう一個所小さな底部があり、その延長が傾斜を強めたから調査区外へと向かっている。

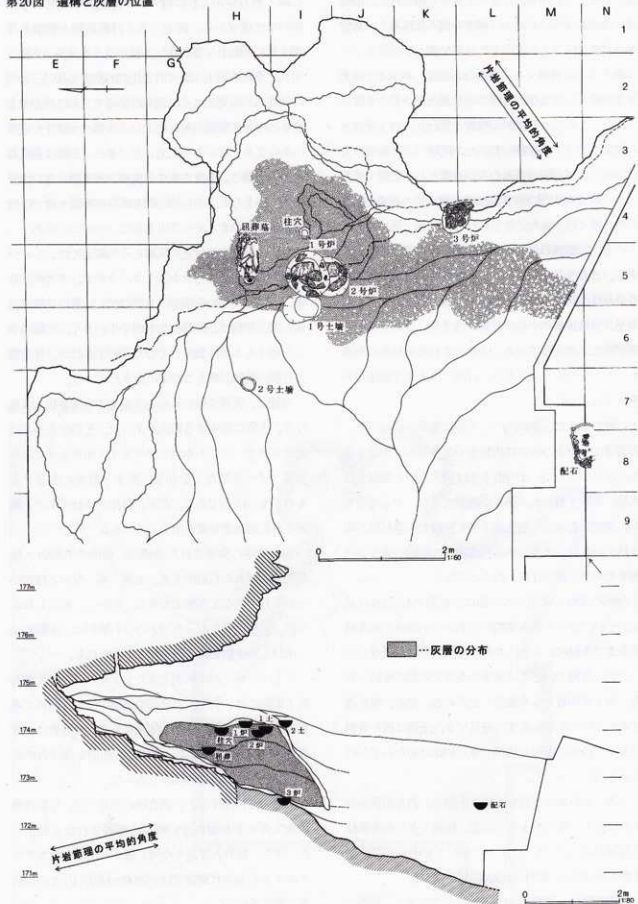
これに対し、調査完了時の前庭部の地形は、現況や精査開始時の地形からは想定できなかった斜面方向となっていた。すなわち、岩壁壁に沿った緩斜面部から南西に向かって傾斜を増しており、北方に露頭した岩壁からの傾斜がひととき強い。

洞穴入口付近の包含層は、上層から、縄文時代中期と前期中葉の混合(Ⅰ層)、中期をわずかに混じえる前期(Ⅱ層)、早期後葉(Ⅲ層)、そして前期中葉の遺物を含む層(Ⅳ層)が確認できた。加えて、前庭部では、早期初頭の土器を含む層(Ⅴ層)も形成されていた。

洞穴内部の堆積土は、岩壁側面の壁影が一部崩れているものの、一般にやわらかく、がれきにまみれた粘質土が積もる前庭部とは対照的である。これらは、壁際の空洞より新しい土が流入したり、岩壁を伝う湿気によって変質を来したらしい特徴が観察できた。だが、生活面を整えるなど、人為的で大きな土砂の移動で確定できる痕跡は認められなかった。

洞穴内でのもっとも大きな特徴は、洞穴の入口側半分にうずたかく積もった灰、およびその流出層である。洞穴中央より層厚を増し、洞穴入口では、土質層を介することなく約1.5 mにも達する。だが、その直後に

第20図 遺構と灰層の位置



は、岩庇からの雨垂れによって大きく削られて、前庭部には続かない。ただし、純度を弱めながらも、岩盤壁の岩庇を伝うように南方に分布を拡大している。

洞穴入口に堆積する灰層のなかには、40cmほどの大きな川原石が急な傾斜でささった状況がいくつも観察できた。これらは石組炉の残骸と思われ、約3㎡ほどの範囲に20以上が存在していた。灰層内では数個の大石を組込んだ上層の1基のみが遺構として把握できたが、灰層の厚さと大石の存在から、数十回の構築と破・損壊が繰り返されたと考えられる。

一方、前庭部の堆積層は岩庇の雨垂れ線を境に激変する。このうち、水滴とともに前期の土粒が流出した雨垂れ痕の黒褐色層は、地形にもまして傾斜を強めており、早期後葉や中葉の灰層をけずり、早期中葉の非灰層にまで到達している。さきにもふれたかげきの多寡も、ここを目安としており、以西では大きな崩落石が散乱するようになる。

これに加えて、洞穴内では天井に亀裂が認められ、調査時にも雨天の折には岩盤をつたう雫がしたり落ちてきた。そして、その直下では洞穴入口と類似した水溜りによる土層の入り組みが観察できた。そしてさらに、調査区南端の小岩庇直下にも独自の雨垂れ痕が印されていた。つまり、本洞穴遺跡では成因の異なる三個所の雨垂れ痕が存在したことになる。

今回の調査で検出した土器は、総数で4,374点に及ぶ。その内訳は早期前葉燃系土系から中期後半加曽利E系まで多岐にわたる。このうち、包含層が発達していたのは早期で、とくに後葉の条痕文系期が堆積の容量、出土遺物数とも半数近くを占める。だが、他に逃げ場がないにも関わらず、発見できた土器は破片資料が多く、往時の器形を彷彿できる個体は10をわずかにこえるのみであった。

一方、石器類は土器を大幅に上回り、調査面積からすれば膨大な量が出土している。検出できた石器製品と石製品は1,215点、ホルンフェルスを中心とした剥片類が19,455点、総計では20,670点に及ぶ。

石器器種は、石器が644点と抜きんでて多く、削器・

石鏃・磨石類がこれに続く。早期主体の包含層形成期の年代構成から、確定できる打製石斧・磨製石斧はほとんど出土しなかった。

人工遺物の出土は洞穴内で比較的密度が高い。とくに、外部から見にくい洞奥の左側や、入口付近でも岩盤に接して堆積し遅れたクレバス部に大破片や完形の条痕文系土器が多く出土した。また、石器は前庭部中央やや南の、条痕文系から沈線文系土器を含む中層で多く出土した。さらに、調査区南西の最上層では竹管文系土器がまとまって出土した。

一方、洞穴入口付近の灰層とその周辺では、イノシシをはじめとして、シカ、テン、ウサギ、タヌキ、鳥類、カメ類などの骨類や、おびただしい量の貝殻が出土した。骨類は、末節骨などの小片が多く、灰層の中心を避けるように散乱していた。わずかだが、骨角器と貝製の装飾品類もこの中に含まれている。

貝殻は、灰層全般にわたって出土する獣骨類とは異なり、上位に集中する傾向があった。そのほとんどはカワナで、シジミやマツカサガイ、キセルガイ、そしてマイマイ類などを加え、淡水・陸地に生息するものもつばらである。だが、量比ではわずかで、搬入された海水産貝類も出土している。

包含層中に構築された遺構は、前期や早期中・後葉に構築された石組炉3基、土壇2基、配石と柱穴がそれぞれ1基などが検出できた。しかし、前述したように、灰層形成を担ったであろう石組炉は、実際には二桁以上が改築を繰り返したと考えられる。

そして、断片的に検出できたヒト骨のはかに、調査終了間際には、洞穴入口北部の灰層中位で、極めて遺存状態の良い埋葬人骨を1体発見した。被葬者は、身長150cm強の壮年男子で、葬法は、頭頂をほぼ西に向けた、いわゆる横臥屈位葬であった。

灰層中の検出位など、調査時の所見では、早期後葉条痕文系でも初頭に近い時期に埋葬されたと判定した。また、屈葬人骨近くの同じ層より出土したカワナによるC14年代測定では、7890±440 B.P.という結果が報告されている。

2. 洞の観察

(1) 洞と前庭部

洞穴が発見された岩盤は、南の龍ヶ谷城跡に続く尾根が三沢川と堂の入沢の浸食を受け、調査区内で河岸段丘地形と同化する端部にあたる。尾根筋は、消滅の直前、すなわち調査区の南端で一旦高度を盛り返すため、独立丘のようにも見える。

洞穴は、結果的に独立丘中央のまさしく直下に隠されていた。完掘時の間口は幅約3.0m、縦3.2mでおおよそ西南西に向かって開口していた。また、奥行き約4.0mで、北東に向かってのびていた。

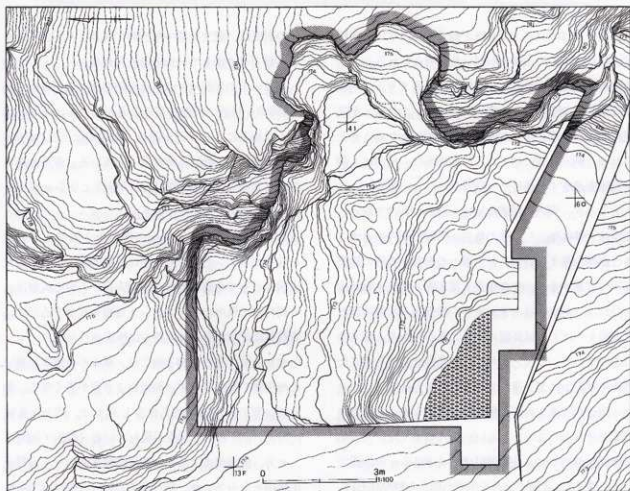
第18図に示したように、洞は大きく左右の二重構造となっている。左の本洞は平均1.6m幅で、 $N-51^{\circ}-E$ を軸にのびる。この角度は、絹雲母片岩の基盤に観察できる平均的な片理の走行と一致する。

また、第20図下段の本洞主軸方向の断面図に見るように、洞底は、奥から入口部に向かって2回の大きな段差をはさみ、階段状に低下する。これも、水平を軸として片岩片理と線対称の角度に相当し、各段は片理と直交する小口が顎を見せている。

これに対し、右側は一段高し棚のような形となり、空洞は狭まるが、本洞に立つと適当な物置空間として利用できる。この棚状部は奥で南に拡大するが、この方向も本洞と直角に近い角度で広がっている。

洞の形状が基盤石材の構造的な強弱に対応するのは天井部でも同様である。こちらは、水平を軸として洞底と線対称の角度、つまり片理傾斜の方向に上昇している。ただし、調査前には洞穴口の包含層上を天井部の崩落石がふさいでいた。これを考慮すると、開口当

第21図 調査完了後等高線図





時の天井高は0.5から0.6mほど低くなるはずで、入口部への角度は、やや緩やかだったと考えられる。

だが、天井部の崩落は入口周辺にとどまり、4列以奥は現代まで空洞のまま残されていた。これは、洞穴奥がすでに片理に沿った安定に達していたためと考えられる。洞穴を開け封じた入口の崩落は、皮肉にも洞の安定を達成する最後の大崩落だったといえる。

ところが、洞内に堅固な安定が訪れたわけではなく、奥では天井に生じた一筋の亀裂が暗闇の洞内にさまざまな影響を与えていた。包含層への影響は土層の観察の項で詳述するが、この亀裂も第20図の洞穴主軸断面で見れば、洞底のひときわ大きい段差から片岩片理の直交線をのびた延長線にあることが分かる。雑木の根がのびていたことから、この亀裂は岩盤を隔てた岩庇や尾根上にまで達していると考えられる。

一方、洞穴直上の岩盤壁には、高さを違える二重の岩庇がせり出していたらしい。洞穴直上では、入口から傾斜を強めつつ、完掘地山高から約4.5mの位置で軒先に達する。灰層の分布や雨垂れ痕から推察すれば、

この岩庇は、縄文早期中葉当時で現状より少なくとも1mほどせり出していたと考えられる。

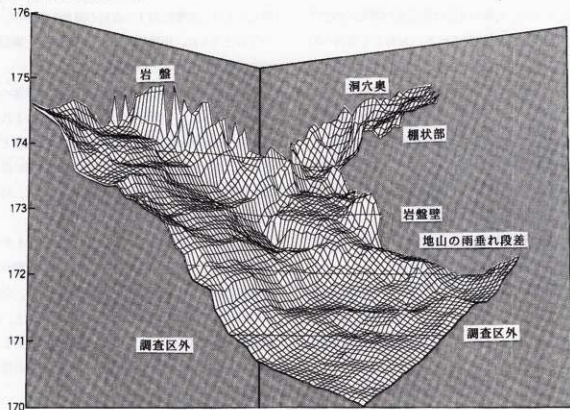
もう一方の岩庇は、これより南の掘り上がりから高さ約6.0m付近で痕跡を見ることができる。こちらはとくに崩落による後退が進み、現状では下位の約2.0mほどにある小庇部に掌を落としている。直下にある調査区東南壁の土層観察では、現状より2m以上も軒を広げていた可能性がある。

二つの岩庇はおり重なって奥行き2mほどの岩陰を作り出していた。このことは、第20図上段に示した灰層の分布でも察しがつく。洞穴口から南の灰層は、6列付近で風雨にさらされ、土質層と混合するため、岩盤壁に並行するそれ以西では検出されない。

また、庇の高さに勝る南では、風雨の被曝率が高いため灰層が保護されず、洞穴口より質が悪くなる。加えて、双方の交錯部にあたるL列では、時とともに二重の岩庇が離れる過程が現れている(第25・26図)。

一方、前庭部では多くの部分で黄褐色のローム質土が地山となっていた。洞穴底の岩盤は5列付近で急に

第22図 前庭部の地形イメージ



降下するが、地形的には違和感なく黄褐色土に変化する。さらに北側では尾根筋が西方に回り込んだ岩盤が露頭しており、G列付近から黄褐色土地山が現れ、南に向かって層厚を増していく。

前庭部全体の地形は、現況や精査開始時の地形から想定できなかった斜面方向となっていた。すなわち、岩盤壁に沿った緩斜面部は南西に向かって傾斜を増しており、北方に露頭した岩盤からの傾斜はひととき強く南方に向かっている。精査が行き届かなかったが、地山下の岩盤は、さらにこの地形を強調するように傾斜しているものと考えられる。

そして逆に、精査を実施した縄文包含層の堆積は、原地形を相殺するように、時を経るにしたがい水平に近づいてくる。縄文包含層の厚さは、洞穴入口の岩底直下で約1.9m、もっとも厚い南西隅で約2.9m堆積していた。遺跡の概要で述べたとおり、後者は下層の調査を断念しており、周辺に見る地山層の傾斜からさらに約0.8mの包含層が存在したと考えられる。現地表

から地山までを見れば、それぞれ約3.3m、約4.0m下位に相当し、地山の落差約1.8mは縄文包含層の堆積により約0.7mに縮小したことになる。

さらに、第22図には前庭部のおおよその地形を示した。洞穴内は、天井部でこれに足る測量を行わなかったため表現できないが、前庭部の地山にも往時の環境を反映したいくつかの微地形を見て取れる。

岩盤壁に沿った方向には、高低に関わらず、西側に向かった段差が連続している。これは、地山を削った雨垂れの痕跡と考えられ、旧石器時代末、あるいは縄文時代初期の時点で、すでにこの地が岩陰化していたことをものがたっている。

また、洞穴入口、そして7Kグリッド付近にも小規模ながら平坦地が存在する。こちらは雨水などの自然作用とは考えられず、岩陰への行き来や作業場を確保するため、地山の急傾斜を削りとり、地形を加工した可能性も想定できるが、これを支持する痕跡は発見できなかった。

(2) 洞の形成

前述のように、岩盤の基底は前庭部の調査区内だけでも落差3m以上が想定される。おおよそ南西への傾斜がたどれる岩盤のその後、寺院跡の造成で第2平場にあたる部分が改変されているため定かでない。

しかし、切り立った露頭岩盤態は、三沢川と並行するように、南の上流方向に少なくとも数十m続いている。その地表近くでは、岩陰や洞穴の埋没を彷彿とさせる傾斜の変化が数箇所を確認できる。さらに、調査区内でも南端の岩盤壁が再びせり出しつつその度合いを強める気配を見せるなど、複数に及ぶ岩陰や洞穴が招呼の間に隠されている可能性も強い。

これら岩陰や洞穴が、いつ頃、どのような環境のもとに形成されたのかは、結局のところ、確たる結論を得られなかった。ただし、火山性の溶岩流や火砕泥流などによって形成された洞でないことは歴然としており、対面する三沢川の浸食か、植物根の作用も含めた岩盤自身の構造力学的崩壊のいずれか、あるいは両者の相乗であることは確かだろう。

遺跡周辺は、三波川変成帯の東端にあたり、三沢川をはさんでそびえる叢山を形づくる緑泥片岩帯が、第23図のA断面に沿うように遺跡のすぐ東までのびている。洞穴がある地点は石墨片岩主体の地域とされ(飯島1988)、網雲母片岩が局所的に生成されている。また、三沢川兩岸の平坦地は低位段丘に分類され、左岸の戦場(せんば)集落ではローム層が堆積している。

これに対し、右岸の洞穴と三沢川の間横たわった寺院の平場は、段丘面をありのままに利用したようにも見える。だが、同図下段に示したが、洞穴入口と現三沢川との距離約70mの間には、約18mの高低差のなかに、大きく3段の段丘基盤面が見られ、石垣段差はこれに必ずしも対応していないことが分かる。

その最下段は、寺院跡第3石垣から水田面に至る部分で、対岸の戦場集落には存在しない。確認はしていないが、おそらくローム質土は存在しないだろう。

また、中段の基盤は水田直上から約30m幅で広がっている。その東半分には岩盤に接して明黄褐色や円礫

をふくむ暗褐色のローム質土が1.5mほどの厚さで堆積しており、岩盤に対する直接の浸食作用から、本流の下谷とともに、川原化、そして乾燥した土壌形成までの過程をたどることができる。

その上位は標高167m付近にあり、戦場集落の段丘面に対応する。この部分の火山ガラス分析によれば、UG降下後の形成が有力であり、一次的な堆積と考えられる。また、その上位では、上位段丘崖側に後背湿地を思わせる窪地があり、沖積世に至っても、時折三沢川の流れにさらされていたことが分かる。

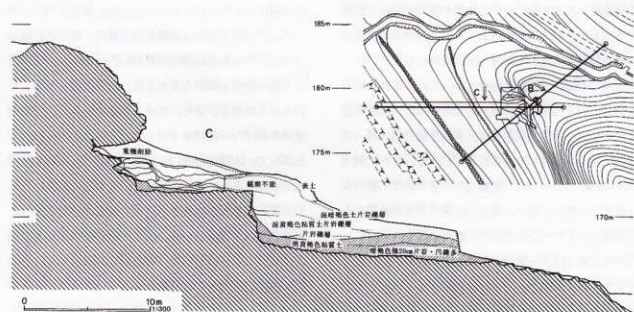
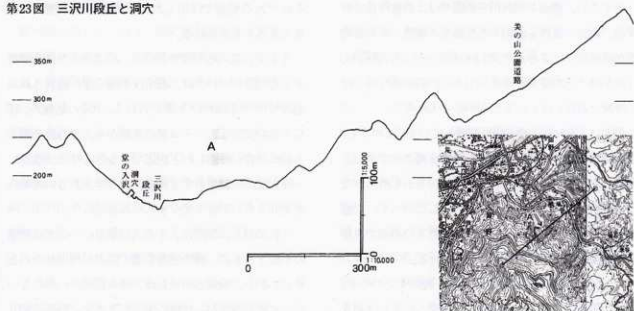
さらに、洞穴の存在する最上段でも地山とした同質の明黄褐色土が確認できており、高さのかけ離れた両者の対応が風性の一次堆積を示す根拠になる。だが、この段は、尾根筋の末端に連なる岩盤の露頭と、洞穴調査区一帯に残るローム質土の狭い範囲に終始し、北は堂の入沢によって断ち切れ、南は急傾斜の後に中段に移行すると考えられる。

3段のうち、中段の西側には、洪積土も含め、土がほとんど現存していない。これに対し、寺院跡第2石垣から東には、おおよそ均等な傾斜を示す沖積土の堆積があった。中段の沖積土は、暗から黄褐色土をまじえる片岩中心の礫層で、丸みを帯びた川原石をほとんど含まない。したがって、土砂の供給源は三沢川ではなく、より上位にあると考えられる。

しかし、第23図のC断面ではわかりづらいが、今回発見した最上段の縄文包含層は、地山の傾斜する南西に土砂が流出する傾向があり、C断面に沿う西への流出は少ない。また、包含層の周囲は土砂に乏しい露頭岩盤であり、中段沖積層の供給源たり得ない。

縄文包含層で唯一西に層厚を拡大するのは、早期中葉にあたるNVC・ND層である。後に詳述するが、両層は均質な礫質層であり、外部から供給された可能性が大きい。中段との関係は段丘試掘時の安全性から、詳しく観察できなかったが、おそらく連続すると考えられる。両層の観察では、堂の入沢での山崩波も想定できた。段丘傾斜に抗する層厚の拡大と中段の土砂量からすれば、可能性は否定できないだろう。

第23図 三沢川段丘と洞穴



ともあれ、遺跡と三沢川との間では、岩盤段丘の形成後、崖線の傾斜を緩和する洪積土の堆積、そして均等な斜面形成に至るまで、川と山からの土石の供給や、これを削り込む浸食を含め、山あいの斜面地ならではの複雑な過程を経ていることが察せられる。

洞穴は、それらの最上段に位置している。このうち、L列以南の岩肌が比較的滑らかなまま残されていた。構造的な崩落が並列するいくつもの、しかも滑らかな凹部を形づくるとは考えられない。したがって、岩盤壁は、三沢川が浸食によって形成したこの斜面で現存する最古の段丘崖に相当すると思われる。

そして、北側では尾根筋の岩盤が、稜を失いつつも、西側に張り出している。そのため、北への流れは調査区周辺でさえぎられ、渦巻く水流が浸食を助長し、岩陰となるノッチを形づくったと考えられる。

これに対し、洞穴の内部は、奥に進むにしたがって結晶片岩の小口が切り立つ荒々しい肌を見せる箇所が多くなる。これは側壁や天井部でも同様で、少なくとも洞穴奥は、水流による浸食とは考えられない。随所で見られる片岩片理との符号などから、洞穴は構造力学的な崩落によって誕生したと思われる。

さらに、第23図中段の洞穴主軸に沿った断面で見ると、洞穴を抱く露頭岩盤は、三沢川に向かってもたれかかるように独立していることがわかる。堂の入沢側の斜面は、前項で示した片岩片理の平均的傾斜に類似する。また、洞穴側は崩落著しいが、頂部から岩庇への斜面角度は、堂の入沢側とはほぼ直角になる。

現地での細かな検証はできなかったが、結晶片岩の性質と、洞穴内での事例をあわせ考えれば、露頭岩盤は、少なくとも洞穴周辺では、その主軸方向に沿って三沢川方向に褶曲していることがわかる。また、洞穴内との角度の差からは、岩盤内のいずかかに不整合が存在する可能性が高く、あるいは洞穴天井の亀裂もこれを呼び水としているのかもしれない。

洞穴の誕生は、三沢川の浸食が生み出した岩陰様のノッチがまず形成され、これに加え、ノッチと岩盤の形態とによってもたらされた負荷と、岩盤の質などが、

それぞれの場面で作用した力学的な崩落・流出の結果であると考えられる。

そして、洞穴の形成時期だが、前述のように、少なくとも岩陰については、最上段の段丘崖が浸食される過程で形づくられたと考えられる。中段の岩盤が、UGを含む安定したローム層の堆積から、1万数千年より前に浸食が終了したと想定できるのに対し、岩陰は、一段上位に位置することから、数万年、あるいはそれを上回る古い形成年代を与えられるだろう。

これに対し、洞穴は、その入口部分については岩陰の形成とともに、後の崩落を導く窪みが刻まれただろう。しかし、洞穴への成長は、時の長短はわからないが、水流が遠ざかった後に生じたことを、内部の切り立つ小口がものがたっている。

遺跡では、縄文時代草創期以前の遺物が検出されず、洞穴内では早期前葉の土器も皆無に等しい。また、前庭部で認められた同期の土器を含む層も洞穴内に達していない。単純に考えれば、洞穴の形成が認知されたのは早期中葉以降となってしまう。

だが、後述するが、洞穴の最下に積もるNF層は、早期中葉の土器が少量含むものの、土色や質から、ローム層の二次的な変質と考えられる。同期の人々か外のローム土を洞穴に敷いた可能性は低く、本来の堆積土が人の往来や環境で変化したと解せる。つまり、洞穴は洪積世のうちに開口していたことになる。

また、洞底と地山は段差もなく移行している。この部分に人的な加工は認められない。つまり、ローム層が岩盤の流出を抑えるとともに、開口範囲を制約していることになる。逆に、ローム層は、現状か、岩盤の流出を妨げない範囲を上限としていたことになる。したがって、本格的な開口と洞底の確定は、ローム層形成の最後にあたる洪積世末期ということになる。

以上、薄弱な根拠ながら、洞穴形成の経過を探ったが、洞穴内の包含層を見る限り、その後も小規模な剥落は続いている。そして、天井部の亀裂を加え、少しずつ規模を拡大したと考えられる。

(3) 土層の観察

第19図に示したとおり、洞穴部の調査では10本の土層断面図を作成した。第25図～第27図にこれらを示したが、洞穴発見の経緯や寺岩跡造成から続く現代の地形が災いし、グリッド方眼の設定や断面観察の方向は、遺跡の本質をうまく表すものとはならなかった。

これを補うため、洞穴内では1mごとに、また、主軸断面も可能な限り測量図を作成した。その結果、洞穴密閉後に岩盤亀裂を伝って落下した0層と、確実な地山を除き、6種の大きな文化層を認定した上で、それらを細別した34の堆積層に分離した。

この他、今回精査を実施した包含層の上には、人力では太刀打ちできず、重機で掘削した崩落層があった。この層は、岩底や岩盤壁が崩落した巨石が多く含まれており、薄い表土面直下から岩盤壁付近で約1.4m、岩盤壁から遠ざかり、巨石の分布がみられなくなる調査区の西端では約0.3mほどの層厚があった。

この崩落層は、表土を除いてもさらに分離が可能だったようで、その中・下位では、縄文時代中期土器や石器が含まれるとともに、第1供養塔群の下層組み石は、この層を掘り込んでおり、そして、その直下の地表下約0.4mでは、弥生時代中期土器を含む黒褐色土がわずかに広がっていた。しかし、新遺跡発見時の混乱と崩落層の重機除根を急ぐあまり、これらの満足な記録を残せなかった。

精査を実施した縄文包含層は、洞穴入口の岩底直下で約1.9m、もっとも厚い南西隅で約2.9m堆積していた。遺跡の概要で述べたとおり、後者は下層の調査を断念しており、周辺に見る地山層の傾斜からさらに約0.8mの包含層が存在したと考えられる。現表土から岩盤・地山までを見れば、それぞれ約3.3m、約4.0m下位に相当する。

包含層は、おおそ南西に傾斜しており、岩盤が露頭する北方からの傾きが特に強い。上位にあたる洞穴内や調査区北方は、包含層から直接網雲母片岩の岩盤に至り、岩盤壁の直下から南西方は岩盤の直上に堆積した明黄褐色のローム質土を地山と認定した。

包含層で出土した遺物の時代幅は、洞穴内では縄文中期後半から縄文早期中葉の沈線文系まで、前庭部では前期後半から早期前葉の燃糸文系までが中心であった。地山層については、調査の最終で数箇所を探したが、人工遺物は認められなかった。

これらのなかには平地に広がる遺跡の論理ではどうも考えられない堆積を示すものもあり、その解釈にとまどった。また、洞穴入口に堆積した灰層は、最大約1.5mの厚さで保存されていた。そして、灰層の周囲では、後の変質を彷彿させる層もあり、平地遺跡とは比べものにならないほど、形成過程への理解が包含層把握の前提条件になると考えられる。

そのような土壌堆積のなかで、洞穴岩陰遺跡に特有、かつ共通する特徴となる雨垂れ痕が検出できた。せり出した岩底が下位の堆積を取り崩し、あるいは土壌の変質を導いた痕跡は、洞穴入口部の5・6列近辺で明確に検出できた。

主たる雨垂れ痕は、洞穴入口から南の岩盤壁に沿う旧岩底直下において、前期の包含層と似通った粘質強い黒褐色を呈する薄層となって現れた。確認できた落差は最大約1.5mにも達し、早期中葉に形成された下層の粘質土に遮られる形で消滅していた。また、この周辺土層でも洞穴位置口中央に分布する灰層を上下に巻き込むような傾向が見られた。これらは堆積の序列を反映したものではなく、雨平の滴りによる後天的な土壌の変質に起因すると考えられる。

雨垂れ痕は、洞穴側から見るとI・J列付近でもっとも発達しており、K・L列で大きく後退、M列で回復した後、南に向かって徐々に消滅していく。これは、旧岩底のせり出しをそのまま反映していると考えられ、かつて調査区南方に存在した岩底を彷彿させる。その水平的な伸縮差は、第20図に示した灰層の分布によっても推し量ることができる。

さらに、下層の地山明黄褐色土でも雨垂れに起因する土層の傾斜が同じような位置に残されていた(第18・22図)。この傾斜は、一見したところ、上位の雨垂れ痕より洞穴に近くなる箇所もあり、岩底の時相経

過による後退モデルと矛盾するようにもとれる。だが、雨水の滴りは岩庇の水平限界と逐一対応することはあり得ない。たとえば、庇が緩傾斜であれば、水滴はその張力で庇より下方にまで伝い降ることができる。滑らかな浸食面が風化するにつれ、滴下点がより外方上位に移動することも想定しなくてはならない。

一方、これまで述べた洞穴入口部の痕跡を第一の雨垂れと称するならば、本洞穴遺跡では成因の異なる雨垂れ痕が他に二箇所存在した。

第二の雨垂れは、洞穴内部の中央天井で南北に走る亀裂に起因すると考えられるものである。この亀裂は岩盤を貫き頭上の屋外にまで達しているようで、雑木の太根がそここに顔を出していた。また、縄文包含層が密閉された後も、この亀裂を伝い、屋外の黄褐色土が流入していた。さらに、それ以前の前期堆積層や早期灰層にからみ、前庭部と似通った土層の巻き込みが観察できた。

そして、第三の雨垂れ痕は、調査区南の小庇直下に形成され、洞穴口から続く上位の大庇のうちに、小規模ながら観察できた。こちらは極端な土層の巻き込みはなかったが、早期後葉の形成土が滑り込まれた前葉の粘質土を受け皿とするように堆積していた。

この他、岩盤側壁に接する部分では極端な土層の下降や上昇が観察できた。とくに、側壁がハングする場合には上層域の堆積が遅れがちとなるようで、いくつかの箇所が空洞のまま残されていた。

また逆に、下層に堆積していた腐植質土は、側壁付近にいたり、急上昇する。この層は灰層直下で限定された対応関係にあり、第一・第二の雨垂れ痕とも関連をもつ気配がある。岩盤や雨垂れににじむ湿気が旧来の堆積土に変質をもたらしたと推測している。

このような堆積環境のなか、妙音寺縄文包含層は、小規模な雨垂れ痕である第三を除き、第一・第二の雨垂れ痕を境として大きく三分される。そのうち、第二の雨垂れ以东の洞穴奥は、自重を受けないまま密度粗く堆積した土質層が主体である。また、二つの雨垂れにはさまれた洞穴入口部では、うずたかく堆積した

灰層と前述の腐植質土、そしてこれらを取り巻く土層のさまざまな変化と変質が際だっている。

これに対し、前庭部では岩盤剝落の礫を多く含み、しかも自重によって高密度化した粘質土層が主体となっており、それぞれの変化に乏しく、お互いを見分げづらい。そのなかで、早期中葉の堆積と半断した層の一部は、均質な小礫などから、洞穴からの流出や、その場での形成とは思えない特徴を備えていた。山津波など、外的要因が作用したとも考えられる。

以上のように、妙音寺洞穴遺跡縄文時代包含層は、二箇所雨垂れによって三分されるとともに、水滴や湿気に起因すると考えられる後天的な土壌変化を受けている。識別できなかったが、もちろんこの他、洞穴に立ち寄ったさまざまな人の動きが小規模な土砂の移動と混合をうながしただろう。

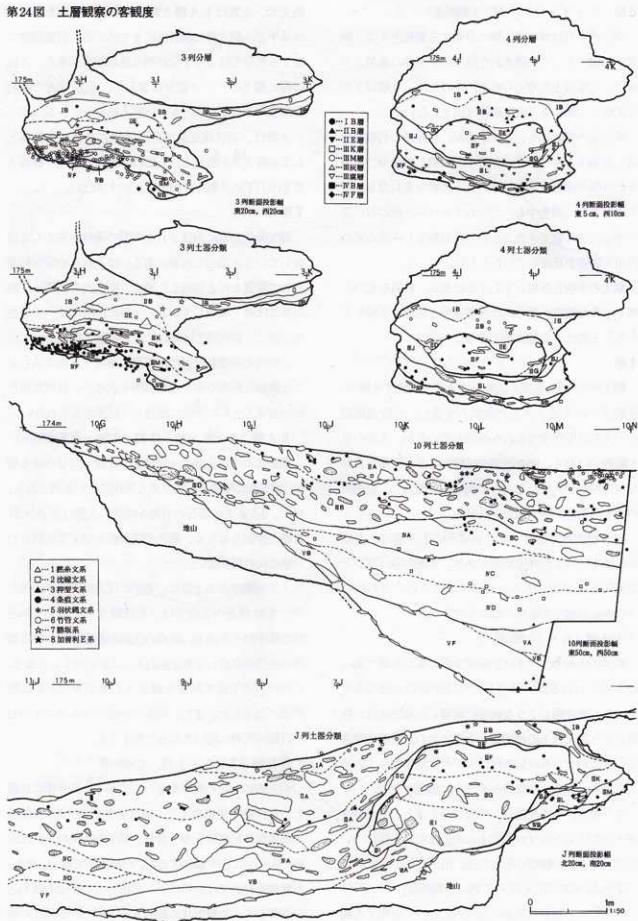
とくに、二つの雨垂れ痕は、分層作業を容易ならしめた反面、堆積の連続が断ち切れ、それぞれの地点間相互の対応関係が曖昧となってしまった。また、他の箇所でも、手狭な調査環境のなか、土層の検討に十分な時間を費やすことができなかった上に、担当者の考古・土壌学的な見識不足も加わり、多くの誤認が生じていると考えられる。その精度を半断する一助として第24図に土層断面と出土土器・層位取り上げとの整合を検証した図を掲載した。

調査時に行った分層作業では、隣接する層間のちがいの程度に大きな差があることに驚き、戸惑った。同図では、その際の印象を線の太細によって表現した。線が太いほど弁別が容易であったことを表す。加えて、層位別の遺物取り上げや土器分類を重ね合わせた。

土器分類との整合では、出土地点が地層累重に基づく上下を保っている前提で見れば、前庭部上位での文化期の認定と分層や、灰層上位ⅢF層付近の分層線などに不安がある。また、10L最下層の4類土器は、整理時の誤分類だろう。そして、洞穴内の3列断面には測量時の誤りと思われる混合が現れている。

以下、各層を個別に紹介するが、このような誤差の可能性を加味しつつ、検証を加えてもらいたい。

第24図 土層観察の客観度



0層 (2・3・H・J列, 主軸断面)

洞穴内3列以奥の最上層に分布する黄褐色土で、洞穴が落盤によって封鎖された暗黒に、天井の亀裂より落下した堆積土と考えられる。このため、I層以下の文化層とは異なり、人工遺物は出土しない。

洞穴上の岩盤にも、わずかに、前庭部の岩盤に付着した地山とおなじローム質土が堆積しており、亀裂を伝う根の成長とともに下方へと移動を重ねたものだろう。また、調査中も、ごくわずかに、雨の日に落下するのを目撃できたことから、岩盤をしみ通る水の作用も影響を及ぼしていたらしい。

掌大の平板な落盤石をわずかに含み、粘質をもつ。粗しょうな密度が緩やかな堆積速度と起源を示唆している。土質はVF層に類似する。

I層

縄文時代中期、前期の遺物を主として包含する層で、前庭部では大量・大型の落盤石を含む。岩陰遺跡認定の当初は手作業でこれを掘削していたが、人力の及ぶ範囲ではなく、調査区南の試掘により、下層に良好な包含層が見込まれることが判明した時点で、前庭部の大半は重機で除去した。

包含層調査で把握できた前庭部のI A層は、II層の起伏を反映した残留範囲である。重機削削は厚いところで1m弱あったが、前述したように、さらにいくつかに分層が可能だったようである。

I A層 (6・J列断面)

既述のとおり、本来は前庭部全面に広がる層であったと考えられるが、残存したのは中央の一部のみであった。やや粗しょうな密度に堆積した褐色土は、粘質なく、掌大以上の片岩礫を大量に含む。重機で除去した上位の大石群は岩盤壁に生じた大崩落を示すと考えられる。焼土・炭化物がわずかに観察できた。

人工遺物のうち土器は、竹管文系を主として条痕文系・中期土器がわずかに出土した。また、石器については、調査時の観察の限りでは、出土しなかった。

I B層 (2~6・H・J列, 主軸断面)

洞穴口の雨垂れ付近から洞穴内にかけて分布する褐

色土で、土質はI A層と共通する。堆積の上限はほぼ水平で、洞穴南の棚状部にまで広がる。岩盤側壁に接する部分ではより下位に潜り込む傾向があり、これは特に棚下のハング部分に著しい。6 G付近では岩盤側壁のずり落ちにともない厚く堆積している。

土器は、羽状縄文系から加曾目E系までを主体として条痕文系が加わる。石器は、洞穴内では、礫器3点と凹石1点、剥片が出土したにすぎない。

II層

縄文時代前期に形成され、同期の遺物を主として包含していると認定した層、あるいはそれらの層を起源として変質したと判断した層で、洞穴内では薄く、前庭部では厚く堆積している。一般に他層に比べて黒色味が強く、洞穴内では特にこれが顕著となる。

二御所の雨垂れ付近では下層の堆積土を抱き込むような奇妙な断面分布を示す御所もあるが、強烈な黒色味が湿気とともに下位に浸透した結果かもしれない。

II A層 (5・6・10・J列, 主軸・南東壁断面)

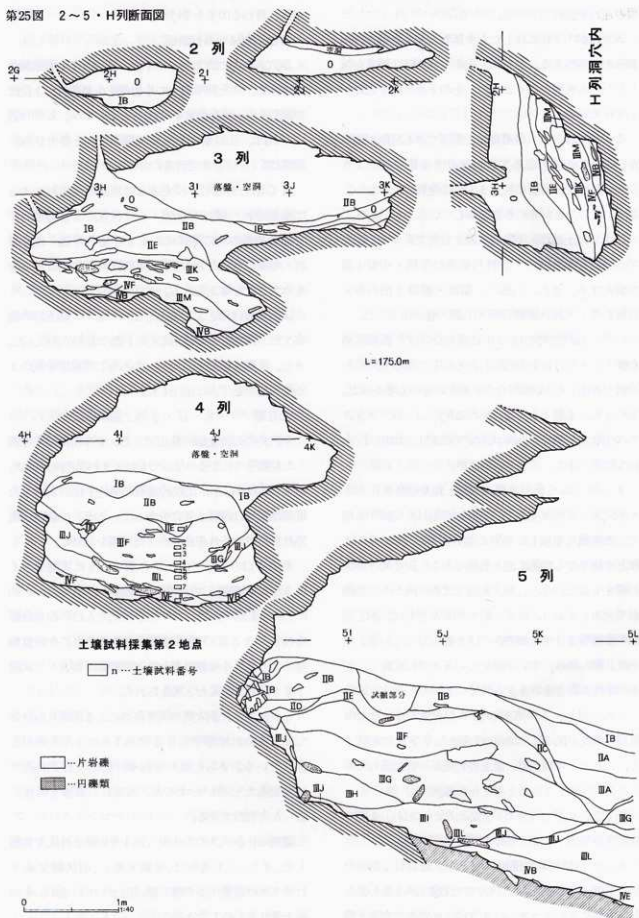
前庭部のおおむね全面に一定の層厚を保って分布する層で、やや密に堆積した粘りある黒褐色土が基調となる。だが、0.5m大の落石の有無を除き、土質はIII A・III B層と分別しづらく、褐色や暗褐色を呈する両層との分層には自信がない。

人工遺物のうち土器は、量的には条痕文系が主体だが、9 M付近の上位では、羽状縄文系や竹管文系土器の集中出土があり、分布の上限が前庭部における当時の生活面に近いと考えられる。これに対し、石器は、6列付近の下位で削器・礫器・打製石斧などが比較的密に出土した。また、同所の中位ではカワナ中心の貝類が灰層に近いあたりで出土した。

II B層 (3~6・J列, 主軸断面)

洞穴内に一定の層厚をもって広がる、やや密に堆積した粘りある黒褐色土で、掌大の片岩礫と0.5cm前後の網雲母片岩細粒を多く含む。洞主軸中央の上位は前庭に向かってやや傾斜するが、ほぼ水平を保つ。また、岩盤側壁付近では、特にハング部分での下位の落ち込みが著しく、岩盤形状に起因すると思われる前代の堆

第25图 2~5·H列断面图



積の遅れを反映している。

天井亀裂の下部にはしたたり落ちた滴に影響された窪みが1箇所ある。さらに、その下層では、層厚を減じながらも灰層を巻くように、その下部に潜り込んでしまっている。

この部分は、第二の雨垂れと表現できる痕跡であるが、第一の雨垂れとして次に紹介するⅡC層のような強い粘性や、薄層の独立までには発展していない。逆に、このことが滴の多寡を示しているともいえる。

出土した土器は、羽状縄文系と竹管文系を中心として、条痕文系と勝坂・加曽利E系の早期・中期土器が混在する。また、石器は、削器・礫器・凹石や、打製石斧・乳棒状磨製石斧・石製円盤が出土した。

一方、自然遺物では、ⅡE層を介さずに直接灰層と接する4列付近を中心に、かろうじて遺存していた貝類を検出したが、原形をとどめないものも多かった。このうち、本層でも下層にあたる5J-1-44ブロックで出土した貝類のC14年代測定では5710±120B.P.という結果がでた。

ⅡC層(5・6・J列、主軸・南東壁断面)

洞穴部と前庭部を画し、岩底の雨垂れを反映する層で、密度濃く堆積した粘質の強い黒褐色土は、0.1mほどの層厚でも容易に他と識別できる。炭化物と拳大の礫を少量だが含む。洞穴正面では西に向かって急傾斜で分布しており、灰層を断ち切るとともに、洞と前庭の堆積層を仕切る鮮やかな区線となっている。浸透は、約1.8m下のⅣB層をえぐるまでに成長し、同層の粘性に行方をさえぎられている。

これに対し、5・6列のK・L付近では、やはり灰層を断ち切るが、こちらは大きなV字状に起伏する。これは、堆積当時、直上の岩底が一部欠落していたことを反映していると考えられる。

転じて、北方では分布が見られなかったが、土質や堆積厚が類似するⅡE層が対応すると判断した。

人工・自然ともに遺物はほとんど出土しなかったが、上位では条痕文系、下位では沈線文系土器が見られ、土層にとまとうというよりは、絶対高で含有土器

が入れ替わる印象を受けた。

ⅡD層(4~6列断面)

洞穴入口部の北方で、やや密に堆積していた暗褐色土である。炭化物や拳大の片礫を少量含む。上位は標高173.4m付近で水平に広がっているが、6列付近の下部は、ⅡE層とともに灰層の下へと潜り込み、標高173.4m付近まで到達している。

ⅡC層とおなじく、主として岩底の雨垂れによって形成された層だろうが、6H付近の岩壁側壁のずり落ちや真の対応関係にあるⅡE層の浸透、側壁付近の堆積の遅れなどの要素が相乗して変動的な分布を生みだしたと考えられる。

人工遺物おほとんど出土しなかったが、調査時の観察では、羽状縄文系や条痕文系土器の出土が目立った。また、灰層と隣接するため、かろうじて原形を保つような貝類がわずかに出土した。

ⅡE層(3~6・H・J列、主軸断面)

洞穴内のおおむね全域で検出できる、やや密度濃く堆積した粘質土で、Ⅱ層のなかでもひととき黒色味が強い。最大でも0.3mと、比較的薄層の黒色土は、安定した堆積地区ではほぼ水平に分布しているが、二箇所雨垂れ付近ではそれぞれちがった展開を見せる。

洞穴入口の部分では、ⅡD層とともに灰層を巻くよう下部に浸透しており、水平分布の平均高から約0.8mの落差がある。この部分は洞穴入口の雨垂れ痕を特定できるⅡC層に対応し、北方で生じた岩壁側壁のずり落ちや堆積の遅れなどの要素が複合して灰層下まで分布が及んだと考えられる。

これに対し、洞穴奥の天井亀裂による雨垂れ痕付近では、上位に堆積するⅡB層の下垂れにより分布がとぎれている。さらに奥の3列や、最奥のH列付近での安定した分布からすると、雨垂れの影響を直接に被ったと判断できる。

遺構は、洞穴入口の中央で第1号炉跡と柱穴を検出した。また、人工遺物は、早期末葉と、羽状縄文系・竹管文系の前期土器や磨石類が出土しているが、その出土量はきわめて少ない。

Ⅲ層

縄文時代早期後葉に形成され、同期の遺物を主に含むと半断した層、あるいはそれらの層を起源として変質したと半断した層をあてた。洞穴の入口付近では灰層が形成され、奥もあわせて堆積量は洞穴内包含層の過半を占める。前庭部でも、洞穴内ほどではないが、黒褐色から褐色土の分布がほぼ全域に及び、包含層のなかでは、もっとも形成量の多い土層群となる。

灰層は、石組戸あるいは地床戸の構築や破壊を繰り返した累積と考えられる。他の洞穴岩跡遺跡の灰層例によく見られる薄層の土質層と交互になる類型とは異なり、すべてが灰のなかで、色調の濃淡や、わずかな焼土の集中が識別できる程度で、分布に規則性はない。が跡の破壊や純灰の流出を単位ごとに識別する細かな分層は困難であった。

加えて、灰層の最下位にあたるⅢⅠ層からは縄文時代早期中葉の土器も出土した。だが、平面的な掘削を前提とした精査途上では、明確な分層基準を見いだせなかった。おぼつかないながら、全体の濃淡によって灰層を四分する分層線を引きしたのは、断面図作成の直前となってしまった。そのため、遺物の帰属層はⅢFⅢG・ⅢH・ⅢⅠ層の四層をあわせた灰層全体でしか把握できていない。

さらに、洞穴入口部の灰層直下には腐植質の強い黒褐色から褐色土が堆積していた。灰層を取り巻くように分布していることはⅡ層と共通するが、こちらは反対に、灰層と岩盤側壁に沿って極端に上昇する。

これに対し、洞穴奥では通常の土質層が堆積しているが、前庭部にくらべて格段にやわらかい。また、調査区南東隅のハンク部では、小規模ながらも洞穴部とは異なる雨垂れと堆積の遅れが生じている。

一方、前庭部では、3種の層が灰層より一段さがあって、ほぼ水平に分布している。落盤礫だけでなく、小礫を大量に含む、かたく、土色や質による相互の識別がしづらい。

ⅢA層（5・6・J列、主軸・南東壁断面）

主として洞穴入口の雨垂れ痕の直上に形成された褐

色土で、西方への広がりでは7列付近で途絶え、ⅢB層にかわられる。やや粗しょうに堆積した粘りある土のなかには掌大の平板片岩礫が多く混じり、炭化物も少量が含まれている。

J列付近以南のⅢB層とは同派で、雨垂れ付近の傾斜を伝う流出の果てにⅢB層化すると思われるが、黒色が強い雨垂れに接するⅢA層の方が明度があるところに矛盾がある。

出土した土器は、条真文系を主体として、わずかに沈線文系が混じる。前期の土器は確実に出土しなくなる。また、石器は削器・礫器・磨石類が中心だが、あまり出土しなかった。

ⅢB層（10・J列、南東壁断面）

前庭部7列以西に分布するやや密に堆積した粘りある暗褐色土で、掌大の片岩礫や0.5mほどの落盤礫を大量に含む。上位は南方にやや傾斜しているが、極端な起伏はなく、層厚はおぼろ一定している。だが、10列付近の北側では岩盤の上昇に呼応するような傾斜に加えて層厚と礫の含有度を増しており、岩盤の露頭から礫がⅡB層中に流入したことを彷彿させる。

遺構は、第2号土壇が7Hグリッドで、配石が8Mグリッドで確認されている。また、人工遺物は、土器では条真文系がもっぱらで、石器は、8列付近で礫器中心の一群が大量に出土した。

ⅢC層（10F断面）

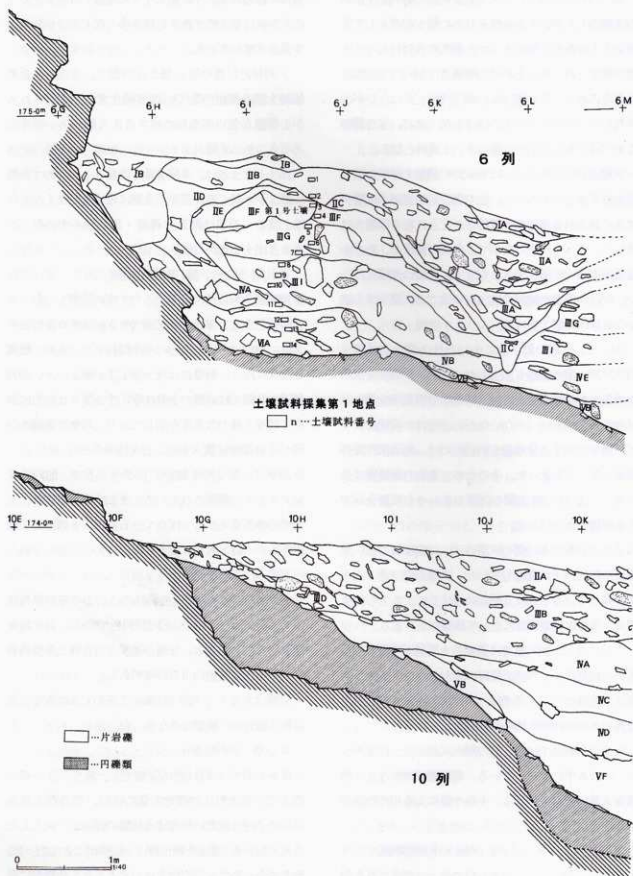
前庭部の南西1/4ほどの範囲に広がるのみ暗褐色土で、ⅢB層とほとんど同質同色である。炭化物を微量含むのも共通し、分層の基準は包含礫と落盤角石の小型化と少量化によるのみである。

遺物は少なく、土器では条真文系がもっぱらで、石器類は調査中に観察できなかった。

ⅢD層（10F断面）

8から11のI列以北に分布する。粘りのない褐灰色土で、掌大の片岩礫を大量に含む。ⅢB層北部と同様に、礫は直北に隆起する岩盤の露頭より流入したと考えられる。焼土や炭化物は一切検出できなかった。分布域からして、洞穴内をはじめとした生活残滓は混

第26图 6·10列·洞穴主軸・調査区東南断面図



入っていないものと考えられる。調査中の観察の限りでは、人工遺物おほとんど出土しなかった。

Ⅲ E 層（南東壁断面）

調査区南東隅でせり出しを増す気配のあるハング部の直下に分布している。流入した構成物は、ほとんどが岩盤上から落下したもののようで、図には表しきれなかったが、剥落礫などの方が土質より多い。それでも下位ほど土質が増し、粘りのない褐灰色土が粗しょうに堆積している。

この部分では洞穴部とは異なる第三の雨垂れ痕がⅤ D 層をえぐり込んでいた。このえぐり込みを形成した特別の分層線は描くことができず、滴の経路上に礫が多いこと以外、識別の根拠を得られなかった。

洞穴内同様、ハング部は堆積に遅れ、奥壁付近では急激に落ち込む。また、岩盤の直下は空洞のまま残されていた。

これに対し、堆積の上位も、岩盤近くでは急な傾斜をもっており、直上にはⅡ A・Ⅲ A という、6 K 付近で雨垂れ直上に分布している土層がそのままに観察できた。雨垂れ痕を示す明確な土層は確認できなかったが、かつて、さらにもう一つ上位に岩庇が存在し、その雨垂れがⅢ E 層を削っていたとも考えられる。

遺物は、条痕文系土器の小片がわずかに出土したにすぎない。

Ⅲ F 層（4～6・J 列、主軸断面）

洞穴入口部に堆積した灰層のうち、最上層に相当するものである。やや粗しょうで若干の粘りがあるにぶい黄橙褐色土として観察でき、焼土・炭化物粒子が微量含まれるとともに、同色だが、さらに明度をもつ純灰のブロックが零々と混入している。

岩盤の剥落を起源とする平板礫は極端に少ないが、大型の川原石がそこここで出土した。なかには直立した状態のものもあり、石組炉の一部を形成したものと想定し、周辺を精査したのだが、認定の明確な根拠を得られることなく抜き取らざるを得なかった。

遺物は、第2号炉がこの層の中位から掘り込まれており、第1号土壇が上位より構築された可能性が強い。

なお、第2号炉については、本来 J 列の断面にもかかってはいたはずだが、掘り込みの識別は難しく、第1号と共通する断面と、数少ない炉の全体像を写真に収めるのを優先し、土層観察壁を破壊した。このため、J 列断面には第2号炉が記入されていない。

この層から出土した人工遺物は極端に少なかった。わずかに条痕文系土器と礫器が数点出土したにすぎない。しかし、カワナなどの貝類が大量に出土し、他の灰層とは際違ったちがいを見せている。これらは、洞穴入口付近では、炉跡の設置場所を避けるように、空白となる中央をはさんで二分される。

Ⅲ G 層（4～6・J 列、主軸断面）

灰層中位にあたる層で、分布は洞穴内だけでなく、5列の岩底直下を中心に南方に広がっている。これに対し、洞穴内ではⅢ F 層の下層にあたるが、やや入口方向に片寄って分布している。土質はやや粗しょうの粘性ある灰質土だが、色調は上下よりややくらい暗褐色を呈する。焼土や炭化粒子を微量含み、純灰のブロックが斑状に混じる。

人工遺物の出土は極端に少なく、土器では条痕文系を中心とし、下位で沈線文系をわずかに交える。また、石器は礫器が少量出土しているにすぎない。骨貝類もⅢ F 層に比べはば格段に出土量が減少する。ただし、これは貝類についてで、結果として骨類の出土比が増加する。さらに、洞穴外の南方岩底下の L 列付近では、比較的にまとまって骨貝類の分布が見られた。

また、5 H グリッドの中層では屈葬人骨を発見した。さらに、洞穴入口の5・6列付近では川原石が多く出土した。屈葬人骨同様、周辺に掘り込みは確認できなかったが、石組炉の残骸と考えられる。

このうち、本層でも中ほどの高さにあたる5 J-1-35ブロックで出土したカワナを試料とし、C14年代測定を実施した。その結果、7890±440 B.P. という年代が報告されている。

Ⅲ H 層（5列断面）

おなじ灰層としての条件を満たしながら、他層とくらべると土質の強い層である。洞穴入口の5列比方で

しか観察できず、東西には大きな広がりをもたない。混入粒子や質は他灰層と共通するが、黒褐色の色調と伊弉用の自然石が極端に少ないことが他の三層との大きなちがいである。形成時に他の土砂の流入著しかったのか、下位や側面に分布するⅢ J層の影響を強く被ったのかが判断がつかなかった。

人工遺物おほとんど出土していないが、少量の条痕文系と沈線文系の土器が出土している。また、骨貝類の出土は少なめであった。

Ⅲ I層 (5・6・J列、主軸・南東壁断面)

灰層の最下位に分布する層で、洞穴内から外部の岩底部を経て調査区の南東壁面にまで到達する。だが、南ほど他の土砂との混合が進むのか、純灰ブロックの混入は少なくなり、鈍い黄褐色の土色も黒味を増してくる。そして、調査区南東壁面での広がり、層厚0.3m、幅0.5m程度まで縮小する。往時における主たる形成地も洞穴の入口付近であり、斜面の傾斜に従った流出のうち、岩底に保護された部分のみが洞穴外の分布として残存したと推測できる。

これに対し、洞穴内での分布は、上位の灰層と比べて西に片寄っており、Ⅱ C層による雨垂れ部分よりかなり外側にまで分布していた気配がある。上下をあわせ見ること、灰層の堆積経過と洞穴入口直上の岩底の後退との相関が彷彿できる。

堆積物の質は、基本的には上位のⅢ G層と大差ない。洞穴入口の中央付近では、閃緑岩を主体とする扁平な大川原石が、伊弉を彷彿させるように刺さった状態でいくつか発見できたのも上層と同様であるが、ここでも掘り込みは特定できなかった。

人工遺物のうち土器では、上層と比較して、条痕文系に加え、沈線文系の混入率が高くなる。しかし、他の層と比べて相対的な出土量は著しく劣り、貝類でも同じ傾向が見て取れる。これに対し、動物骨は上位と同等を維持しており、比率がさらに高くなる。

このうち、本層でも下層にあたる5J-1-29ブロックで出土したカワナノのC14年代測定では、8320±340B.P.という結果がでた。

Ⅲ J層 (4・5・J列、主軸断面)

主として灰層直下に分布する腐植質層のうち、上層に堆積する黒褐色土である。洞穴奥は岩盤天井亀裂を成因とする雨垂れ痕を目安に途切れ、入口では東西に分かれて分布している。4列付近の洞穴中央では、0.1mにも満たない薄層だが、洞穴側壁に対しては、Ⅱ層の下降と対応し、灰層を取り巻くように上昇しながら層厚を増していく。

これに対し、洞穴外の岩底部では、薄層ながら、Ⅲ G・Ⅲ Iに関わらず、灰層最下位に沿うように南方に広がり、L列付近で消滅する。前庭部土層との関係を把握できる断面位置に恵まれなかった。だが、5・6列断面を対比する限り、灰層のように、主たる雨垂れ痕であるⅡ C層を分布の限界にしているものではなく、それ以前に消滅していることがわかる。

土質は、上位の土圧がなかったかのようなフカフカと表現できる粗しょうな堆積で、砂質・粘質ともに感じさせない、そぼろのようなものであった。ただし、含有粒子等は他層とかわらず、焼土・炭化粒子を微量含み、ところにより平板礫が分布する。

人工遺物の出土は、おなじ腐植質ながら、Ⅲ L層に大きく水をあけられている。調査時の印象では、土器は、そのほとんどが条痕文系であった。また、石器の出土はほとんどなかった。

一方、自然遺物おかろうじて原形をとどめた骨や貝類が少数出土した。また、屈葬人骨の一部もこの層にかかっており、その部分のみが劣化していた。

Ⅲ K層 (3・H・J列、主軸断面)

洞穴奥の主溝部分にのみ堆積する層で、やや粗しょうな堆積の粘りある褐色土である。岩盤天井崩落の掌大の平板礫を多く含み、合間に焼土・炭化粒子を微量含む。ほぼ均等な層厚を保ち、下位の岩盤に対応するように、南西に向かって傾斜している。

人工遺物のうち土器は52点を本層の帰属として取り上げたが、5点の竹管文系を除き、他のすべてが条痕文系であった。また、石器は、削器・礫器・磨石類など、Ⅲ層内の基本器種は満たしているものの、その量

は15点と、比較的少なかった。

Ⅲ L層 (4・5・J列、主軸断面)

Ⅲ J層と色調が異なるのみで、同じ腐植質の土だが、色調の差は歴然としており、容易に識別できた。分布や含有粒子等はⅢ J層とはほぼ同様だが、層厚は0.3から0.5 m前後と安定しており、洞穴入口付近では、北方を欠くことが大きな違いといえる。

これに対し、洞穴の奥では、岩整天弁亀裂の雨垂れをおおよそ目安としてⅢ K層とⅢ M層の間に潜り込んで終結する。だが、実は、洞穴主軸断面の観察は、0層が無遺物層であることを認識し、これを除去して洞穴奥壁を確認した後に方向を決定したものであり、他の土層観察面と異なり、小ブロックの精査の都度、測点し、他との整合を考慮して図化したものである。特にこの付近では第二の雨垂れに影響されて複雑な土層先後の関係が成立している。そのため、観察に不手際があった可能性は極めて高く、後述する雨垂れとの関係からすれば、灰層を取り囲むようにⅢ K層より上位で終結したことも考えられる。

Ⅲ J層をも加えた腐植質層の成因は、はっきりとはわからない。灰層を下から包み込むように分布していることから、直接の影響関係にあったことが考えられる。だが、灰層が観察できる6列ではこの層は分布しておらず、主たる雨垂れであるⅡ C層に関わりなく消滅していることが伺える。また、Ⅲ J層における屈葬人骨の変質はこの層が後天的な変質によることを暗示している。同様の土質はミズなど好湿性の生物によって作り出されるはずだが、調査中に洞穴内ではこれを見ることはなかった。

腐植質層の分布は岩盤との関わりも深い。洞穴側壁では極端に上方へと発達し、土層図は作成できなかったが、洞穴外の岩底下でも東の岩盤に向かって顕著な傾向が見られた。加えて、洞穴入口の5列付近は基盤が岩盤から土質層へと変化する位置にあたる。このようことから、洞穴入口の灰層と腐植質層の分布差は、岩盤との関係に起因するとされる。

以上を考えあわせると、Ⅲ J・Ⅲ L層は当初灰層

として堆積した層が、水分、あるいはその湿気を好む目に見えない生物類との関係で後天的に腐植質化し、現代に至ったものと考えられる。また、Ⅲ J層に見られる黒色味は、Ⅱ C層と同様な、隣接するⅡ層の浸透に起因すると思われる。

一方、腐植質層に含まれた人工遺物は、他層より集中した出土が見られた。洞穴内でⅢ J層をあわせた腐植質土に帰属させた土器のうち、87%が条痕文系で、12%が沈線文系、1%が押型文系であった。また、石器も、組成は他のⅢ層と大きな差はないが、単一層では最高の64点が認定できた。これらは、特に4 J付近に集中する傾向が認められた。

Ⅲ M層 (3・H・J列、主軸断面)

洞穴奥の主洞部分にのみ堆積し、Ⅲ K層の直下で同様な分布傾向を示す。土質も似通っているが、黒褐色の色調と焼土・炭化粒子がやや多いのが違いである。土質の類似から、両層間の変化は漸進的で、平面的にはほとんど見分けられなかった。

狭い範囲ながら、遺物は大量に発見できた。その大半が土器で、198点を同層の帰属として取り上げた。この中には略完形品や、器形復元が可能なもの、大破片が多く含まれており、他層と比べて出土密度や遺存度に勝っている。この層の形成中に洞穴奥の死角が見込まれ、保管や保留場所とされた可能性が強い。

土器の内訳は、大半にあたる97%が条痕文系で、他の類は、下位で沈線文系が6点出土したのみである。これに対し、石器は、削器・礫器・磨石類など、Ⅲ層内の基本器種は満たしているものの、同層に帰属するものとして取り上げた製品19点が独自の傾向を見いだすことはできなかった。

Ⅳ層

縄文時代早期中葉に形成され、同期の遺物を主に含むと半断した層をあてた。洞穴内では岩盤にこびりつくように薄く堆積しているが、ある時期に土砂をかき取られた可能性もある。これに対し、前庭部では南西に向かって層厚が増すが、その度合いは上層より著しい。だが、調査区南東壁面ではⅣ層が保つ層厚が極端

に少なくなっている。

他の時期の形成層に比べると、全般的に色調が黄色味かかっているのが特徴で、大きな礫の混入は比較的少なく、前庭部では大量の均質化した小礫を含むのが他層と極端に異なる点である。たとえば、10列断面で礫があまり描かれていないのは、測点に手開取る大きさの小礫があまりにも大量に含まれていたため、断念せざるを得なかったためである。

ⅣA層(6・10・J列断面)

前庭部第一の雨垂れ直下から、主として西に向かって分布する層で、密に堆積したかなり粘りのある灰黄褐色土が主体となる。Ⅲ層までとは異なり、岩底を起源とする崩落平石はかなり減少するが、大きさのそろった片岩小礫を多く含む。上下位ともほぼ水平に堆積しており、他の前庭部層とは異なり、調査区南壁や西壁にさしかかる前に消滅してしまっている。

これに対し、洞穴側の限界である6列付近では、北方に向かって岩盤を伝うように上昇する。また、灰層と相対する箇所では、雨垂れ痕のⅡC層のみならず、灰層のⅢI層までが本層を切り込んでいるような気配を見せる。後者については、実際の作用の結果か観察の誤りか解釈がつかなかった。

人工遺物のうち土器は、沈線文系を主体として上位で条痕文系が混在する。また、石器は、8列付近で多く出土した。なかでも礫核の原形を多く残す礫器が集中する傾向がある。

ⅣB層(3~6・H・J列、主軸断面)

主として洞穴内の奥から南側に分布する密に堆積したかなり粘りある暗褐色土で、崩落平石はあまり含まない。洞穴外では岩底部に沿って広がっているが、調査区南東壁面までは到達せず、L列付近でⅣE層に代わられる。多くの上層に分布するⅢL層との差はあらゆる面で歴然としている。

遺構は、4Kグリッド上位で第3号炉跡を検出した。灰層中で検出した炉跡と異なり、こちらの炉跡は焼土が遺存しており、土質の違いを表している。

人工遺物のうち、土器は、24点を同層に帰属するも

のとして取り上げた。このうち19点までが沈線文系であり、わずかな燃土文系・押型文系・条痕文系が混じる。また、石器は、層位を特定して取り上げた11点のうち、礫器が8点と大半を占める。

ⅣC層(10・J列断面)

8列から西の前庭部南東に広がる層で、西と南の調査区外に向かってますます層厚を重ねる気配すらある。主体は5cm大の均質な片岩小礫で満たされ、その間には黄褐色の砂質土が粗しょうに堆積している。直下のⅣD層とはほとんど同質だが、礫間に含まれる砂質土の大きさに違いがあり、こちらの方が大きい。

直上の岩盤崩落を起源とする平板な大礫がほとんど含まれないにも関わらず、小礫が充満することは、これらの起源を周囲の岩盤ではなく、他に求めなければならぬことを示している。

たとえば、J列断面の西方に見るように、ⅣC・ⅣD層は西に向かって層厚を増している。この傾向は、第23図に示した河岸段丘図でも見て取れ、東側の窪みと組合わさった盛り上がりは、一段下のローム質土の断面とも類似する。このような高低は、遺跡が面する三沢川の洪水などで形成された自然堤防と後背湿地地形とも考えられる。だが、ⅣC・ⅣD層中には摩滅した川原石がほとんど見られない。

また、洞穴の背後にある堂の入りで山津波が生じ、ほとぼしる本流の余波が前庭部北の岩盤を巻きながら到達したともとれる。だが、この場合も強大な破壊力が一つの巨石もたらさなかった不自然が残る。

結局のところ、確たる成因にはたどり着けなかったが、ⅣC・ⅣD層は、包含層の身近な周辺を供給元とする時間経過的な堆積の累積ではなく、それぞれ外部の土砂が短期にもたらされ、堆積したものと判断でき、後者の繰り返しを被った可能性が強い。

出土遺物は極端に少なく、大半が南方で確認したものである。このうち、9・10L・Mグリッド付近では、ⅣC・ⅣD層の狭帯にのみ沈線文系の有文土器が集中する傾向があった。このことが、両層の分層根拠となるとともに、両者の形成に間隙があり、堆積のきつ

けが繰り返されたことを暗示すると考えられる。

ND層 (10・J列断面)

前述したとおり、NC層に類似する層で、識別は小礫の間に堆積した黄褐色砂質土の粒大による。分布も同層とはほぼ同一で、きつかけや供給元はわからないが、おなじ形成過程をたどったと考えられる。

土器の出土状態についても前述のとおりである。また、石器はほとんど出土していない。

NE層 (5・6列、南東壁断面)

L列以南の前庭部東南、そして雨垂れ付近にのみ南北に長く分布している層で、密に堆積したかなり粘りある暗褐色土で構成されている。岩盤崩落の平板礫は少なく、焼土・炭化物粒子はほとんど見られない。

調査区東南壁面では、灰層のⅢI層がこの層に食い込むように検出できた。これは、6J付近のNA層と灰層との関係と類似する。しかし、なぜこのような堆積状況を示すのかは考えが及ばなかった。

遺物は少数だったが、土器は沈文系・押型文系が出土し、石器は礫器や剥片類が出土している。

NF層 (3・4・H列、主軸断面)

洞穴内4列北側付近から奥にかけてのみ分布する層で、奥ほど層厚が薄く、岩盤にこびりついたようになる。洞穴内では最下層にあたるが、5列以西では観察できず、前庭部との関係は不明である。土質はNB層と同一で、明度のみが増し、褐色となる。

人工遺物は、層厚と分布域が少ないため、あまり認定できなかった。このうち土器では、12点帰属を決定し、取り上げた。そのなかで、11点までが沈文系であった。また、石器は3点の礫器製品とホルンフェルス製の剥片が4点出土したにすぎない。

V層

縄文時代早期前葉の土器を主として包含する層と判断し、統一したもので、主たる雨垂れの外部に集中し、洞穴内での発達はみられない。ただし、調査区東南隅のハング部に形成された第三の雨垂れでは、その内に分布する層が確認された。

一方、雨垂れ外の前庭部では、南西に向かう傾斜の

うち、中段の平坦部や東南端の緩傾斜部に土質の強い層が分布し、この下の急斜面には落盤平板礫を大量に含む礫質層が堆積していた。

色調は、大きく灰系色の強い土と、黄系色に秀でた一群とに大別できるが、これは、主たる供給源の違いとして理解できる。前者は沖積土、後者は地山洪積土の流出に起因するだろう。

VA層 (10列、南東壁断面)

前庭部南西隅にのみ確認できた層で、やや密に堆積した粘りある暗褐色土が主体となる。ただし、粘りはV層に含めた土質層の中でももっとも弱く、落盤に起因する平板礫や大石が多く含まれる。

土器は、燃系文系を主体として沈文系・押型文系が同位置で混じる。また、石器はⅢ・Ⅳ層に比して極端に少ないが、礫器・磨石類が出土している。

VB層 (6・10列、南東壁断面)

前庭部中央から南に向かって分布し、調査区南端の8列付近で最大厚を示す層で、密に堆積したかなり粘りある暗褐色土で占められている。V層の多くは地山層の傾斜を反映して南西に向かってかなり傾斜して分布堆積しているが、この層は、急傾斜部で一且消滅し、平坦・緩傾斜部でのみ発達している。

土器は、燃系文系が出土している。石器は、出土量が減じるが、礫器と剥片類が出土している。

VC層 (主軸・南東壁断面)

前庭部の岩庇南半から調査区南東隅のハング部下でのみ観察できた層で、密に堆積したかなり粘りある黒褐色土で占められている。0.5mほどの層厚をもつが、西側は雨垂れ度であるⅡC層の直下で急激に落ち、消滅している。したがって、この部分も岩庇に保護された同層が雨垂れによって削り崩れた状態を反映していると考えられる。

土器は、燃系文系を主体として、沈文系と押型文系が少量混じる。石器は剥片類が中心であった。

VD層 (南東壁断面)

VC層と同じく、調査区南東隅のハング部下でのみ観察できた層で、きわめて密に堆積したかなり粘り

ある黄褐色土で占められている。岩盤の崩落に起因する平板礫はあまり含まず、焼土・炭化粒子もほとんど見られなかった。

堆積の低位は岩盤および地山の直上にあたるため、一律に近い緩傾斜だが、その上位は、直上の岩盤形状を反映した不規則な垂直分布を示す。すなわち、奥壁付近では、岩盤に接する部位が堆積が遅れ、急激に落ちる。また、東西の中央では、II C層を形成した巨大な岩底の低位に従う小庇の雨垂れ痕がIII E層のえぐり込みとして現れている。そのさらに西でも堆積層が急傾斜となるが、小庇直下の分布厚を見る限り、初期堆積の傾斜をそのままに残していると考えられる。

人工遺物は、ホルンフェルス製の大型剥片が1点出土したのみであった。

VE層 (断面図外)

11 L 付近から南西の調査区外に向かって確認できた層で、報告に示した断面図中には含まれていない。地山が流出したと思われる黄褐色のローム質土が構成の主体だが、掌大の平板礫や小礫を多く含むため、粗しょうに堆積したように見える。上位が隆起するように層厚最大0.3 mに達した時点で調査区外へと至る。

遺物はホルンフェルス製の剥片類がわずかに出土したにすぎない。

VF層 (10・J 断面図)

10 J 付近より南西に広がる礫質層で、掌大の平板礫を大量に含むため、VA層ブロックを所々に含むものの、全体が褐灰色に見える。多くの箇所で地山直上に位置し、垂直分布もその傾斜を反映し南西に向かって急激に傾いている。層厚は包含層の中でもっとも厚く、約0.6 m以上に及び、さらに、調査を断念した調査区南西隅の下層に向かって増す気配もある。

人工遺物は分布範囲の北側でおほとんど出土しておらず、南側の傾斜部に偏っている。このうち土器は、燃糸文系と押型文系が出土したが、後者は縄文・無文であり、分類時に燃糸文系や並行する異系統の土器を誤認している可能性もある。また、石器類は、剥片類を除き、ほとんど出土していない。

VI層

地山とは異なるが、極く初期の地山の流出や、岩盤のずり落ちなどに起因すると判断した層である。前庭斜面上部と南端など、局地的に認められる。調査時の観察では、基本的に出土遺物はなかった。

VI A層 (6・J 断面図)

前庭部6列付近の主たる雨垂れ直下に堆積している。やや粗しょうだがかなり粘りある明黄褐色土で、平板礫や20 cmほどの角礫を大量に含む。洞穴入口の雨垂れ内側を縁取るように分布し、上位にこの層の起源となるほどの地山層が存在しないことから、雨垂れの直撃や浸透で地山が変質したと考えられる。

また、遺物断面投影の6列北方上位は投影端に起因する誤差であり、VI層が基本的に無遺物層であることは、整理作業を経た段階でもかわりない。

VI B層 (南東壁断面)

調査区南東壁面近くの緩斜面部でのみ検出できた層で、やや粗しょうに堆積した粘りあるにぶい黄褐色ローム質土である。平板礫をわずかに含むが他に含有物は認められない。層厚は薄く、成因が地山の流出か雨水などによる変質かは判断できなかった。

地山

片岩平板礫を多く含むローム質土で、縄文時代より前の堆積と判断し、地山とした。洞穴内には存在せず、前庭部では全域に分布する。堆積は岩盤の段差を斜面化するように厚薄が変化しており、全体では調査区南西に向かい急激に落ちている。

このうち、洞穴入口の主たる雨垂れ付近では不自然な段差が形成されており、VI A層と関係して雨水の影響を受けたものと考えられる。また、調査区南東壁面付近では、第三の雨垂れ直下ではやはり段差が認められ、これも同様な作用の結果と判断できる。

さらに、包含層調査完了後、重機による段丘観察の際には分層が可能な気配があった。だが、これを層厚を保つ南方向に広げるには安全上の問題が多すぎ、単一層の認定で断念した。

ある黄褐色土で占められている。岩盤の崩落に起因する平板礫はあまり含まず、焼土・炭化粒子もほとんど見られなかった。

堆積の低位は岩盤および地山の直上にあたるため、一律に近い緩傾斜だが、その上位は、直上の岩盤形状を反映した不規則な垂直分布を示す。すなわち、奥壁付近では、岩盤に接する部位が堆積が遅れ、急激に落ちる。また、東西の中央では、II C層を形成した巨大な岩底の低位に従う小庇の雨垂れ痕がIII E層のめぐり込みとして現れている。そのさらに西でも堆積層が急傾斜となるが、小庇直下の分布厚を見る限り、初期堆積の傾斜をそのままに残していると考えられる。

人工遺物は、ホルンフェルス製の大型剥片が1点出土したのみであった。

VE層 (断面図外)

II L付近から南西の調査区外に向かって確認できた層で、報告に示した断面図中には含まれていない。地山が流出したと思われる黄褐色のローム質土が構成の主体だが、掌大の平板礫や小礫を多く含むため、粗しょうに堆積したように見える。上位が隆起するように層厚最大0.3 mに達した時点で調査区外へと至る。

遺物はホルンフェルス製の剥片類がわずかに出土したにすぎない。

VF層 (10・J列断面)

10 J付近より南西に広がる礫質層で、掌大の平板礫を大量に含むため、VA層ブロックを所々に含むものの、全体が褐灰色に見える。多くの箇所で地山直上に位置し、垂直分布もその傾斜を反映し南西に向かって急激に傾いている。層厚は包含層の中でもっとも厚く、約0.6 m以上に及び、さらに、調査を断念した調査区南西隅の下層に向かって増す気配もある。

人工遺物は分布範囲の北側ではほとんど出土しておらず、南側の傾斜部に偏っている。このうち土器は、燃糸文系と押型文系が出土したが、後者は縄文・無文であり、分類時に燃糸文系や並行する異系統の土器を誤認している可能性もある。また、石器類は、剥片類を除き、ほとんど出土していない。

VI層

地山とは異なるが、極く初期の地山の流出や、岩盤のずり落ちなどに起因すると判断した層である。前庭斜面上部と南端など、局地的に認められる。調査時の観察では、基本的に出土遺物はなかった。

VI A層 (6・J列断面)

前庭部6列付近の主たる雨垂れ直下に堆積している。やや粗しょうだがめなり粘りある明黄褐色土で、平板礫や20 cmほどの角礫を大量に含む。洞穴入口の雨垂れ内側を縁取るように分布し、上位にこの層の起源となるほどの地山層が存在しないことから、雨垂れの直撃や浸透で地山が変質したと考えられる。

また、遺物断面投影の6列北方上位は投影幅に起因する誤差であり、VI層が基本的に無遺物層であることは、整理作業を軽た段階でもかわりない。

VI B層 (南東壁断面)

調査区南東壁面近くの緩斜面部でのみ検出できた層で、やや粗しょうに堆積した粘りあるにぶい黄褐色ローム質土である。平板礫をわずかに含むが他に含有物は認められない。層厚は薄く、成因が地山の流出か雨水などによる変質かは判断できなかった。

地山

片岩平板礫を多く含むローム質土で、縄文時代より前の堆積と判断し、地山とした。洞穴内には存在せず、前庭部では全域に分布する。堆積は岩盤の段差を斜面化するように厚薄が変化しており、全体では調査区南西に向かい急激に落ちている。

このうち、洞穴入口の主たる雨垂れ付近では不自然な段差が形成されており、VI A層と関係して雨水の影響を受けたものと考えられる。また、調査区南東壁面付近では、第三の雨垂れ直下ではやはり段差が認められ、これも同様な作用の結果と判断できる。

さらに、包含層調査完了後、重機による段丘観察の際には分層が可能な気配があった。だが、これを層厚を保つ南方向に広げるには安全上の問題が多すぎ、単一層の認定で断念した。

3. 検出遺構

(1) 屈葬墓(第28・29区)

埋葬人骨は、洞穴入口の向かって左側、北の岩盤側壁に接して発見した。現況で観察できる垂直線からは約1m奥にあたる。調査グリッドでは大部分が5Hに相当し、わずかながら4Hの区域にかかる。

葬法は、頭頂をほぼ西に向け、北方をみるように屈位で横たわり、いわゆる横臥屈位の状態であり、しっかりと曲げられた膝下は、岩盤に接せんがばかりであった。背骨と膝下の距離は約30cmほどであり、当時の肉付きをも考慮すると、岩盤に足を押しつけるなどして、極めて窮屈な態勢にあったことが察せられる。死を前にした自らや、偶然の不可抗力がこのような姿勢を招くことは考えられず、葬送行為の結果であることは歴然としている。

人骨は足骨がやや高くなるが、ほぼ水平に横たっており、その平均標高は173.8m、直下の岩盤からの高さは0.5m前後に相当する。ⅢG層と、ⅢJ層の両層にまたがって検出できており、岩盤縁の足骨が後者に含まれていた。

前者は、洞穴入口部を中心に分布する灰層の中位にあたるが、石組炉の残骸が集中するのはやや南の5Iグリッド付近であり、人骨への被害は免れた。しかし、再三ふれるように、純灰とその流出土がめまぐるしく入れかわる堆積状態と同様であった。灰層中の分層は、流出土の明暗によるところが大きい。このため、平面・断面のいずれをとっても葬送にかかわる掘り込みの確信のいく認定は困難であった。

ただし、後述する第1号炉や柱穴をみる限り、第II層から掘り込まれた遺構の覆土と灰層とは明瞭な色や質の差があり、たとえ墓壇の存在を見落としていたとしても、前期以降の埋葬は否定できる。また、屈位を墓壇の規模で強制するのではなく、人為的な処置で足骨を束縛するとともに、遺骸の上に土などをかぶせたのみで送られた可能性も考えられる。

副葬品など、この埋葬人骨に確実に伴うとみられる遺物は出土しなかった。頭骨下では20cmほどの川原石

が存在したが、頭蓋には一端が斜めに接するのみであり、枕石とは考えにくい。

これに対し、骨盤上かつ大腿骨の付け根で無茎石鏃が出土している。単品での出土であり、石匙など、他の小型剥片石器が共存しないことから、副葬品とは認め難い。また、おなじ骨盤の下からは大きな川原石が水平に出土したが、やはり、周辺に掘り込みの痕跡を確認できず、確定できなかった炉跡の底石である可能性が強い。

また、出土土器も、灰層中では極端に少なく、埋葬人骨周辺でも同様である。上下のⅢFとⅢH層を総合的に見た場合、前者では早期後葉縄文系でも後半にあたる鶴ヶ島台式が出土しており、逆に後者のより下層では早期中葉縄文系の田戸下層式土器や、これに伴うと思われる無文土器が検出できた。

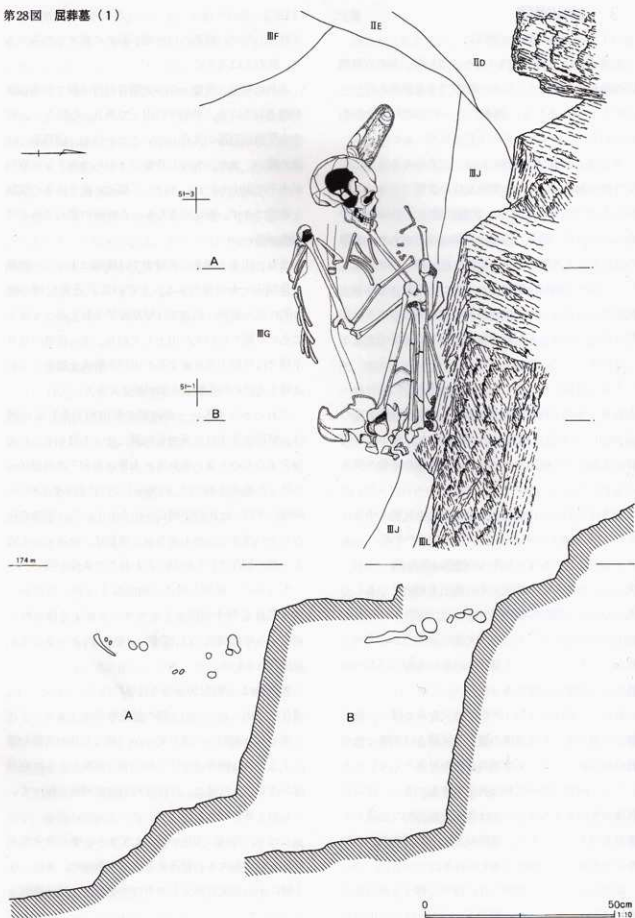
これらからすると、葬送期の堆積層であるⅢG層は、早期後葉縄文系でも初頭に近い土器を主として包含するものと考えられる。人骨分布とその外郭10cmに限った垂直分布では、約30cm上位では鶴ヶ島台式が、同様に下位では田戸下層式が出土している。墓壇の存否やその深さなどにもよるが、埋葬は、後述する土器4A類が製作された時期に行われた可能性が強い。

ちなみに、埋葬人骨より南の5Jグリッドだが、おなじⅢG層中で出土したカワナによる放射性炭素による年代測定では、7890±440B.P.という結果が提出されている。

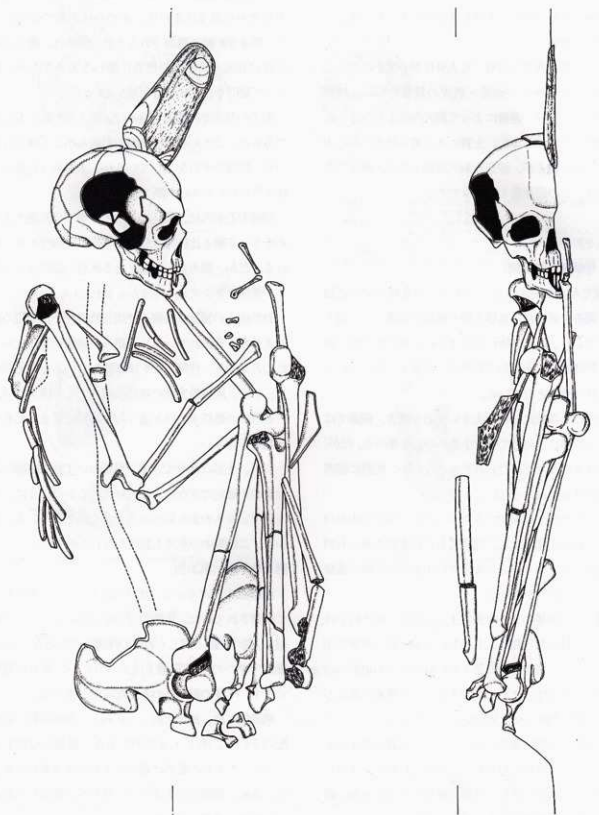
被葬者は、身長150cm強の壮年男性で、全体として、遺存は極めてよく、出土時の顔色の骨格は生々しささえ感じた。末節の一部を欠くが、洞穴天井の落盤や獣による大きな被害は受けておらず、腐敗とともに右肩部が落ち込んだ他は、ほぼ往時の位置関係を保っているものと考えられる。

ただし、脊柱は劣化が進行しており、手ボウキで土を払う際でも次々と剥落するほどであった。また、ⅢJ層にかかる足骨部分もやや白味を帯び、幾分脆弱となっていた。

第28图 屈神墓(1)



第29图 屈葬墓(2)



人骨は、右側頭骨が同心円状に破損しており、生活上に生じた事故の可能性が指摘されている。また、下部切歯の外側に向いた摩耗も特徴的であった。詳しくは付編を参照されたい。

なお、他の縄文包含層でも人骨片がわずかに出土している。その多くが幼児・乳児の散乱骨だが、埋葬を意図した遺骸の運搬によって洞穴内にもたらされたと判断できる。しかし、土質による遺存状況の差に大きな問題が残るが、妙音寺洞穴遺跡で葬送が確定できたのは、この屈葬墓1体のみである。

(2) 炉跡

第1号炉跡 (第30図)

洞穴入口中央部の5 I グリッドのII層下位で認識し、調査を進めた。III層灰層の堆積を破壊しつつ掘り込んでおり、写真図版に見るように、黒色味の強い覆土の特徴から、その掘方形態や、重複する第2号炉との先後は歴然としている。

内部は、壙底に一段と大きい平石を敷き、側面では掘方の傾斜にあわせてやや小さめの石を並べる。だが、石の抜き取りなどが行われたためなのか、配置に綿密な計画性を見いだせない。

また、断面では確定できなかったが、図中右中央の横置き石を床部として、周辺にもこれを取り巻く石列が確認できており、さらに後世の小規模な炉跡が重複している可能性が高い。

覆土は、前述のような黒色土が主体で、焼土粒子はほとんど見あたらない。しかし、下層灰層の堆積の主役を担ったと考えられる第2号炉跡などの石組炉との構造的な共通性、また、洞穴入口という構築位置などから炉跡と判断して大過ないものとする。

構築は、II層で確認できたことや、同質の覆土をもつことから、前期に行われたと考えられるが、土器が出土しておらず、詳しい時期は確定できなかった。遺物は、剥片類が8点出土したのみであった。

第2号炉跡 (第30図)

洞穴入口中央の5 I・5 J グリッドにまたがるIII

層灰層上位で第1号炉跡の調査中に発見した。具体的には灰層最上位のIII F層中に位置するが、そののあたりから掘り込まれているのかは判断できなかった。第1号炉跡に破壊される前後の関係は、掘り込み位置の高低と、覆土の色質に備わる大きなちがいがによって疑問を差しはさむ余地がない。

掘方の形態や内部の石組みは、第1号炉跡とおなじであるが、こちらの方が側面の石組みがよく残されている。底面の平石を欠いているが、本来あった姿か、抜き取られたのかは判断できなかった。

側縁の石組みは、裏込めとなる6層が自然流入土である3~5層と比較的見分けやすく、計画性を見て取れる。だが、掘方と、地山となる灰層の識別はしづらく、規模は多少大きくなるかもしれない。

自然流入の覆土には焼土や炭化物の粒子が周辺の灰層より多く含まれている。石組みの破壊が及ばなかったことも加え、往時の姿をほぼ残していると考えられる。また、灰層最上位の確認位置なども考慮すれば、灰層形成の最終末にほど遠くない時期に営まれたものと判断できる。

だが、土器は発見できず、早期のいずれの時期にあたるのか確定できない。これに代わるかのように、ホルンフェルスの剥片類が20点と多く出土している。しかし、この集中の意味も想定がなわなかった。

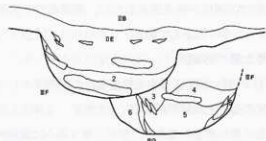
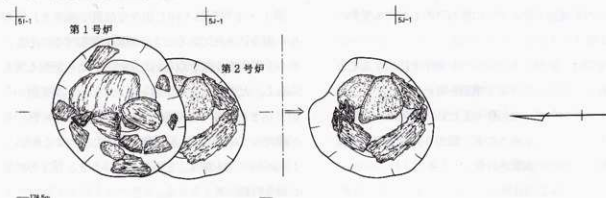
第3号炉跡 (第30図)

前庭部4 K グリッド、及び周辺グリッドにまたがって構築されていた。灰層の分布などからして、この周辺も、他の炉跡と同じく岩庇の保護下にあるといえる。確認できたのはN E層上位あたりだが、掘方が識別できず、下層の組み石のみとなってしまった。

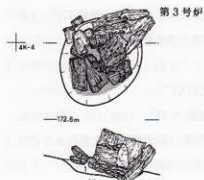
構造的には、掘方に沿った底石と、側面の囲い石の配列という、第1・2号炉とおなじ構造を目指しているが、こちらの底石は細かい平石の寄せ集めであった。逆に、側面石が大きく、一部だが、隙間なく組まれた状況が遺存していた。

覆土の基調は、N E層とほとんど見分けがつかず、確認のきつかけと調査の傾りは、より多い焼土の集中

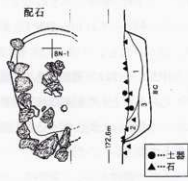
第30図 炉跡・配石・土壇・柱穴



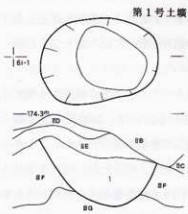
- 1 3/3 暗褐色土 灰層が顕著混入したものか、性質は上層の基本目層と同、
- 2 2/1 黒色土 上層基本目層よりも黒味強い、
- 3 6/1 暗灰色土 基本的に4層と解せる、
- 4 8/2 灰白色土 1層の黒石を包み第1層の黒色味強い土が浸透したものか、
- 5 6/2 灰黄褐色土 他に比べ粘性強い、地十らしい赤色ブロック層を含む、
- 6 7/2 黒い黄褐色土 4層より粘性あり、上の層入が多いか、
- 7 7/2 黒い黄褐色土 石積の埋め戻し層、灰層との差は曖昧、同ブロック含む、



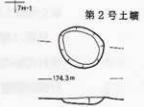
- 1 暗褐色土 徳土粒子(1~3mm)、炭化物繊維を含む、よくしまっている、



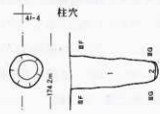
- 1 暗褐色土 小礫多い、粘性・しまりやや欠く、
- 2 暗褐色土 1層より粘性、粘性やや強く、小礫多い、
- 3 暗褐色土 炭化物(1~2mm)少量含む、上層より小礫少ない、



- 1 暗褐色土 炭化物粒子(2~3mm)、徳土粒子(1~2mm)、片岩粒子(10mm)少量含む、しまりない、



- 1 黒色土 片岩ブロックを少量含む、しまりよく、粘性ややあり、



- 1 2/3 黒褐色土 植物管が起層と思われる有機物を大量に含む、フカフカ、色調は上層の基本目層と類似、
- 2 5/1 暗灰色土 周囲の灰層混入するが、主体は1cm大の網目状片岩、



であった。そして、底石直上では、はっきりとした焼土の分布が確認でき、さらに底石そのものにも受熱の痕跡が残されていた。

構築期は、灰層より下層かつⅣ層中で終了することなどから、早期中葉沈線文系期と考えられるが、土器は出土しておらず、はっきりしない。遺物は、組み石の直上でホルンフェルスの剥片類が6点ほど出土したのが確定できたのみであった。

(3) 配石 (第30図)

前庭部 8 M・N グリッドにまたがって構築されており、N方向へと拡張を行ったが、調査区壁の崩落が心配されたため、完掘はかなわなかった。確認できた層位はⅢE層になる。

さも人為的な石の配列が調査のきっかけとなったが、結果的には下層の掘り込みを線取るように石が配列されていた。個々の石は10cm前後で、組まれたというよりは、置かれたという様子である。高さは172.5 m前後に集中し、一部は下層掘り込みの覆土上に存在する。掘り込み外形と石の配列はおおむね一致する。調査時には半断できなかったが、掘り込みの埋土は埋め戻されたと解して間違いないだろう。

配石のなかには焼け石が二三使用されているが、埋土中に焼土・炭化粒子などが集中する気配もない。岩庇より外の前庭部にあることから、炉跡とはいえない。用途は見当がつかない。

遺物は、条痕文系の土器が4点と、礫器が1点出土しており、細かな時期の特定はできないが、同期の所産と考えられる。

(4) 土壌

第1号土壌 (第30図)

5 Iと6 Iグリッドにまたがって検出した。6列の断面にかかり、上・下層との関係もあわせて観察できたが、Ⅱ層下限・Ⅲ層上位より掘り込みが認識でき、大部分がⅢ層のうち灰層に形成されている。覆

土はやや黒味がかっているが、灰層と類似している。

第1・2号炉跡と同じような位置や高さ、灰層中に掘り込まれていること、規模も類似することなどから、組み石を抜き取られた炉跡である可能性も考えられる。だが、この両炉跡と対比すると、第Ⅱ層から掘り込まれた第1号炉跡では、覆土との質・色の差が際立っている。これと同列に見なすことはできない。したがって、本竈は、どちらかという、第2号に近い構築時期が考えられる。

遺物は、剥片が40点出土したが、黒曜石の8 A種が11点と、多く出土している。

第2号土壌 (第30図)

7 HグリッドⅢB層中で検出した。同層より、より黒味の強い土の分布が確認できたため、土壌としての調査に及んだものである。だが、掘り込みは極端に浅く、規模も小さい。人為的な所作が及んだものかどうか半断がつかなかった。遺物は、時期不明の土器片が2点、剥片が14点出土した。

(5) 柱穴 (第30図)

4 IグリッドⅡ層の下位で検出した。径約0.2m、深さ約0.5mで、形態は竪穴住居跡に見られる柱穴とかわりなく、構築物の支柱と考えられる。

土層注記にも示したとおり、覆土上層はやわらかく、腐植質の黒褐色土で占められ、周囲の灰層との差は歴然としている。Ⅱ層調査中には認識できなかったが、この層の堆積時に構築されたことは確実である。最下層には絹雲母片岩の破片が敷きつめられたように薄い層を形成していた。

柱穴は確認できなかったが、木質の痕跡が土質に示されていると考えられる。おなじ腐植質のⅢJ層の形成が岩盤を伝う湿気の影響を受けたらしいことから考えると、構築物の廃絶後、残った柱が雨の吹き込みや、岩底から天井を伝う水分を集約する作用をうながし、これが土質を変化させたともとれる。

遺物は剥片が11点出土した。

4. 遺物の出土状態

(1) 遺物出土の全体相

妙音寺洞穴遺跡の調査区では、縄文時代早期から中期にわたる土器4,374点、石器1,215点、剥片類19,455点、骨角器類18点の、都合25,062点にも及ぶ人工遺物と、8,947点の骨貝類を検出した。

これらのうち、土壌水洗によって得られた遺物類が85%をこえるが、いずれにせよ、約80㎡の調査範囲としては莫大な出土量に遭遇したといえる。そのわずか15%ではあるが、出土地点を記録した5,064点を調査区に投影したのが第31・32図である。

なお、調査区の東南壁沿いは、調査期間や予算を確定する際の緊急の課題であった包含層の質と限界を見極めるため、重機で行った試掘調査の対象となった。そのため、掘りより採集した少量の遺物が残るのみで、出土地点は記録されていない。

また、これとは逆に、とくに調査区南壁際では、安全対策のための法面掘削や整形、壁面にかかる遺構の拡張時に出土した遺物は、設定した調査区外にあってその地点を極力ひかえるようにした。

さて、出土人工遺物の分布は、調査区の全面に均等に広がるわけではなく、大きく、洞穴の軸方向に沿って集中している。このうち、洞穴内では4列以奥に土器が集中して出土しており、とくに最奥のG列付近で条痕文系土器が大量に出土した。この集中は、通常に見られる不要物の投棄というよりは、遺棄行為を反映した出土状況と考えられる。

また、この集中は本洞部分についてのみで、前期の包含層がわずかに形成されたのみの棚状部ではほとんど遺物が見られなかった。

洞内ではほかに、入口南側の棚状部段差の直下でホルンフェルス製の石器や大型の剥片類が比較集中して出土した。付近は棚状部のせり出しがもっとも発達する箇所でもあり、洞穴奥と同様に、堆積の遅れが岩盤との間に生み出した空洞に、これらが置き去りにされたともとれる。

これに対し、洞穴入口で厚く堆積した灰層では、土器や石器などの人工遺物はあまり見られず、逆に灰の土質によって腐食を免れた骨貝類が大量に出土している。だが、これら有機遺物でさえも、5 I 付近の灰層中央では極端に出土量が減少し、全体では南に濃い環状に広がっていた。

さらに詳しく見ると、骨貝の環は、北東方で途切れ、南東で密になる。ここで、雨垂れによる土砂の流出を被る西方を補えば、洞穴軸に沿った馬蹄形が明確になる。第1・2号伊が構築・遺存していたように、灰層の中央をもつばら然焼施設に譲り、それを見守る定位置を避けて残滓が捨てられた結果ともとれる。

また、前庭部でも岩底に保護された灰層の広がりの中には、洞穴入口ほどではないにせよ、骨貝類の遺存が確認できた。さらに、骨類については、腐食の進行が貝類より遅いのか、とくに中型獣程度の哺乳類が灰層外の前庭部でも出土した。

一方、前庭部の南北方向では、土層の傾斜と堆積層の厚さが分布の集中傾向を助長している。すなわち、堆積層が発達しなかった北方では遺物がほとんど見られず、南ほどに密度が増してくる。ただし、これは平面的な傾向で、後述するが、前庭部の南方に堆積しながらも遺物をほとんど含まない土層も存在した。

前庭部では、洞穴主軸方向の南限にあたる7～9列の南壁際に人工遺物が集中している。とくに土器が多く、早期は7・8列付近、前期は9列周辺でまとまっている。これに対し、前庭部の北東側では分布が拡散し、土器は北に、石器は南に片寄る傾向がある。

また、調査区東南壁のさらに東の岩盤直下では、試掘溝にかからなかった堆積土を調査したが、ほとんど遺物が含まれていなかった。

以下、遺物の種類ごとに水平垂直分布を詳しくふれるが、細かい基準は遺物の説明時に行うとして、出土分布に関する図表を示すにあたり、土器及び石器の分類種を一覧できるよう、簡単な目安を示しておく。

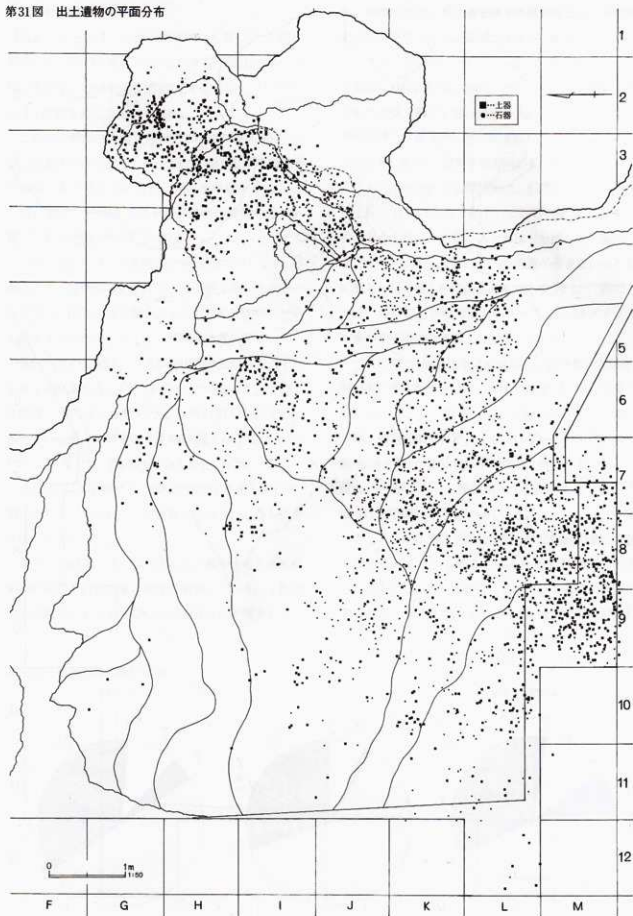
土器

- 1類 熱糸文系土器
- A種 薄手で熱糸文を施文するもの
 - B種 熱糸文系前半で熱糸文や縄文を施文するもの
 - C種 熱糸文系後半で凹線や熱糸文を施文するもの
 - D種 無文のもの
- 2類 沈線文系土器
- A種 細目の沈線で幾何学文様を描くもの
 - B種 太目の沈線で幾何学文様を描くもの
 - C種 貝殻縞文を施すもの
 - D種 熱糸文や縄文を施すもの
 - E種 無文のもの
- 3類 押型文系土器
- A種 山形文や簾状文を施すもの
 - B種 楕円文や類似文を施すもの
 - C種 熱糸文や縄文を施すもの
 - D種 無文のもの
- 4類 条痕文系土器
- A種 条痕文系初頭の文様を有するもの
 - B種 条痕文系後半の文様を有するもの
 - C種 条痕・擦痕文のみもの
- 5類 羽状縄文系土器
- A種 初頭に属するもの
 - B種 関山式に相当するもの
 - C種 黒浜式に相当するもの
- 6類 竹管文系土器
- A種 波状文や肋骨文を施すもの
 - B種 爪形文を施すもの
 - C種 横位の平行沈線文を施すもの
 - D種 縦位の平行沈線文を施すもの
 - E種 浮線文を施すもの
 - F種 縄文を施すもの
 - G種 無文のもの
- 7類 勝坂系土器
- 8類 加曾利E系土器
- 9類 所屬期が半断つかなかった土器

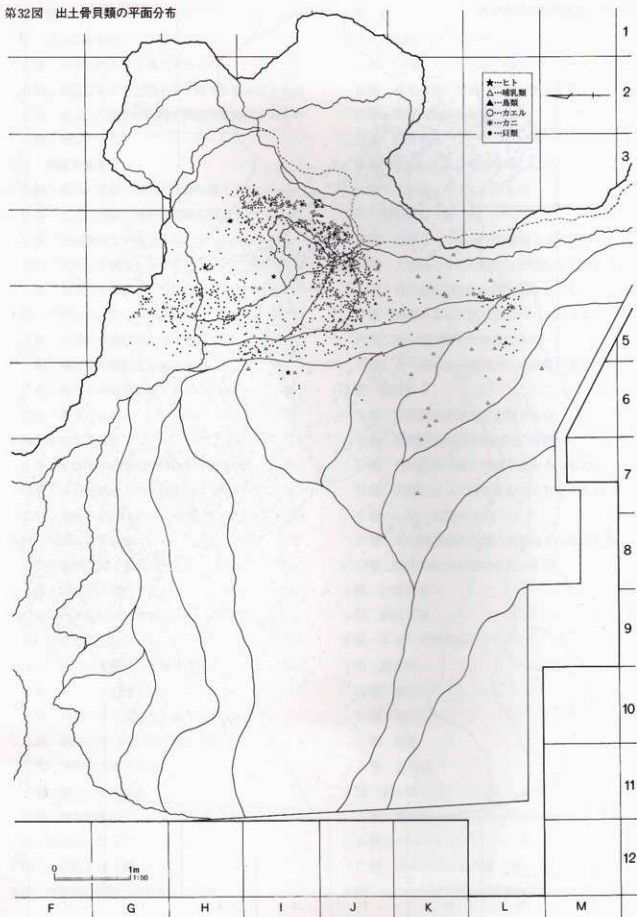
石器

- 1類 石鏃類
- A種 三角もしくは凹基の基部を作り出すもの
 - B種 基部の脚が明確に識別できるもの
 - C種 厚手で丸味をもったもの
 - D種 楕形のもの
 - E種 破損のため分類できないもの
 - F種 未製品と考えられるもの
- 2類 削器類
- A種 黒曜石・チャートを素材とする小型のもの
 - B種 大型品のうち定型的な形態加工を施すもの
 - C種 自然面を利用した握り部をもつもの
 - D種 剥離によって握り部をつくりだすもの
 - E種 握り部が特定できないもの
 - F種 その他および破損のため分類できないもの
- 3類 礫器類
- A種 定型的な形態加工を施すもの
 - B種 礫地の原形状を損ねないもの
 - C種 自然面を利用した握り部をもつもの
 - D種 剥離によって握り部をつくりだすもの
 - E種 小型・軽量のもの
 - F種 その他上記の分類にあてはまらないもの
 - G種 破損のため分類できないもの
- 4類 打製石斧
- 5類 磨製石斧
- 6類 スタンプ形石器
- 7類 磨石類
- A種 磨石
 - B種 凹石
 - C種 敲石
 - D種 台石類
- 8類 剥片類
- A種 黒曜石
 - B種 チャート
 - C種 ホルンフェルス他
- 9類 その他の石器類と石製裝飾品類

第31図 出土遺物の平面分布



第32図 出土骨貝類の平面分布



(2) 土器の出土状態

前述したとおり、今回の調査では4,374点の土器が出土した。このうち、2,118点が水洗で検出でき、さらに表採などの出土地不明283点を差し引いた1,973点が出土位置を控えたものである。

これらを製作の時期や系列別でみたのが第33図である。調査区全体で出土した土器は、約半数が早期後葉の条痕文系土器で占められ、残りを早期中葉の2・3類、主として諸磯a式土器が占める前期中葉の6類、そして分類不明が三分する。

だが、これをさらに洞穴部と前庭部に分けると、様相は大きく変化する。洞穴部では条痕文系の比率が一段と増し、出土比は6割をこえる。その分他類の比率が減少するのだが、とくに、早期前中葉が著しい。

洞穴内での1類は、1点が検出できたのみで、それも最も前庭部に近い4J-4ブロックであった。また、3類は、楕円文を分類した3B種が洞穴中程まで分布しているが、山形文の3A種は洞穴入口の5I-2・4ブロックまでで、洞穴内部では出土しなかった。

これに対し、2類はその数が前庭部より劣るものの、洞穴内のすべてにわたって分布しており、しかも大きな破片が多かった。

一方、前庭部では4類の出土比が減少するとともに早期前中葉と前期中葉の頻度が増加している。4類は出土点数そのものも1,134点から994点へと減少してい

る。中期前半の7類でも似た傾向があるが、100を越す点数が発見できている類では唯一である。

つまり、洞穴内部では、より古い土器は検出されず、分布は前庭部に片寄る傾向がある。そして、燃米文系から、押型文系でも古い色彩が強い一部の山形押型、楕円押型と波線文系、さらに条痕文系に至る変遷のなかで分布が拡大・充実する方向が見て取れる。

これらの平面的な位置関係は、前述したとおり、洞穴主軸に沿った方向で集中している(第34図)。早期前中葉の土器は、主軸からそれほど分散しない範囲でまとまっている。これは、当時堆積が進まなかった前庭部北の包含層との関係もあるだろう。そして、際だつてはいないが、前庭部でも7~9・J~Mグリッドに集中する傾向は各類とも似通っている。

これに対し、早期後葉は前庭部北にも分布が広がり、洞穴奥の集中をのぞけば、かなり拡散した傾向が見て取れる。しかし、前期の5・6類では一転して洞穴中程、前庭部南垂れ下、そして、7~10列南壁際の3箇所のいずれかに分布が集中するようになる。この位置は、中期の7・8類に至ってもかわらないが、中期では南壁際の分布を欠いている。

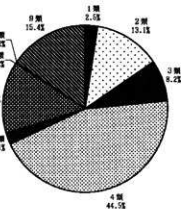
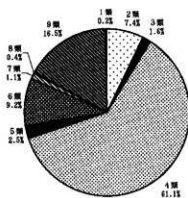
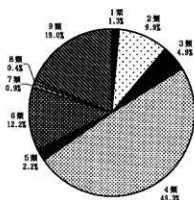
さらに、第1表と第35図を傾りに早期前中葉の土器を細かくみると、1類の主体となる1B種は、前述した集中のなかでも南に寄っており、これは、山形押型文の3A種の大勢とも共通する。対して、1D種は、

第33図 出土土器の類別比率

全体(4374点)

洞穴部(1826点)

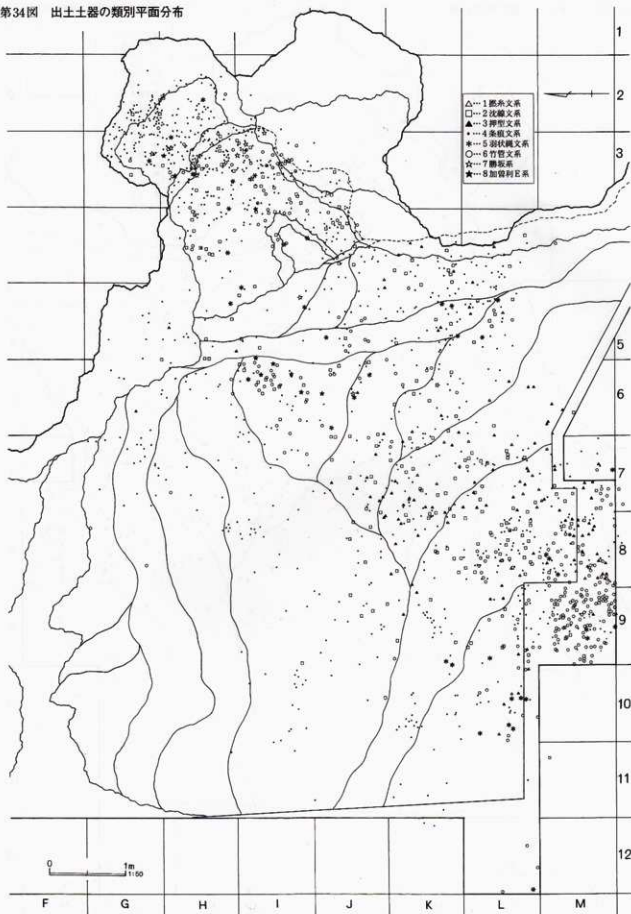
前庭部(2235点)



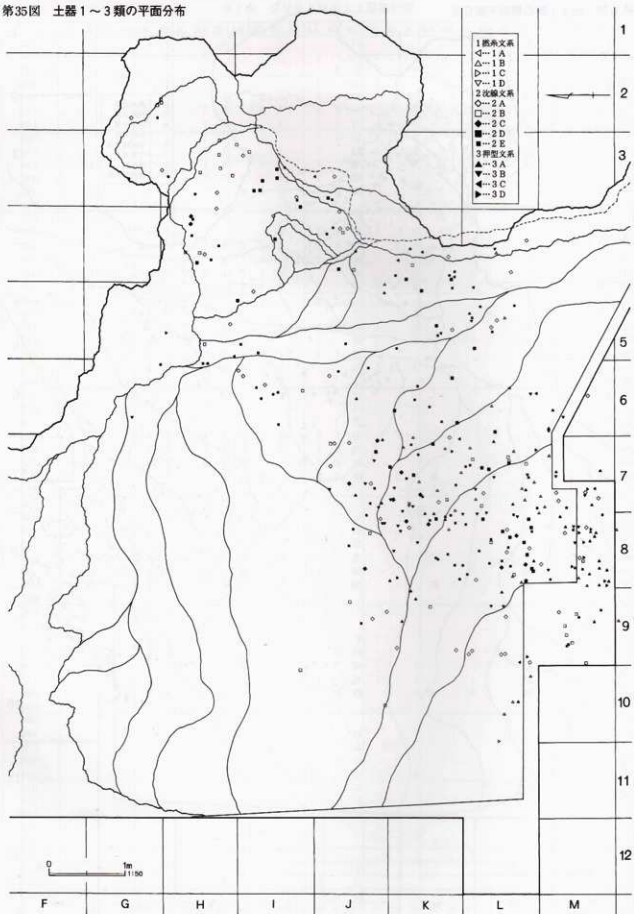
第1表 グリッド別出土土器集計表

	1A	1B	1C	1D	2A	2B	2C	2D	2E	3A	3B	3C	3D	4A	4B	4C	5A	5B	5C	6A	6B	6C	6D	6E	6G	7	8	9	計		
02G					1	1			1							71						1		2					4	81	
02H						2								1	110		1	3				1		1	6	4		1	13	143	
02I																6												1	5	17	
03G					1	1			1					1	105		1	1						1	3		1		8	124	
03H					3	6		4			3			6	4	242		1	7			3	4	2	2	20	16	7	2	52	384
03I					3	7		7	6		1	1		6	4	161						2	2	3	1	18	12	7	51	293	
03J					2			1	2			1		1	1	15						1							1	5	29
04H					2	2	2	2	13			1		7	2	72	1	4	7		1	2	1	1	8	3	3		40	174	
04I					1			2	1					2	53		1	2	2		2	2	1	15	10	1	2		29	127	
04J		1			4	3		4	8		1			3	83						1				8	2		33	153		
04K					3	1		7	7		3	2	5	2	38										3			7	78		
04L					3			1	1		2	2	2	3	53										2			24	95		
04M																												1	1		
05G																9													5	14	
05H					1	1						1	1	1	1	33	1		2									13	55		
05I					1			1	5		2			1	2	19		2	4						3	1	1	1	15	58	
05J										4	2	1		1	60		1	1				2						12	99		
05K				3						14	5	1	1		73		3	5				1			2	5	1	16	143		
05L				1	3			2	2	9	9	6	5	2	40		2	2			7	1			4			20	115		
06G														2	7													2	12		
06H									7						39							1		1	2			23	76		
06I					10	1			7			1		4	2	58	1		2		5	1		15	6	1	4	13	131		
06J					4		1		6		6	1		1	46		1	3						8	2	1	1	5	88		
06K				2				3	13		2	3	1	2	1	61					1			8	1	1		19	123		
06L				6				4	10		4	10	4		37						5			1				19	106		
06M					1						4	4	3		2													6	20		
07G																23												6	29		
07H																10												3	14		
07I																15						1						5	22		
07J					4	1	2	1	5		2	4	1		5	1	16					1		1				11	54		
07K		7		4	1	1	3	3	9		2	6	1	1	4	2	33								2			11	90		
07L		10			3	7	3	8	5		5	7	1	1	1	5	24							1				23	104		
07M		4			8	1			3		6	3	1	2	2	1	23		1		2				8		15	80			
07N																					1				2			2	3		
08C																9						1			1				2		
08H																15												1	10		
08I																15												5	20		
08J					1	1	1		2			2			1	15												5	28		
08K				1			2	1	17		4	5	4			25												28	88		
08L				3		4	2	3	10	15	5			1	52							3			13			22	133		
08M				4		4	2		2	7	22	5	2	7	3	1	80		3		3	1	1		39			77	193		
08N																2												2	2		
09G																												1	1		
09H																												0			
09I					1											8									1			3	13		
09J					2	1			1						2	14						1						3	24		
09K					2	1				3				1	1	24					2							9	43		
09L					6						2	1	1	1	1	34		1	4			1	1		12			7	71		
09M					2	6			3		1				2	43				3	23	1	19		63			18	184		
09N				1																								1	1		
10G																14												3	3		
10I																												1	15		
10J					1																							2	5		
10K															1	24												1	26		
10L		4	1							1			1			12					2	4		1	8			9	43		
11H																1													1		
11J																1												2	3		
11K																2												1	3		
11L														1														6	7		
11M																						1							1		
12L																					1		3					2	6		
遺構																2													2	4	
5日人骨下					7				6					2		11														26	
出土地不明	1				1					1	1				1	26		2			6	15	1	30	1	14	4	179	283		
総計	1	53	1	4	95	59	17	68	192	91	71	38	14	66	36	203	10	22	63	30	39	63	10	7	317	69	38	16	831	4374	

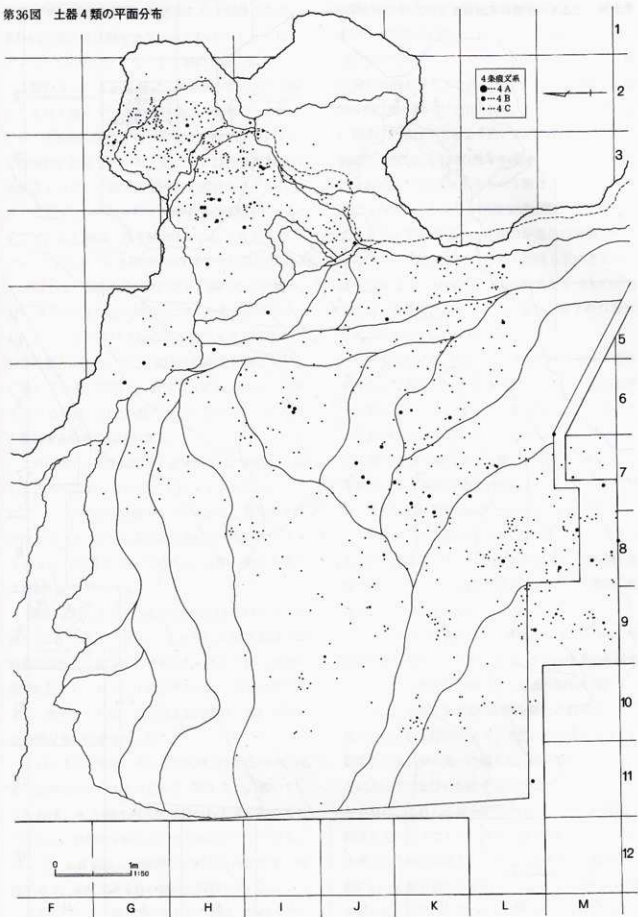
第34図 出土土器の類別平面分布



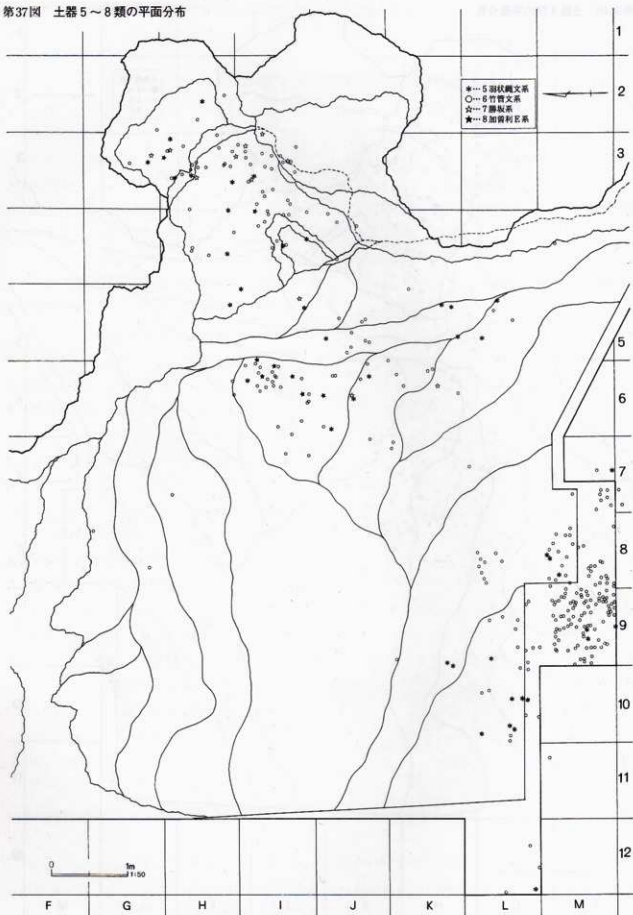
第35図 土器1～3類の平面分布



第36図 土器4類の平面分布



第37図 土器 5～8類の平面分布



7 K グリッドでまとまって出土した1個体のみで、具体的な傾向は判断できない。これは、5 L・10 L グリッドで出土した1 A・1 C 種にも通じる。

2 類のうち、A・B 種は、早期前中葉の分布全域にくまなく及んでいる。2 C 種は1個体のみ出土したが、主軸線の北に平行するような形で6 m にわたって直線状に散乱していた。逆に、2 D 種は主軸線の南に多く分布し、加えて洞穴内の棚状部直下から4 K・5 K グリッドにかけてで集中する気配を見せる。そして、2 E 種は、分布域は広いが、5 K から8 L グリッドにかけての主軸沿いに集中する傾向がある。

3 類では、前述の山形文に対し、楕円の3 B 種が、3H-4ブロック付近の洞穴内にまで分布を広げるとともに、5・6列では主軸の南に、7・8列では北に分布の重心がある。また、縄文や捺糸文を施文する3 C 種も3 B 種の傾向と一致する。これとは逆に、無文の3 D 種は、出土点数が少ないながらも、3 A 種と類似する分布の起伏がある。

これに対し、第36図に示した4類では、前代にも増して分布が広がるなかで、9 K グリッドなどのように、いくつかの小さな集中が見取れる。最も大きいのは3 H グリッドから洞穴奥にかけての集中で、2・3-G・Hの4グリッドだけで、4類の総出土量の3割強が出土している。

4類は文様之乏しく、有文土器の出土率は5%にも満たない。加えて、4 A・4 B 種は条痕文系期の細時期を区分する数少ない目安となるものだが、遺物の説明に記したとおり、小片が多い上に、初見の要素が多く、歴然とした輪ヶ島台式土器の他は、確たる弁別の指標を見いだせなかった。

そのような分類者のしらぎを反映しているのか、両者の分布傾向には大きな差を見て取れない。強いというならば、4 A 種は洞穴主軸線から大きくそれることではなく、早期前中葉に近い分布傾向を示している。対して、4 B 種は、前庭部の北部などに拡散する傾向があり、条痕文系全体の傾向と類似している。

前期にいたり、第37図に示した5類は、早期末から

前期初頭の縄文施文土器、広義の関山式土器、関東平野でいう黒浜式土器が出土している。これらは、洞穴内から雨垂れ下までの分布が多く、とくに、5 A 種は洞穴内出土が大半を占める。また、5 B 種も7割が5列に奥の洞穴内で出土した。しかし、黒浜期の5 C 種は、雨垂れ下でもより広い範囲に分布しており、前庭部南壁際にも明確な集中が認められる。

4類に次ぐ535点が出土した6類は、竹管文系を念頭にしたが、その大半が諸磯 a 式土器で、C 種は a 式と b 式が混在するが、沈線の単位化の有無で弁別が可能で、D 種が c 式、E 種が諸磯 b 式にあたる。縄文を施文した F 種では三者の特長をもつものが有文に近い比率で出土している。また、無文の G 種は b 式にとまらぬものと考えられる。

これらが洞穴内、雨垂れ下、南壁際の三個所に集中することは前述したが、6 A 種はなかでも南壁際に多くが集中している。逆に、6 B 種は洞穴から雨垂れ下に比重が移り、6 E 種は洞穴でも奥でまとまっている。6 C 種を沈線の単位化で分離し土地を探ると、ほぼ6 A と6 E 種の分布と合致する。そして、6 D 種は、ほとんど洞穴でしか出土がみられなくなる。

中期に至っても洞穴内への分布の偏りはそのままであるが、前庭部では、この期の遺物を含む崩落層を重機で除去しており、実際は前庭部の上位でも遺物が散在していたと考えられる。

このように、調査区内での遺物分布の広がりや、早期前中葉の洞穴内への進出にはじまり、中葉から後葉にかけての全面的な展開に至る経過が如実に現れている。また、条痕文系末期の間隙を経た前期初頭での急激な退行と散布範囲のブロック化、その後における前庭部の衰退と洞穴部への偏りも、細分類をひもどくことによってつまびらかにすることができる。

さらに、これらの接合関係ではいくつかの時期的な特徴を見いだすことができる。第38図に示した早期前中葉土器の接合関係では、とくに沈線文系土器の広範囲にわたる接合例が目立つ。しかし、同個体の散乱や流出は、脈絡なく広がるわけではなく、洞穴主軸方

第38図 土器1～3類の平面接合関係

